

書せり云く奥義大なるパビロン、地の淫婦と憎むべき者との母。』
パトモスの預言者と同じくデョーヴァンエはこれを見て（深く怪しみ驚いた）のであつた。

十三の卷

紫衣の獸

千五百三年

底なき坑より上る獸——約翰默示錄第十一章七節

ファイエソレにあるレオナルドの葡萄島の小部分をば、これに隣れる地の所有主たる百姓が頻に垂涎して、法庭に持出して我が物にして見せると嚇したので、レオナルドはこれに關する事を一切デョーヴァンニ・ボルトラフイオに託したが、今や親しく逢つて話したい事が出来たので此の弟子を羅馬へ呼び寄せたのであつた。そしてデョーヴァンニは途すがらオヴィエトに立ち寄つて其の寺の新に建つた禮拜堂にルカ・シニョレルリが此の頃描いた有名な壁畫を見たが、其の中の一つに非基督の出現を示してあつた。

神の敵なるサタンの容貌から多大の印象をデョーヴァンニは得た。蓋し其の顔は邪惡なくして唯無限の憂愁を湛へ、明眸は煩悶のやさしさを宿して神を棄絶したる智慧の悔恨を其の中に映じ、耳は半人半羊のサチルに似、指は動物の爪に類似せるにも拘らず容貌は美しかつた。デョーヴァンニは精神錯亂の際に屢々見るやうに、今も此の顔の背後に更にこれと相肖て然も神々しい顔があるやうに思つたが、併しそれをきつぱり認めた譯ではなかつ

た。

此の畫の左方に非基督が墜落する模様が描いてあつた。彼は目に見えざる翼で天に翔り雲に乗つて來る人の子の人格を伴ひ裝うて生命ある者と死したる者とに對して審判せんとした時、天使長に追ひ捲られて地獄の坑の中へ逆落しに墜ちてゐるのであつた。斯くの如き人間の翼、飛翔の失敗の圖を見て、デューヴァンニは嘗て師匠レオナルドを恐ろしく疑つてゐた事を思ひ出した。

彼が壁畫を眺めてゐたとき同じくこれを見てゐた二人の人がゐるが、其の一人は頑固な身體の法師、今一人は瘦せてひよろ長く、幾つ位になるのか薩張り見當の附かぬ男、其の顔は飢ゑて尖り、中世の雲水がゴリヤルドと名けた僧服を着てゐた。デューヴァンニは此の兩人と親しくなつて道を共にするやうになつた。法師はトマソ・シュヴァイニッツといふ獨逸人で、ニューレンベルグにある某オーガスチン派の僧院に圖書係を奉ぜざる者、今回寺録に關する係争のため羅馬に上つたのであつた。他の一人もザルツブルグ生れの獨逸人で、名をハンス・ブラッテルと云ひ、シュヴァイニッツの秘書と童坊と馬丁とを兼ねてゐた。旅行の途々三人は教會に就いて議論を闘はした。シュヴァイニッツは慌てず騒がず學理上の明智から推論して、法王の權威の安泰無事を説く者の如何に愚昧なるかを指摘し、且つ獨逸は今後二十年を出でずして羅馬教會でふ堪ふべからざる輓より脱するであらうと預言した。

デューヴァンニは此のニューレンベルグの法師の丸々と太つた顔を眺めて腹の中で思つた。「此の人は自己の信條のために生命を賭するやうな人ではない。サヴォナロオラとは違つて火に面を向けないのだ、併し事に依つたら寧ろ此の人の方が教會の危険人物かも知れぬ。」

羅馬に到着して間もないこと、或る夜デューヴァンニは聖彼得の廣場で僕僧ハンス・ブラッテルと出會つた。ブラッテルは早速デューヴァンニを誘つて外國人經營の酒屋が澤山あるシニバルチ小路へ這入つて、銀の箱の看板を懸けてある小さな酒店を潜つた。此の店の主人ヤーン・フロミーはボヘミアの宗教改革家たるヨハン・フッスの異端説を信じ且つフッスと同じチエック人で、自由思想家、乃至羅馬天主教に敵する人々（斯の種の新人は日々増加して教會大改革のために道を拓いてゐた）に美酒を振舞ふのであつた。

そして特殊の人に限つて這入るべき奥の部屋には此の時可なり多勢の人が卓を圍んでゐた。上座に坐れるは例のシュヴァイニッツで、酒樽に凭り掛つて、肥えた兩手を腹の上に載せ、鉢切れさうな顔は少しく間抜けて見え、疑ひもなく既に夥か飲んでゐた。そして時々盃を蠟燭と同じ高さに上げて其の焰で透しながら、ライン酒の稍薄白き黄金色を歎賞した。

一方では氣性の荒々しい小柄な僧マルチノは羅馬教會の誅求を痛罵して頻に憤怒の氣焰を吐き散らしてゐる。「此處の坊主共の手に掛るよりも強盜の手に掛つた方が優しぢや！ 毎日の強奪はあれはまあ何うしたものぢや！ 樞機官の梵妻は懺悔を聴く坊主に呉れてやれ。書記僧、扈從、門番、馬丁、料理番に呉れてやれ！ 彼女のために汚れ水を瀉してやる男に呉れてやれ！ お、神様、私達を赦して下さい！ 誠に（彼等は新バリサイ人、神を賣る人なれ！）と歌にある通りでござります。」

するとハンス・ブラッテルは座から立ち上り、鹿爪らしい顔で、のろくくと舌鈍く言つた。「偕て諸君、樞機官一同は打ち連れて主人たる法王の前に出て訊ねるやう、（如何やうに致しますれば私達は

救はれませうか？」するとアレキサンダーはこれに答へて「これを予に訊いて何にする。法律には何と書いてあるか——須く黄金白金を愛すべし、汝の心、汝の情、汝の力を捧げて直向きにこれを愛せよ、汝の富める隣人を愛すること猶汝自身を愛する如くせよ——と正に斯くの如く記してあるぢやらう。然れば汝等も偏に此の通りにすれば救はれるのぢや」と言ひ畢つて法王は席に坐しました。そして再び申しました。「夫れ物持ちは福なり、予の顔を拜し得べければなり、獻品する者は福なり、予をして我が子息よと呼ばしむればなり。黄金白金の名に於いて來る者は福なり、羅馬法王は彼等のものなればなり。されど空手にて謁見せんとする者は禍なるかな、寧ろ首の廻りに石臼を縛して海の底に投げ入るゝに若かず。喝」とすると樞機官達は「誠に貌下の御諭旨の通りに我等遵奉致します」と答へました。其の時法王は「生ける者、死したる者を予が侵した如く唯今予自ら範例を示して民を侵すに依り、汝等宜しく予に倣へ。」

此の奇抜な諷刺を聞いて一座の人は大分陽氣になつた。尋いでオルガン教授にして美貌の老人オトー・マルブルクは子供染みた微笑を湛へて一首の罵倒詩を誦した、此の詩は刷り上るなり羅馬市の人々に洩れなく配つたばかりのもので、無名氏からバオロ・サヴェルリと云ふ貴族に送る書翰に擬してあつた。そして右の貴族は有福なため教會から迫害を受けたので羅馬に居堪らず逃げて神聖羅馬皇帝の許へ行つた人であつた。罵倒詩は法王家の罪惡や忌まはしき事共を長々と列擧し、僧官賣買の非を鳴らし、ケーザルが兄を殺した事と法王が娘と通ぜる事を擧げて結びとなし、痛烈に歐羅巴の諸君主に訴へて、殺人者の巢窟、人の形を扮へる醜汚なる爬虫を討滅するために先づ連合するの要ありとて、それを懲懲し且つ神の教會の信仰始まつて以來未だ會て敵として法王アレ

キサンダー六世と子息ケーザルの如き極惡無道な奴がるた事はないから愈々非基督が統治し始めたのだと斷言してあつた。

次いで法王アレキサンダーは果して世にいふ非基督であるか否かに就いて人々の間に議論が起つた。先刻の書翰を読み上げたオトー・マルブルクはこれを否認して、ケーザルこそは非基督である、彼は疑ひもなくアレキサンダーの後繼者たらん事を志してゐるのだと主張した。すると僧マルチノは別の議論を立て、非基督なる者は實は形のない者である。何故ならアレキサンドリアの聖シリルは「非基督と稱せらるゝ地獄の子は實に惡魔に外ならず」と言つたからであると論じた。

するとトマソ・シユヴァイニツは頭を振つて、聖ジョン・クリソストムの語「こは何者なるか。サタンなるか。否らず、サタンの力を承けたる人なり、蓋し彼のうちには人と惡魔との二つあればなり。而して彼は或る處女の腹に宿りて其の子息とならん、而して其の名はアレキサンダーにも非ずケーザルにも非ず」を引き、更にシリアのエフライムの語「惡魔はダン族の處女を誘ひ、其の女娠みて子を生まん」とあるを引用した。人々は質問して疑惑を散せんとてシユヴァイニツの周圍に群つて來たが、彼は手で黙れといふ意を示して、更にサイブラスのデローム、イレネーウスをはじめ其の他の教父の語を借り來つて非基督の出現の近き事を語つた。

即ち彼は狼憑きの如き顔であるが、多數の人はこれを基督の顔と見誤るべく、そして彼の力は驚くべきもので、海に命じて靜謐ならしめ、太陽を暗くし、山を動かし、石をパンに變じ、飢ゑたる者に食を與へ、病める者、

啞、盲人、蹇を癒す筈であると。

「お、憎い犬奴！」とマルチノは狂氣のやうになつて拳で卓子を叩いた。「併しトマソさん、其奴を信する者はありませんまい。赤子でさへ騙されないと私は思ふが。」

「否信します。多數の者は信するでせう」とシユヴァイニツツは首を振つた。「彼は神聖てふ假面を被つて横道へ外れるやうに人々を嚮導するのぢや。彼は肉體を苦しめ、貞潔な生活をして女人の愛を賤しみ、且つ肉食せず、獨り人間のみならずあらゆる息ある生物の愛を受け、恰ど鴝鳩見たやうに奇妙な騒々しい聲で斯う言つて欺きます、（我に來れ、勞働する者、重く荷へる者は凡て來れ、我れ汝に休息を與へん）。」

其の時ヂョーヴァンニは息を殺すやうにして口を挿んだ。

「それでは誰が其の者を非基督だと看破するのです？ 誰が假面を禱ぐのです？」

シユヴァイニツツは穿鑿の目を深くしてヂョーヴァンニを見詰めて下の如く答へた。

「それは人間には不可能です、と言つて神がそれをなさるのでもない。聖徒すら光と闇との區別は出來ますまい。其の時になればありとあらゆる人々は疲れに疲れて劫初以來の大混亂を來します。人々は山に對して（我々の上に落ちて呉れ）と言ふし、丘陵に對して（我々を蔽うて呉れ）と言つて、將に地上に來らうとする恐怖と哀しみの預期とのために氣絶します。何故なら今は既に天の力が失せてゐるからです。そして正に其の時です、非基督が出現するのは！ 彼は最も高き者の殿堂の高御座に坐して、（お、信仰なき者よ！ 汝等象を乞ふにより今其の象を與へる。我を見よ、此の我は人の子。生ける者、死したる者を裁くために雲に乗つて來たのであるぞ）

と宣言して、邪惡な精緻を凝らして作つた大きな翼を身に付け、天使に扮へる弟子の群に取り巻かれて電雷の中に飛翔します。」

これを聞けるヂョーヴァンニの顔は死の如く青醒め、目は恐怖に襲はれながら、ルカ・シニョレルリの壁畫の中にある非基督の着物の廣い髪を思ひ出し、並びにレオナルドが寂莫たるアルバノ山嶺の崖縁に立つてゐた時、風が其の肩をバタ／＼揺ぶつて其處に髪を作つてゐた事を思ひ出した。

丁度其のとき稍大きな部屋から女共の高い笑ひ聲が聞えると同時に彼方此方に走つて椅子を引つくり返し硝子を破る騒々しい音がした。これは餘り眞面目な議論を聞くを避けて此の室へ逃げて來たハンス・ブラッテルが給仕の女共と巫山戯て跳ね廻つてゐるためであつた。そして間もなく彼等は絃に合はせて古い唄を歌つた——

やんれローザは酒屋の娘

ブンと匂うて縹緞好し、

アーヴェニ（南無）を唱へにやならぬ、

やんれ榮ある乙女。

宴の主はお前さん、

野千の面を被つてなう、

しやんと白醒の曲者ぢや。

私の自慢はお前さん、

羅馬教會何のその、

宴主の酒樽私あ可愛い、

キプロス島のヴィナスの、

手管や、それにキュービッドの矢、

坊主頭も何のその、

坊主の頭巾何のその、

此の心臓が防がれうか、

唯つた一度の接吻で、

首斬臺に上るとも、

惜しくはあらぬ此の性命。

やんれ御坊よ、此の私を、

酒に飽かして下しやんせ、

否と言ふならお前さん、
袈裟や衣を奪りまする。

何が恐かる坊さんは、

まこと噂の言ふ通り、

羅馬で金貨をチンチロリン、

音さすだけでお前さん、

掟の方から道避ける。

やんれ羅馬は泥棒の宮よ、

地獄へ至る茨道——

僧正の酒は女のため、

さ、さ、来い阿魔つちよキッスしろ。

イリヌスの酒神のため、

神を頰めるため、

さ、さ、飲めやく、酒を飲めや。

トマソ・シュヴァイニッツは歌を聞いてゐるが、肥えた彼の顔は此の時齒を露はして福々しく笑つた。

二

レオナルドはデョーヴァンニを助手として羅馬のサン、スピリト病院で再び解剖學の研究に着手した。併しデョーヴァンニは兎角元氣を失くするので何か娛しみを與へて氣晴らしをさせようと思つて或る日ヴァチカン宮へ連れて行く事にしたが、これは法王が新大陸に於ける西班牙、葡萄牙の領地の境界を定めるために學者を集めてこれに就いて議論させる筈で、其の決定をするのは教會の首長たる法王自身が任に當る事になつてゐた。デョーヴァンニの好奇心は動いて師匠の誘ひを容れたので、二人はヴァチカン宮へと出掛けた。

そしてアレキサンダー六世が黄金薔薇章をケーザルに授與した法王の間を過ぎて、今はボルヂアの間と呼ばるゝ奥の部屋に通つた。其の迫持、穹窿、アーチとアーチの間の壁の空間を飾れる燦爛たる壁畫はピンツリッキオの筆に成り、題材は新約聖書、聖徒の傳記、異端の神話から採つたもので、例へばオシリスがイシスと結婚式を擧げて、人間に地を耕し果實を探り葡萄を植ゑる事を教へてから、一旦人間の手に掛かつて殺されたが、再び蘇生した後は地を去つて白牛即ち擬ひもなきアピスとなつて再び現れる處が出てゐた。如何にボルヂア家が紋章なればとて牡牛を神格に陞せて然も基督教の首長たる法王の部屋に於いてこれを見るのは聊か奇妙ではあるが、然

かも生の中に充溢せる悦びは二様の題目、即ち神聖と褻瀆、基督教の神秘と異端の神秘、デュピターの子とエホヴァの子とを巧みに調和してゐた。そして孰れの畫も筆者の故郷たるウンブリア地方の特色を宿して、廣やかな丘陵の間にある細い絲杉は軟風に吹かれて首を曲げ、鳥は愛の新春の戯れをなし、聖エリザベスが聖母を抱いて（御身の胎内の子は祝すべき哉）と叫んでゐる傍らに、一人の少年が犬にチン／＼を教へてゐるし、オシリス、イシスの結婚の圖では裸體の少年が神聖の鵝鳥に跨つてゐるなど凡そこれに類せる歡びの心は畫中の隨處に現れて、花を飾りて絢爛たる客間にも、香爐と十字架とを所持せる天使にも、酒神の杖と果物の籠とを手に持つて山羊の形せる足で踊れる林野の神にも、朝日の如く輝々として生の悦びを吐き出せる紫衣の神秘な牡牛にも、此の種の氣分は充ち満ちてゐた。

デョーヴァンニは心の中で訊ねて見た。

『これは一體何だらう？ 神を瀆す爲に描いたのか、それとも兒戯に類せる無技巧の遊びか？ あのエリザベスの顔に現れてゐる神聖な感動はイシスの顔のそれと同じであるまいか？ 人の手に掛かつた牡牛が甦つてアピスの形を取り、それが直ちに太陽になつてゐるが、其の太陽を拜せる埃及の僧の顔と、あれ彼處に昇天の主の前に跪いてゐるあの法王の顔と——恍惚として祈念せる此の二つの顔は同じいのであるまいか？ 人々はボルヂア家の紋章たる牡牛、即ち化して黄金の牛となつた神の前で禮拜して賛頌の聖歌を唱へ、其の神壇に香を焚くが、焉ぞ知らん此の神は則ち羅馬法王に外ならないのだ。詩人は諷諷して（大ケーザルあるが故に羅馬は今は大、而して今支配し給ふアレキサンダー六世は神におはす）と歌つて法王を神と呼んでゐるのだ。』

神と獸とが相似て居る事を思ふとデューヴァンニは馬鹿らしくもあり又恐ろしくもあつた。そして壁を飾れる立派な晝を打ち眺めながら此の部屋にぎつしり詰まつて法王を待てる高僧や大官達が互に談話してゐるのを聞いた。

「ベルトランド殿、貴殿は此處へ参られる前に何處にゐなすつた？」とフェルララからの大使に訊ねたのは同國の宮廷から來てゐるアルボレア僧正であつた。

「それがしは御本山から参りました。」

「猊下の御模様は如何でござりましたな？ 矢張り御疲勞の體で？」

「御疲勞どころか見ん事お唄ひになりました。猊下の御音聲は何とはなしに唯最う神さびて天使のやうに莊嚴に聞えましたから、身は天上界にゐるやうに感じました。聖盃をお上げになつた時などは何としても涙が零れましてな、はい、これは某のみに限らず澤山そんな人がござりました。」

「ミクエレ僧正の逝去は何の病氣でござりましたらう？」と卒然として佛蘭西大使が訊ねた。

「悪い物を飲んだからでござる」とドン・ファン・ローベスは卒氣なく答へたが、法王宮廷の人達は大抵此のローベスと同じ西班牙人であつた。

「噂に依りますと僧正殿の逝去の翌日、猊下には御悲歎の餘り西班牙大使の謁見をお許しなかつた」とかとベルトランドが言つた。

すると居合はせた人々は互に目を見合はせたが、それも道理、此の談話の中には言外の意味があるからで、法

モンレアレちや！

「これは必ずチベルの水が各々方に善くないからでござる」とベルトランドは狡しくも誤魔化した。

「二人濟めば又一人！ 一人濟めば又一人ちや！」とアルボレア僧正は再び歎息して、「今日は無事息災だが明日は——」

一同は黙つた。法王の甥ドン・ロドリグエス・ボルチアが一團の廷臣を引き具して隣室から此處へ這入つて來た、

王の悲歎といふのは死んだ僧正の財産が法王の見積りよりも少なかつた事に連關してゐるし、不健全な飲料といふのは法王が飲ませた美味の白い粉の事で、日々チリ／＼と身體を殺して行くのであつた。蓋しアレキサンダーは金を得るために斯くの如き無造作な方法を發明したのであつて、樞機官の収入は知悉せる事として入用の際はその中の最も富裕な者をあの世に送つて、該樞機官の遺産は我れ自ら相續すると宣言する事にしてゐた。そして殺す前に其の犠牲をば宴に招いて身體を肥滿せしめるのであつた。獨逸人の式部長官ヨハン・ブルックハルトは法王の日記の高僧逝去を記せる條に（盃より飲めり）といふ深長なる意味の短句を屢追記して居た。

「それで、御坊、あの話は實際でせうか？ 唯今モンレアレ僧正が病氣といふ話は？」と式部官ドン・ペドロ・カルランカが訊ねた。

「實際左様な噂がござりますか？ して病氣は何でござる？」とアルボレア僧正は驚愕して叫んだ。

「吐瀉でござる。」

「やれ／＼、今度で四人目ぢや」と僧正は歎息した。「オルシニ、フェルラリ、ミクエレ、そして此の度の番は

「猥下ぢやい！猥下の御入來ぢやい！」と室内の誰れ彼れは囁いた。
そして人々は距離を作つた。同時に扉が明いて法王アレキサンダー六世は謁見の間に姿を現した。

三

アレキサンダーの若い頃は非常な美男子で、人の傳へる處に依れば、女をチラと一目見るだけで以て恰もそれを牽引する魔力が目の中に磁石力の如く集中せるやうに思はれて女は最も荒まじい熱情を湧かしたと云ふ。今では年が年であるしそれに肥満してゐるので自ら顔立ちが粗野になつて且つ衰弱の氣味に見えるけれども、然かも尚ほ何處となく一際美しい佛を留めてゐた。皮膚は青銅色を呈して頭は禿け、頂に少しく胡麻鹽の毛があり大きな鼻は尖つて髯はしやくれ、目は昔ながらに活き／＼として、むくれ出て厚い唇は好き者らしい形相を示してゐるが、併し全體の表情は何となく單純であり無邪氣であつた。

デョーヴァンニは法王の顔を恐ろしいとも残酷とも思はなかつた。元來アレキサンダー・ボルヂアは趣味性を最高程度に有つてゐるし、それに其の外貌は人を牽引するに足るので、彼の言ふ事、乃至言はんと装ふ事、且つ行ふ事をば其の何たるを問はず至極正當であるかのやうに思はせるのであつた。

「猥下は茲年七十の御老齡であるのに一日増しにお若く拜見致します」と大使達は噂してゐた、「猥下の御憂慮は如何ほど重大なりとも二十四時間續けばそれでお濟みになつて其の以後は快活になられまするのみならず、猥下が親しくお手を煩される事は何事によらず凡て見事な結果になります。元々御子様達の名譽と幸福を念と

なさる計りで他の事は聊かも御配慮なさりませぬ。」

此のボルヂア家は西班牙はカスチルのムーア族から出たゞけに、法王の皮膚は青銅色を呈して唇は厚く且つ紅に、目は阿非利加に住せる亞刺比亞人のやうに爛々たるのは異むに足らなかつた。

デョーヴァンニは獨りで思つてゐた。

『此の人が古代埃及の牡牛即ちアピスの歡喜と勝利とを背景としてゐるのは如何にも尤もだ。』

まこと嬰鏢として健かなる七十歳の法王は彼の紋章の牛にして同時に太陽神、換言すれば歡喜と淫蕩と生々繁殖との神に全然似てゐた。

法王は室に這入つて先づ猶太人の金工サロモネ・ダ・セッサと言葉を交した。此の猶太人は教會旗手の節刀にシ―サー凱旋の圖を彫つた外、アレキサンダー六世のために見事なヴーイナス像を綠玉に彫つたのであるが、法王は其の出來榮えに感歎する餘り、嚴肅な會式に際して人民を祝福する時に使用する十字架の中に此の像を嵌めた。然れば法王が十字架に接吻するのは同時に又愛の女神に接吻する事であつた。彼は種々の罪惡を犯す癖に妙に不信心の方ではなく、實際は敬虔であつたが就中童貞マリヤを深く敬してマリヤこそは最と高き者の御座に對して自分を執成して呉れる者であると思つてゐた。法王が今サロモネに話したのはランプの注文に關する事で、これは愛嬢ルクレチアが病氣本復すれば御禮として聖マリヤ・デル・ポポロ寺にランプの奉納を誓つたからであつた。

そしてアレキサンダーは窓際に坐して寶石の吟味を始めたが、由來彼は寶石が非常に好きであつた。長い恰好

の好い指で密と寶石に觸れたとき厚い唇は微笑を帯びて上下に離れた。最も嗜好に投ぜるのは緑玉髓であるが、これは緑玉よりも色が濃く、金と紫と緑とを交へた神秘的な光を發してゐた。尋いで寶物を入れてある箱から眞珠の小篋を取り來らしめた。そして此の篋を明けるたび法王は可愛いルクレチアを聯想するが、實際ルクレチアは眞珠のやうな女であつた。此の時法王はフェルララの使節を呼んだ。フェルララの君公アルオンソ・フデステは實にアレキサンダーの駟馬であつた。

「これベルトランド、ルクレチアへの贈り物を予が其方に託するまで猥に當府を去つては可かんぞ。此の叔父の許から空手振で行つては相成らぬぞ。」(法王は外見掛けだけは我が子ルクレチアを姪と呼び得る程の用意を日頃から充分にしてゐた)

そして篋の中から榛の實ほどの大きさあつて無限に高價なる印度産の桃色眞珠を取り出してそれを光線に當てながら凝と見詰めた。此の珠をルクレチアのあの白い胸に飾つたらと、一旦は思つたが、併しルクレチアに遣つて好いか、それも童貞マリヤに獻納する方が好いか、何方にしようと思つたが、折角天に誓つた物を勝手に横領しては罪になると思ひかへして、これをランプの中に綠玉髓と土耳其玉からの進物たる紅玉の間に嵌めて呉れと命じて、金工サロモネに渡した。

そして再びフェルララ大使の方を向いて言つた。

「ベルトランド、公妃陛下に拜謁の節は予からの傳言ぢやと言つて、其方は無事で暮らして偏に天の女王様にお祈りをするやう、且つは予等一同は此の上もなく息災で、其方のため大祝福を捧げてゐると申して呉れ。今晚

些少の贈り物を其方に託しようから。」

西班牙大使は近く寄り添つて叫んだ。

「實際斯くも見事な眞珠は拙者未だ曾て見た事はありませぬ！」

法王は満足氣に、

「然うぢや、予ですら能くもこれだけ蒐集したものだと思ふわい。丁度これに二十年かゝつたのぢや。ルクレチアは眞珠が随分好きでなう」と破顔一笑して、「それでも我が身に適はしい物が分ると見える、あの可愛惡女めが、ハ、ハ、ハ！」

そして稍間を措いてから嚴かに言ひ足した。

「予が死ねば伊太利第一の眞珠を所有する者はあの子ぢや！」

斯う言つて篋の中へ兩手を突つ込んで指の上からザラ／＼と落として、其の柔かに青白い光りと滑かで朱珍のやうな色合ひとを眺めて北叟笑みした。

其の時突然目の中に一道の怪光がギラリと光つた。ヂョーヴァンニは老齡のボルチアが娘のルクレチアに向つて異常な熱情を有するといふ噂を思ひ出して恐怖と羞恥とのため心臓が凍つたやうになつた。

四

正に其のとき扈從が這入つて來てケーザル様は猊下の御命令を奉じて隣室で待つてゐられる由を告げた。これ

は焦眉の急に逼る重要事件が出来した、め法王はケーザルを召したのであつた。それはヴァランチノア公たるケーザルがフロレンスに對して懷抱せる異圖を佛蘭西國王は是認し難き旨を傳達すると共に法王を以て該計畫を助長せる者と見做して來たのである。

扈從から斯くと聞いた法王は佛蘭西大使をデロリと見て巧みに側の方へ連れて行つてケーザルが待つてゐる室の扉の側で態と彼を留めるやうに見せかけたのち、態々其の扉を少し計り開けて置いた。(これも偶然にさう開いて居たやうに見せかけて) これで以て佛蘭西大使並びに彼の周圍の人達は今や父と子の間に起らんとする事柄を悉く聞き得るのであつた。

荒々しい叱責の聲が直ちに此方へ聞える。ケーザルの言葉遣ひは穩かで鄭重であるのに、老法王は足摺りして憤怒の聲を振り立てた。

「予の目の前にゐて呉れるな！ 早く死ね、此の狗兒めが！ 傾城の小倅めが！」

「やれ〜大騒動ぢや、あれをお聞きになりませうな？ あれ〜猥下は打擲し兼ねまじい權幕でござる」と佛蘭西大使はヴェニスの大使アントニオ・ヂニスチニアニを顧みて囁いた。

併しヴェニス大使は肩を聳やかして、そんな事があつて堪るものかといふ様子をした。いざ掴み合ひとなれば父が子を刺すよりも寧ろ息子が父を殺すだらうと考へた。一體カンヂア公を殺して以來法王は内々少しケーザルに恐れを成して、父たる事の誇りと舐めんばかりの愛撫との外に神經が手傳ひする恐怖が加はつて來た。侍從中最も年少なペロットがケーザルの手を逃れて法王の外套の襷の下に隠れたとき、ケーザルは父の胸に獅噛み附い

てゐる其の若者を短劍でグツと刺して法王に韓紅を浴びさせた事などは今尚ほ人の記憶に残つてゐた。又ヂニスチニアニの考へに依れば隣室の争ひは實は佛蘭西大使を巧く釣つて自分達が得をするために演じた狂言であつて、畢竟フロレンスに對して異圖を挾んだ者はケーザル一人だけ、法王に至つては一切無關係であると大使に信ぜさすためであつた。のみならず此の二人は常に密かに相補ひ合つて、父は其の言を實行せず、子は已が行爲を決して口外しないのであるとヴェニス大使は考へた。

法王はケーザルに威嚇と罵詈雑言とを浴びせて將に破門を命ずる計りに怒り散らしたのち謁見の間に歸つた。そして依然喘ぎ〜身體を慄はせて紫色に變つた顔から流れる汗を拭いたが、それにも拘らず目の中に或る喜悅を見せながら再び佛蘭西大使を呼んで此の度はベルヴェデレの内庭の方で引見した。

「猥下は御存じではござりませうが、あの如き御不和を見ませうとは某決して思ひ設けませぬ事——」と大使は非常に當惑氣に言つた。

「おや、それではあなたはあれを聞かれたかな？」と太く驚いた振をして法王は叫びながら、考へ直す餘裕を大使に與へずに剛々し氣に二本の指で大使の脛を挾んで（これは非常に親睦を示す法王の常手段であつた）、佛蘭西王に對して自分は親愛を持する事を辯疏し、並びにケーザルの計畫の動機は至真至誠なる心から出た事を熱心に説いた。大使は打ち惑うたこれが自分を騙す證據だと思ひながら自分自身の目が與へる證據を否認して寧ろ法王の聲、目、唇に信用を措きたいと感じた。實にアレキサンダーの嘘は靈感に打たれて自ら迸り出るやうに巧妙であつた。喋る順序を豫め定めないので然も戀を語る婦人のやうに自然に且つ無邪氣にスラ〜と嘘を吐

いた。彼は這般の術を實習するの久しき今では渾熟の域に達してゐる。畢竟法王アレキサンダー六世は自己の想像力に動かさるゝ技巧家であつた。

五

此のとき兼てから法王が抱へてゐる秘密の使者が法王に寄り添うて何事かを囁いた。法王は懸念さうな顔をして隣室にある隠れ戸を出て圓天井の下にある狭い廊下へ這入つた。廊下にはモンレアレ僧正の料理人が待ち受けてゐた。

毒薬は少量であつたせるか僧正は頃日來快方に向ひつゝある由を此の男は告げに來たのであるが、法王は詳細に聞き糺したのち病人は二月乃至三月以内に必ず死ぬ事を知つて其の方が世間の疑惑を招かないだけ結句幸ひであると思つた。

『考へて見れば何となく可哀さうぢや。あの老人却々面白い人物だし、それに善良な基督教信者だから』と思つた。

そして金の方は別の手段で取れるものと歎息して謁見の間に歸つた。此の間の隣りは時として食堂になるところから食卓が置いてあつた。それと見た法王は急に空腹を感じて常用の事柄は後廻しにして先づ人々を食事に招いた。食卓の上には聖胎信告祭の花たる白百合が飾つてあつたが、これは法王の好みの花で、此の白百合を見ると予はルクレチアを思ひ出すと言ふのであつた。法王の食膳はあつさりした物で且つ分量が少いから御馳走の

品数は乏しかつた。チーヴァンニは侍従等の話を黙つて聞いてゐた。

煉瓦といふ渾名のあるドン・ファン・ロペスは先刻の争論の事を持ち出してケーザルの辯護に努めた。そして公の隠謀なるものは元來が喜劇仕組みであるから公は清淨潔白、一點の疚ましい處がないと言つた。他の人達もこれに和してケーザルを天に持ち上げん計りに稱賛した。

『否、否、そんな事はないぞ』と法王は首を振つて穩かに叱るやうに言つた。『其方達には未だ彼れの氣質は分りませぬ。他日必ず何か知ら不謹慎を仕出來して予を恐怖させるぢやらう。最後の果ては自分で自分の首を折つて予ら一同を破滅させる奴ぢやわい。』

と言つたが併し父たる誇りを目の中に光らせて、
『それは然うと何が目的でケーザルは簡様な事をするか知ら？ 一體彼れは誰れを見倣うてゐるのぢやらう？ 其方達の知つての通り予は少しも蟻りのない生一本の性分ぢや、腹に思ふ事は直ぐ様舌から抜けて出るに、あのケーザルと來ては固く秘密を守つて常に何か知ら隠し事を有つて居る。打ち明けた話が予は折々彼れを叱りまし折檻もするが、それをしながら予の心は恐怖に襲はれるのぢや。といふ譯はあの子は禮儀が正しうてな— 否、餘り正し過ぎるのぢや。さうして不意に予の顔を見る時などは刺刀で此の心の臓を突き刺されるやうでなう。』

これにも拘らず賓客は一層温情を以てケーザルを辯護した。

『あゝ分つた、分つた！ 其方共は彼れを自身同様に愛して予に非難をさせないのぢやな。』

室は暑くして窒息せん計りであつた。法王は眩暈してゐたがこれは酒よりは子息が稱賛されたのに酔うたからであつた。客は起つてベルヴェデーレ内庭の入口に當る露臺へ出た。空気が清く爽かで、見降ろせば疝の強い牝馬や跳ね狂ふ種馬を馬丁共は厩から曳き出してゐた。

法王は長い間樞機官や大官に取り巻かれて黙つてこれらの馬を見て立つてゐたが次第に其の顔に曇りを帯びた。蓋しルクレチアを思ひ出したからで、ルクレチアの姿は目の前にまざくと浮かんで来る。あの碧い眼、薄い黄金色の髪、父に似て稍厚い唇のルクレチア——純潔にして美しきこと眞珠の如く、溫和にして且つ柔順な身は邪悪の中にあつて然もそれを知らず、情に馳せるでもなく一點の汚れなき彼れルクレチア！ あゝ自分は何故フェルララ公との縁組みを承諾したか？

そして彼は今初めて老齡の重荷が肩の上に落ちたやうに感じて重々しく溜息した、そして悄然と項垂れて一同の先に立つて謁見の間に戻つた。

六

謁見の間には子午線指定の用に供する地圖、地球儀、コンパスが用意してあつた。此の子午線はアゾレス群島とカボ・デ・ヴェルデ島の南に方つて、葡萄牙の里數で三百七十を數へる一點を通過するもので、此の一點を選んだ理由は蓋しコロンブスに従へば（地球の臍）が其處にあるからで、其の臍なる物の形は梨に似たる突起物で月界に届く高山であつた。コロンブスはコンパスの偏倚から割り出してこれを假定したのである。

そして一方は葡萄牙の最西端と他方はブラジルの海岸から互に平均に距離を測量して右の子午線に達する事にして、船長と天文學者は法王の命を受けて幾日間航海すれば此の兩距離は達しられるかを算出した。尋いで法王は祈りを捧げて地球儀を祝福した後、赤インキを筆に附けて大西洋を貫いて北極から南極に至る太い一線を引いた。そして此の一線は平和の保證となるもので、此の線の以東にある一切の島嶼と陸地とは西班牙領、以西のは葡萄牙領であつた。即ち法王は手を一たび動かして地球を半分に分ち、更にこれを基督教國民の間に分けたのであるが、此の瞬間デョーヴァンニの目にアレキサンダーは偉大にして堂々たる人物と見えた。自己の力を知悉せる此の法王は世界を統治せるシーザーの如き人、天地兩王國の中心たるべき人のやうに見えた。

此の夜ケーザル・ボルチアは法王並びに樞機官の團體をヴァチカン宮内の自分の一室に請待して宴を張り、其の席上に（羅馬藝者の尤物のみを五十名）侍らせた。藝者の事を官では官許遊藝賣女と稱してゐた。

羅馬教會の歴史に於いて記憶せらるべき日は斯くの如くであつた。即ち此の日は地球を區劃した日であつた。

レオナルドは右の晩餐に出席して一伍一什を見てゐた。此の種の宴に請待されるのは大なる好意に出た事としてこれを否む譯には行かなかつた。そして歸宅してからジョーヴァンニに斯う言つた——

『何の人にも神性と獸性とはあるものだ。』

そして解剖の圖を描きながら更に附加して言つた。

『卑劣な心、價值なき熱情を有する人は知性高く思想の高尙なる人が有する複雑美妙な體制に適するものではありません。彼等は二つの孔ある囊を有つ方が好いのです、即ち一つは食物を受ける孔、他方は食物を吐き出す孔です。何故なら有體に言へばそんな人達は今は唯一本路の滋養の通路を有するだけですから。』

翌朝ジョーヴァンニは見ると先生は（沙漠の聖ヂェロラモ）と題する畫を描いてゐた。荒涼たる洞窟の中に世捨人ヂェロラモは跪いて十字架を凝視しつゝ、烈しく獅子を打つたので獅子は聖者の足下に臥して聖者の目を眺め、勝を開いて悲し氣に長吠えして其の状、宛も主人の憐れみを乞ふやうに見受けられた。ジョーヴァンニはこれを見るにつけ端なく白いレダが白鳥に抱かれてゐた畫を思ひ浮かべた。其の畫はサヴォナローラの新塚のために焼けたのであるが、以前自分が屢々然うしたやうに今も亦相反せる彼と此との概念の何れが多く先生の心に親しいのか、或は兩つ共に同程度に親しいのかと自分獨りで訊ねた。

七

夏が來た。羅馬のボンチネにある多くの沼から發する腐敗の熱病、即ち今謂ふマラリヤ熱は勢威を羅馬府に逞

ふして七月下旬には法王の左右の間に日々死人を生じた。法王其の人も苦しんで意氣銷沈の體に見えたが、これは死の恐怖よりも寧ろ渴仰せん計りに慕へるルクレチアが座右にゐないためであつた。これより先き法王は盲目的沈黙なる熱情——猛烈なそして狂氣の如き劣情に襲はるゝ事數回、其の勢ひの荒まじさは自分ながら空恐ろしく、若し直ちにこれを満足させなければ必ず窒息するに相違ないと思つた程であつた。そこで二三日の暇を請うて顔を見せに來て呉れとルクレチアに手紙を發したが、其の返事には夫は妾を手放すを肯じませぬとあつた。老法王はルクレチアの以前の夫を數人とも除いたのであるから此の度も此の憎むべき駙馬を除くためには如何なる罪惡を行ふも敢て躊躇するものではないが、如何にせんフェルララ公に對しては決して事を輕々に爲す事が出來なかつた、何となればフェルララ公の砲兵は伊太利で最も精銳のものであつたからである。

八月の初め法王の樞機官アドリアンがコルネットに有せる別莊へ行幸した。そして常よりは快く晩餐を喫して且つシリ産の濃厚な酒を飲み、尋いで樓臺に長い間坐して、羅馬の夜の變化の多い新鮮を飽かず楽しんでゐた。すると翌朝になつて何となく氣分悪く覺えた。後に法王自ら語つた話に依れば、此の時彼は窓に近寄ると二つの葬式が見えた。其の一つは兼ねて寵愛せる侍從某の葬式、他はグリエルモ・ライモンチの葬式で、兩人共に法王と同様肥満してゐた。

『此の頃的时候は予らのやうに肥えた者には兎角危険ぢや』とアレキサンダーは宛ら凶兆を豫言するやうに呟いた。すると不思議なるかな斯く咬くと等しく一羽の鳩が窓の中へ飛び込んで壁に衝き當つてアレキサンダーの足下に落ちて氣絶した。

「あゝこれも忌やな知らせぢや」と法王は青くなつてそこへ部屋に歸つて打ち臥した。そして其の夜劇烈な吐瀉があつた。國手達は法王の病氣に就いて種々の説を立て、甲は隔日熱となし乙は卒中だと云ひ丙は膽囊の痙攣だと言つた。一方、市中では法王の毒殺をさへ傳へた。

時の經つと共に法王の體力は衰へた。十日の後國手は極端なる方法を用ゐた。則ち寶石の粉末を煎じて與へたが病體はそれでも益々不良に陥つた。

一夜人事不省の境から醒めてさも懸念らしく胸の邊を撫で廻し黄金の小筥を探つた。これは多年胸に懸けてゐるもので、中には耶穌基督の血と肉とが微しく這入つてをり、兼て星占師から此の筥を身邊に附けてゐる限り性命の安全なる旨を保證されたのに、今見れば失せたのか盗まれたのか胸の何處にもそれが見附からなかつた。アレキサンダーは目を瞑つて靜かに失望の聲を放つた——

「これは予が逝く印ぢや。萬事休すぢや。」

其の翌朝死の衰弱に襲はれてゐる事を感じて、氣に入りの醫師なるヴェノザの監督のみを留めて其の他の人々に座を外すやうにと乞ひ、前の法王インノセント八世が瀕死のとき猶太人の醫者が三名の幼兒を殺害して其の血を法王の血管に注入した事實を此の監督に思ひ出させた。

「したがあの結果は貌下御承知でござりませうな？」と監督は反問した。

「知つとる、知つとる！」とアレキサンダーは弱々しい聲で言つた。「けれどもあの時に殺した子供は七歳だつたのぢや、それに何の子も未だ乳離れはしてゐなかつたわい。」

監督は敢て答へなかつた。病人の目は既に曇つて讒言を口走つた。

「左様、あの小さな色の白い奴らは太う若いのぢや、それに血は純潔で紅いものぢやぞ。予は子供が好きぢやで此處へ連れて来て呉りやれ。其の小さな奴を此處へ寄こして呉りやれ……」

凡そヴァチカン宮廷に行はれる様々の恐ろしい事に久しく慣れて今は平氣になつてゐるヴェノザの監督も此の讒言を聞いては流石に身慄ひがした。病人は痙攣する手を單調に胸の上に動かして紛失したる聖物を尙も探つてゐた。

病中我が子の事は一たびも口に出さず、ケーザルも同様に瀕死の境にある事を語り聞かせたけれども敢てそれを憂ふる容子は見えなかつた。ケーザルやルクレチアに傳ふべき最後の言葉の有無を訊ねた時はクルリと横を向いて一言も發せず、存命の間はあれ程熱愛したのに今は自分に取つては何等の存在を認めないやうに思はれた。十八日（金曜）に自分の抱への牧師に懺悔を述べて聖餐を受けたし、同日の夕の祈りのとき人々は死人のためにする祈禱を捧げた。すると法王は幾たびも無理に口を開けて何か言ひたい容子をしたので、イレルダ樞機官は法王の上に俯向いて冷めたき唇から弱々しく洩れ来る聲を聞いた——

「早く／＼スタバト・マテルを唱へて呉れ！ 予のお傳達をして下さる聖母様に祈禱を捧げて呉れ！」

此の聖歌は死人への祈禱の中に含まれてゐないが病人の乞ひを容れてイレルダはこれを唱讀した——

御子の磔られたまへるや

悲しめる母は涙に咽びて
十字架の下に佇めり……

すると口舌に盡し難き満足の色が死人の目の中に輝いて宛ら天が開けて我れを待てる聖母を拜したかのやうに見受けられた。その内兩手を擴げ戦慄しつゝ體を擡げて低く呟いた――
『おゝ童貞マリヤ、予を捨て下さりまするな！』
と言ひ終ると等しく枕の上に伏した。法王は死んだのである。

八

これと同時にケーザル・ボルヂアは死生の間を彷徨してゐるが、公の侍醫にして監督たるガスバレ・トレルラは聞くも恐ろしい療法を試みて、殺した計りの驟の腹中へ病人を飛び込ませ續いて氷のやうに冷めたい水の中へ這入らせた。此の荒療治が利いたのかそれとも甚だ鞏固な意思のためか兎に角ケーザルは芽出度全快するに至つた。

公は恐ろしい病氣の間にあつてさへ全然平靜を持し克く己れを制して親ら事務を攬り、或は報告を聞き、書翰を口授し、夫々命令を發した。法王崩御の報知を得た際はヴァチカン宮の秘密の廊下を潜つて聖アンヂェロ城に移つた。

市内到る處アレキサンダーの死に關する奇怪な噂さで持ち切つた。マリノ・サヌトがヴェニス共和國に送つた報告書に依れば一匹の猿が法王の部屋へ飛び込んだとき樞機官がそれを捕へようとすると、法王は（打遣つて置け、構はずに打遣つて置け！ 其奴は悪魔ぢやぞ！）と言つたし、又折々は（行くよ！ 行くよ！ 行くよ！ 行くよ！）と待つて呉りやれ！と口走つた。そしてこれが説明として、インノセント八世が崩御の際ロドリゴ・ボルヂアは二十年間法王となつて權勢を握らんとしたため悪魔に身體を賣つて居たのであつたと附加してあつた。
それから死ぬ間際に七つの悪鬼がアレキサンダーの枕頭に現れた。そして最後の息を引き取ると同時に死骸はユラ／＼と搖いて煮沸し、口から湯氣が立ち上る様は宛も鍋の沸々たるを見るやう、體は膨れ上つて悉く人間の形を失ひ、顔はエチオピア人の如く黒くなつたと傳へられた。

凡て法王崩御の際は聖彼得寺で葬送の彌撒を九日間轉讀する定めであるのに、アレキサンダーの死體は醜く變形して腐爛したといふ噂に人々は恐氣を振り、一人として此の長たらしい勤行を執り行ふ者がなく、棺車の周圍には燈明も香も番人も哭く者もなかつた。屍を棺に納める人がないので久しく閑却されてゐたところ漸く六名の無頼漢に酒を一壘振舞ふ約束で此の仕事を受負はせた。棺は甚だ小さかつたが法王の被る三重冠を死人の頭から奪つてある事として、何うやら無理に襤褸の上を轉ろがして棺の中に詰め込んだ。が實は棺に入れたとは嘘の皮で、疫病に取り殺された死人を葬るやうに頭の方を先にして坑の中へ突き落したのだと小聲で噂し合つた者もゐた。

棺を蓋うて定まるとの謠もあるが、此の憐れな死骸ばかりは毫も容赦されずに愈々惡評的となつた。人々は

日に増し迷信の恐怖を募らせ、空気が汚濁してゐるやうに感ぜられて、じめくした厭やな臭氣は傳染病と共に増加した。一頭の黒犬が聖彼得寺の中に現れて、何時までもクル／＼とだん／＼と輪を大きく廻つて去らなかつた。日が暮れたのち新町の住民は一切外出しなかつた。元々アレキサンダーは尋常に天壽を了へたのではなく、臆て再び法王の位に上る筈で、其の時こそは愈々非基督の時代が來るのだと信する人が多かつた——
以上大使の報告並びにこれに類する噂をデューヴァンニはシニバルチ小路にある跛のチラク人にしてフッス教徒たるヤーン・フロミの酒店で聞いた。

九

レオナルドは政治上の出来事を一切念頭に置かず友人から遠ざかつて先年フロレンスのサンタ・マリヤ・アンヌンチアタ寺の托鉢僧から注文を受けた畫を描いてゐた。畫面は聖アンと童貞マリヤ即ち圓滿なる知識と圓滿なる愛とを現したもので、聖アンは神巫に似て永遠に麗若く、蛇の智慧をもて満てる誘惑の神秘（レオナルドの微笑もそれに似てゐた）が其の俯向ける目と美妙な曲線を描ける唇とに見えるし、アンは傍にゐるマリヤは淳樸にして小兒の風貌を有し、顔の邊に鳩の如き清淨がちらつてゐた。マリヤは愛するが故に知り、アンは知るが故に愛した。デューヴァンニは此の畫を見て初めて（大なる愛は大なる知識の娘なり）と喝破した先生の語が了解できた。

レオナルドは又巨大なる鶴嘴、ポンプ、鋸、錐、機械、布の目を密にする器械、繩を縛ふ道具、鍛冶の器械等

各種種類の器械を考案してゐた。

以前にも折々然う感じた事であるがデューヴァンニは先生が斯くも種々雑多な業務を執るのを見て今更の如く驚いたが、併し考へて見ればこれらの多方面は單に表邊だけの事であつて實際一定の目的に支配されてゐるのであつた。

レオナルドは其の著（機械學原理）の中で次ぎの如く述べた——

「夫れ力は精神的であり且つ目に見えないものであると余は主張する。蓋し精神的と稱する所以は中に藏する性命が體形を缺くからであり、目に見えざる所以は力を發生する體は毫も重量と外形とを變じないからである。」
レオナルドの運命はケーザル・ボルチアの運命と終始するのであつた。公は依然として大膽と沈着とを失はなかつたが今や運命の我に非なるを悟つた。法王が崩御し公が二豎のために呻吟してゐる間に敵は連盟してカンパニーを取り圍み、プロスベロ・コロナは羅馬市の門まで押し寄せたし、バリオーニはベルチアに逼つた。ウルビノ、カメリノ、ピョンビノの諸市は前後して獨立を復した。不幸はこれに止まらず新に法王たるべき人を選擧するのために會した人々は羅馬よりの退去を公に請求した。形勢は一變して、ありとあらゆる物は最早救治すべからざるかの如き觀を呈した。

マキャヴェルリの所謂（皇天の選人）の前で竦んでゐた人達は、今や手を拍つて彼の失墜を慶賀し瀕死の獅子を馬の蹄が踏る態度を示した。詩人連は罵倒詩を作つて言ふ——

「シーザーか然らずんば無、此の兩語を爾に見る、
爾はケーザルたりし者、今や直ちに無に歸せん。」

一日レオナルドはヴァチカン宮でヴェニスの大使アントニオ・ヂュスチニアニと語つたが、話頭は端なくマキャヴェルリの事に及んだ。

『マキャヴェルリ君は政治道に關する書を書いてゐる筈ですが、閣下に其の事を話しましたか？』

『あゝ然うです、それを度々聞きました疑ひもなくあれは冗談に言つたものと私は解してゐます。全體そんな本を世間に發表すべきものではありません。あんな物を書く奴があるものですか。一體何が目的で書くのです？ 統治者に對する補佐の積りですか？ 政府の秘密を暴露するのですか？ 即ち統治する者は凡て正義の假面を被れる『暴虐』であると發表するのですか？ そんな事は牝鶏に狐の作法を教へる事です、狼の齒を以て羊の武器にする事です！ おゝ神よ、吾々をそんな政略から避けさして下さい！』

『それではニコロー君の意見は誤謬であつて遂に説を變ずるだらうと御考へになりますか？』

『然うぢやありません！ 私の意見はあの人と同一です。マキャヴェルリ君の説に従つて行動して宜しいのです。唯それを口に出さないまでの事です。若しあの書を公にするとあれがために害を被る者は恐らく著者一人だと思ひますが、詰まり羊と鶏とは共に依然狼と狐とを信頼して行くのです。そしてあらゆる物は以前の如く變りますまい。神様にはお慈悲があります。世界は我々の時代を續けて呉れませうて。』

+

千五百年の秋、終身旗手て顯職をフロレンスに奉ぜるピエロ・ソデリニ氏はレオナルドを聘してピサの包圍に使用すべき軍用器具を製造せしめんと欲し、フロレンスに來つて奉公すべき事を懇請した。さればレオナルドの羅馬滞在は最早や幾何の餘日もなかつた。

一夕彼は古羅馬七丘の一たるバラチン岡を徜徉した。此の岡には嘗てアウグスツス、カリグラ、セプチムス・セヴェルス等の帝宮が聳えてゐたのに、今は空しく荒廢に歸して音訪るゝものは風の音ばかり。橄欖やアカントス樹の間に羊が鳴き、蟋蟀のすだくのが聞えて、地上に散亂せる大理石の欠片を見るにつけ、古代の神々並びに英雄の此の上もなく美しい彫像は復活を待てる死者のやうに廢墟の下に埋もれてゐる事が知れるのであつた。夜は靜寂として美はしく、迫持、穹窿、壁の骸骨を成せる煉瓦は落日の光りを浴びて赤々と燃えてゐるし、それに秋の本の葉は、羅馬の諸帝が丹と金色とを以て部屋を彩つたやうに、一樣に此の二色で染まつてゐた。

岡の北側、即ちカプラニカの園より遠からぬ處でレオナルドは蹲んで大理石の欠片を檢べようとしたとき、紆餘たる歩道の上に人影の現れたのを見た。

『あなたでしたか、ニコローさん？』とレオナルドは起つてフロレンスの書記を掻き抱いた。

初めてファノーの街道で知己になつた當時に比してマキャヴェルリは更に見窄しい装をしてゐる、がこれは言ふまでもなく大統領が未だに此の人を打ち捨て、顧みないせると見受けられた。體は瘦せて頬の刺り跡は目立つて

青く、長き頸は疲勞のためグタリと垂れて鼻は一段と高くなつて益々鳥の嘴に似、眼光の熱烈は更に加はつてゐる。レオナルドは住居のこと、公務の模様を訊ねてから、ケーザルの近況を話したときニコロー氏は顔を反けて肩を釣り上げ、態と冷淡な風を装うて答へた――

『これまで随分と奇異な事柄に出會した私です、何事が出来しようかと決して驚きは致しません。』

と言つて只管話頭の變轉を欲するかのやうに疊み掛けて種々と訊ねた。そしてレオナルドがフロレンスに仕へるやうになつた事を聞くや否や忽ち叫んだ――

『得意になつては可けませんぞ！ ケーザルのやうな英雄が犯す罪惡と我々共和國の蟻塚のやうに脆弱な美德と、此の兩者は果して孰れが善いか悪いかそれは一寸判断できませんよ！ 只私は民衆に基礎を置く政府が可んな美點を有するか位は知つてゐますからな』と言つて苦々し氣に微笑した。

レオナルドはデユスチニアニが牝鶏と狐、羊と狼との喩へを語つた事を告げた。

『眞理は到底眞理です』と言つたニコロー氏は早や機嫌を直してゐた。『然うです、私は牝鶏の憤怒を買つてゐます、啻に牝鶏のみならず狐も私に對して忿つてゐるのです。何しろ世界始まつて以來今日に至るまで彼等が行ひ來つた一切の事を赤裸々に敍説するのは私を以て嚆矢となすものだから、折もあらば私を火柱に縛り附けて焚殺しようとする手ぐすね引いて待つてゐる始末です。御覽なさい、暴君は私を革命の煽動者と目してゐるし、一方人民は私が暴君と連盟してゐるのだと猜疑してゐます。宗教家からは不信心者と譏られるし、善人からは悪人だと言はれるし、然うかと思へば其の悪人が私を最も烈しく憎むのです、何故ならマキヤヴェルリは自分達一悪人より

も尙だ悪い奴だ、悪人に輪を掛けた悪人だと思つてゐるからです。レオナルドさん、何時かあなたと私と話し合つた事を覚えてゐますか？ 實際あなたも私も共通の運命を荷つてゐますよ。新しい眞理の發見は今も昔も危険です、新しい陸地の發見よりも危険ですから。群衆の間に伍するあなたも私も共に獨りほつちです。異邦人です。餘計者です。住むに家なき放浪者、永遠に追放された人間です、詰まり此の世界は群衆のために生じたのだから他人と類を異にする者が即ち一般世間の敵になる譯です。要するに俗物萬能ですよ。俗物を外にしては如何なる人と雖もゼロなのです。あ、レオナルドさん、これは重要な事柄ではありませんか、人生は退屈なものだといふ意味になりませんか。人生最惡の不幸は疾病でもなければ貧乏でも屈托でもありません。倦怠です、一も二もなく倦怠です。』

兩人は黙々としてバラチンの麓を下つて慰安町を過ぎ、カピトル岡の裾に達した。カピトルはデユピター大神の父なるサタアンの殿堂の建つてゐた岡で、羅馬の盛時に在つては羅馬法院が此處にあつた。

兩人は岡に立つてセプチミウス・セヴェルス帝が築いた拱廊からフラヴィアン帝の圓形戲場に續く神聖町を見渡すと、見窄らしい小屋が建ち並んで、土臺に用ゐてある石はオリンピックの神々の彫像や其の足並びに胴の缺片を以て當てゝあつた。右の法院は今より數世紀前石切場と變じ、基督教の教會堂は異端の殿堂があつた廢墟の上に築かれて同じ場所勢力を失つたのであつた。道路の塵埃、俄羅俱多、汚物を此處へ運んで來ては投棄するため、層又層が重なつて地上より高きこと十キュビトを超えてゐるのに巍々たる圓柱は依然として上に聳えて、消え失せたる美術の最後の面影――即ち彫りをしてある軒縁を見せてゐた。

マキャヴェルリは古代の議院の舊趾を指してレオナルドに示した。ありし昔の光榮ある建物の全面積は今も下賤にも（牛痘の野）と呼ばれて、牛の市が此處で立つので、大きな白牛やボンチネ沼の黒水牛は地の上に臥して、豚は水溜りの中に集まつてゐるし、じめじめした泥土とありとあらゆる汚物のために、傾きかけたる柱も大理石の薄板も半ば損せる碑も悉く汚れてゐた。嘗てはフランヂバニの堡壘であつた封建塔はチツス帝の拱廊にだらしなく倚り懸かり、其の傍に酒旗が見えるのは市に來る百姓が此處で飲むためであつた。大きな聲で女共の争つてゐるのが窓から聞えて、委細構はず投り出した魚肉の殘骸が散亂してゐるさへ胸悪くなるのに、半分しか洗つてない襪を一筋の綱に通してブラ／＼乾かしてあるし、其の下には不具の老を食が坐して腫れ上れる足と創とに繻帶を巻いてゐた。斯くも不潔な光景を前にして拱廊が立つてゐるが、白色にして能く純清を保ち、他の記念物に比して損處は少く、内部の左右を浮彫が飾つてゐた。即ち右の方はエルサレムを征服したるチツス皇帝、左は捕虜となつた猶太人で、彼等と共にある神壇、聖餅、七つの枝ある蠟燭臺は徒らに勝利者チツスの戰勝碑たる觀を呈するに過ぎなかつた。更に拱廊の頂きを見れば一羽の鷺が翼を張つて神に化したるシーザーをオリンパスの方へ連れてゐた。其の時マキャヴェルリは朗かな聲で次ぎの銘を讀んだ。

『大ヴェスバシアンンの御子チツス・ヴェスバシアンンの羅馬衆議院。』

カピトルの方から來る日光は此の拱廊を潜つて皇帝の凱旋を照らすし、酒店から上る臭い煙すら香の煙のやうに見えた。ニコロー氏は今一度法院の方を振返つた。聖マリヤ・リベラトリチエ寺の前にある三本の美しい柱が夕陽に染まつてゐるのを見て思はず胸を踴らせた。アヴェマリヤを促す陰氣な夕梵は偉大なる廢滅を弔する挽歌と

しか思へなかつた。

彼等は圓形戲場の方に歩を任せた。

此の戲場の壁を成せる大石塊を熟視してマキャヴェルリは言つた。『然うだ、斯んな記念物を建てた古人と吾々とは到底比べ物にならないのだ。レオナルドさん、吾々と古人との差違を熟々感ずるのは廣い羅馬の中で此の一ヶ處だけです。彼等は一體何んな人間であつたか、それを想像する事さへ吾々には出来ません。』

『私には分りませんが』とレオナルドは強ひて沈思から覺めて答へた。『併し現時の吾々は強ち古人が有してゐるたみに劣る譯ではありますまい。單に力の種類が異なるだけです。』

『察するところそれは基督教の謙抑でせう？』

『左様、多分何よりも先づ謙抑ですな。』

『然うかも知れませんが』とニコロー氏は冷淡に言つた。

兩人は圓形戲場の毀れたる階段の上に腰掛けた。

『凡そ人間は基督を容れるか排するか、必ず何方かに決する筈です』と卒然としてマキャヴェルリは言つた。『併し吾々はこれを容れず又これを排斥しないのです。吾々は基督教徒でないと共に異教徒でもありません。此れを棄絶したが然かも彼に服従する事も出来ません。正義を維持する力も、惡を懲らす勇氣も吾々は有しないのです。黒でもなければ白でもありません。灰色です、卑しい灰色です。冷でもなく熱でもなく、單に嘔氣を催さず微温です。吾々は甚だしく虚偽に化して意氣地といふものがありません。長い間基督と惡魔とに纏られて足留め

をしてゐたから今では自分が何を要するの何方へ傾くのか些つとも分らなくなつてゐるのです。然るに古人は少くとも吾々よりは餘計に知つてゐました、論理的に目的の遂行に努めました。右の頬を打たれて左の頬を差出すが如き虚偽は演じませんでした。ところが極樂往生をするためには地上の如何なる不正、如何なる亂暴をも堪へ忍ばねばならぬと——斯様に信するやうになつてから悪人は公然跋扈しました。ですから基督教は世界を麻痺してこれを悪徒の餌に供したのでありませんか、少くともこれは一箇の事實でありませんか？』

彼の聲は慄へ目は憎悪のために燬き盡くさるゝやうに閃めき、顔は堪へ得ざる苦痛に悩むものゝ如く蹙まつた。レオナルドはこれに答へずに圓形戯場の壁を成せる隙間から青空を眺めた。そして此の廢墟の隙間から見られる輝々として清い青空は恐らく何處にもあるまいと考へた。鳥は孔を出たり這入つたりして飛び廻つた。孔は昔の名残で其處に嵌まつてゐた鐵の棒を蠻人が扭ち取つたのであつた。レオナルドは集くへる場所のあたりを翔ける鳥を見ながら、此の建物を築いた羅馬の諸帝——世界を支配した彼等諸々の皇帝と此を掠めた北地の英雄とは畢竟（そは時かず又刈入れをなさずされど神は彼らを養ひ給ふ）（空の鳥）と記された者の爲に働いたのだと考へてゐた。

一切の物はレオナルドに取つて歡喜、ニコロー氏に對して懊惱であり、彼には蜂蜜、此には膽汁であつた。圓満なる知識はレオナルドに愛を嘔み、マキヤヴェルリに憎悪を鼓吹した。併しマキヤヴェルリは例により冗談を以て此の談話を打ち切らうと欲して沈思を破つた——

『レオナルドさん、あなたを不信心者だと思つてゐる奴らは大變な間違ひをしてゐると私は思ひますが——最後の審判日に天使が勝利を得て、狼の群から小羊を選び出す段になればあなたは屹度小羊の間に混じつてゐるでせう。』

『では宜しい』と畫家は談話に釣り込まれて言つた。『私が極樂へ行けばあなたを一緒に連れて行きます。』

『折角ですがそれは御免を蒙りたいですな。實際のところ私は此の世で餘り退屈のために非道く苦しんでゐるのです。極樂にある私の椅子は誰か他に熱望してゐる者があらうから其の人に譲りませう。お聞きなさい、レオナルドさん、私は夢を見たのですがそれを話しませうか。それは、汚い處へ私は連れて行かれたのです——何時洗つたか知れない襤褸を着て空き腹を抱へた放浪者や、黄色い顔の坊主、老筆の乞食、奴隸、跛、馬鹿——そんな奴等の集まつてゐる處へ連れて行かれて、聖書に（心の貧しき者は福なり天國は彼等の物なればなり）と記してある人は正に此の人達だと教へられました。次ぎに案内された場所では元老院議員のやうな容貌の人達がゐました、皇帝、法王、將軍、立法者、哲學者などが悉く其處にゐました。ホーマーがゐる、アレキサンダー大帝がゐる、マールカス・オーレリアスもゐました。そして互に學事政治道に關する話をしてゐたのです。此處が即ち地獄だと聞いた時は私は呀と驚きました。凡て此の人達は神に捨てられた罪人でした。何故と言へば現土を愛し且つ現土の智慧を愛したからで、神から見ればそんな事は馬鹿々々しいからです。それで私は地獄極樂の何つちか一つを選べと命令されましたから大きな聲で叫びました——（地獄へやつて下さい！ 賢人、英雄のゐる方へやつて下さい！）つて。』

『然うですか、それではあなたの言ふ通りならば私も……』

「可けません、時機既に遅しです。あなたは選擇してしまひました。基督教の徳は基督教の天が報いるのですから」

兩人は暗くなるまで圓形戲場の邊を徘徊した。時にコンスタンチンのバシリカ式建物にある素晴らしい拱廊の後ろから黄色の月が上つた。月の光りに断たれたる一團の雲は眞珠の如く透明になつて美妙な色彩を見せ、聖マリヤ・リベラトリチエの前にある三本の柱は幽霊の如く光つた。そして基督教の夕の祈りを告ぐる鐘聲は正に蹂躪され忘却されたる羅馬人を弔ふ挽歌であるてふ感益々深くした。

十四の卷

夫人リサ・チョーコンダ

——千五百三年——

千五百六年

其の地下の場所は暗きこと甚だしく、數時間其の中にあるうちに二つの感情——即ち恐怖と好奇の情とが私の心の中に生じて相争つた。暗き底を探る恐怖と其の秘密を知らんと欲する好奇心と。

レオナルド・ダ・ヴィンチ

—

レオナルドは常に言つてゐた——

「肖像畫を描くには特別の畫室が要る。それは長方形の庭であつて幅十ブラッキオ、長さ二十ブラッキオ、日光を遮るために壁を黒く塗り、屋根を張り出し、帆布の幕を懸けて置く。但し幕がなければ薄明るい夕暮時か又は曇つて陰氣な時を選んで描くのが宜しい。それが即ち此の上もない光線なのである。」

そしてレオナルドは自分の宿泊せるフロレンスの或る市民の家に斯くの如き庭を作らせた。此の著要なる市民は名をピエロ・チ・ブラッチオ・マルテルリと云つて大統領メヂチの委員であつて且つ數學者、知識あり友誼ある人

先
であつた。家はマルテルリ町にあつてサン・ジョーヴァンニ寺からメチチ宮殿に至る左側に位し、町の取附きから二軒目であつた。

千五百年の春も暮れなんとする或る日の午後、空気は霧を含んで暖かく、雲間から照らす太陽の光線はほんやりして、宛も水の下に輝いて美妙な水の影を投げてゐるやうであつた。正にこれレオナルドに眺へ向きの空模様で此の種の光線こそは婦人の顔に特殊の趣を添へるものと思はれた。

そして『来るか知ら？』と呟いた。これは約三年以來並々ならぬ不撓と熱心とを以て其の肖像を描いてゐる婦人の事を思つて呟いたのである。

そして其の婦人を迎へるため夫々畫室の準備に取り掛かつた。ジョーヴァンニは先生が常になく氣遣し氣な容子をしてゐるのを見て怪しんだ。

レオナルドは畫板、畫筆を用意し、一つく透明な亞刺比亞護謨の薄皮で蔽うてある繪具皮を用意した。レップヂオと云つて自由に動かし得る三本足の臺の上に乗せてある描きさしの肖像畫の被ひ物を外してから、畫室の中央にある泉の水を噴出させた。これは畫の婦人を娛しませるため造つたもので、落下する水は硝子球を動かして低い妙樂を奏する仕掛けで、彼の女の好きな白菖蒲、それからフロレンスの百合も泉の周圍に植ゑてあつた。尋いで牛飼ひの牝鹿を入れてある籠の中にパンを砕いてやつた。馴れたる鹿は此の庭を棲處として婦人は常に手裏餌を與へる習はしであつた。最後にレオナルドは椅子を正しく置き直した。それは滑かな黒塗りの櫛の木で作つてあつて背と肘に彫りをしてあり、其の前に置いてある柔かな絨氈の上には既に珍らしい白猫が體を曲けてゴロ

ゴロと咽喉を鳴らしてゐた。此の猫も婦人の慰みにするため外國から買入れたもの、右眼は黃玉、左眼は青玉に似たる異色の目で、實に美しい猫であつた。

其の間にアンドレア・サライノはヴァイオリンを奏で始めた。それからレオナルドとミランの宮廷で知り合ひとなつて今は此處に雇はれてゐる樂師アタランテはレオナルドの工夫したる馬首の形の銀の立琴を持つて來た。

レオナルドは最良の音樂家、唱歌師、嘯家、詩人、警句の最も巧みな落語家等を畫室に招いて彼の女が擬と椅子に坐して畫を描かせてゐる間の退屈を凌がせた。斯うして交互に嘯、音樂、詩などのために婦人の思想感情が喚び起されて其のたび容貌の美の表現が變化するのを研究するのであつた。

今やあらゆる準備は成つたのに未だ彼の女は來ないのである。

「何處にゐるのか知ら？ 今日的光線と影の具合は最も適はしくないのだが。人を遣つて訊ねさせようか知ら？ 併し私が何んなに熱心に待つてゐるか能く分つてゐる筈だから、まあ最少し待つてゐよう、其の中には來るだらうから」とレオナルドは腹の中で思つた。

然かもジョーヴァンニは見ると先生の頬に待ち遠しがつてゐるのがありくと分つた。

突然微風が軽く起つて泉の噴水が揺れた。其の水球の跳ねを食つた美しい菖蒲も一寸動いた。耳の鋭い牝鹿はぐつと首を立て、目を配つた。レオナルドは耳を傾けた。ジョーヴァンニは何の音も聞かなかつたが婦人が來たのだと知つた。

先づ謙遜な恭敬を持して畫室に現れたのは尼のカミルラであつた。これは彼の婦人と共に住せる女居士で常に

婦人の件をして何處へ來るのであつた。少し座を離れてしとやかに坐し祈禱書を読んで一切自分を消してゐるため最早や三年近く此處に通ふにも拘らずレオナルドは未だ此の人が物を言つたのを殆ど聞かないのであつた。續いて一同が待ちに待つてゐる當の婦人が來た。齡は三十、地味な黒衣を着、透明なる黒の覆面巾は顔の中央に達してゐた。これがリサ・デューコンダであつた。

リサはネーブルスの貴族の出、父アントニオ・ゲラルデニは千四百九十五年佛蘭西軍の侵入に遭つて産を喪ひ、娘をばフロレンスのフランチェスコ・デル・デューコンダに嫁がせ。フランチェスコは既に二人の配に先立たれてリサを三度目の妻として迎へたので、レオナルドより少きこと五歳、十二名の參事員の一人であつて後には其の長となつた人、然かも人物はと云へば何處如何なる國にもる型の碌々たる斗筭人、可もなく、不可もなく、唯平凡々として多忙で、事務に只管心を奪はれ、定規に依まつた日々の生活に満足し、若き妻をば單に家の裝飾と見、己が所有に係るシシリ牛の斑紋は分れど妻の主要なる美點は分らず、生の羊皮の賦税額よりもこれを知ること少なかつた。噂に依ればリサは偏に父の満足を得るため此の人に嫁したのであつて、これがために早くから戀してゐた男は自殺したり、又嫁した後にも熱心なる崇拜者——非常に辛抱強いが併し到底希望のない——が多くなるのであつた。世間の風聞にはこんな事を言つたが、資性柔和にして且つ貞淑、毫も出酒張ることなく、神を敬ひ貧を憐み、妻として眞實、主婦として善良、十二歳なる繼子のデッノラに對し母としての慈愛は最も深かつた。

デューヴァンニは夫人リサに關して以上の事柄を知つてゐたが、然かも注意して見てゐると夫人が此の畫室に來

るたび常にフランチェスコの妻たる態度を嚴密に守つてゐて、三年近く此處へ來るのにデューヴァンニが最初に得た印象は錯らず、次ぎく觀察する毎に益々其の印象は確實となつた。即ち婦人の身邊は何とはなしに神秘、夢幻、朦朧の氣に圍繞されて、デューヴァンニをして坐るに恐れを抱かせた。師匠が描いてゐる夫人の肖像は眞物に比べると稍現實味が勝つてゐるやうに思はれた。レオナルドは描畫のため椅子に坐して貰ふ間だけしか此の婦人と顔を合はせず、然かもそれすら夫人一人ゐるわけではないのに二人は互に或る秘密を享有してゐるやうに見受けられた。但し秘密とは決して戀の秘密ではなかつた、少くとも普通の意味で言ふ戀の秘密ではなかつた。レオナルドは或る時斯う言つたことがある——何の畫家でも他人の肖像を描く際は其の畫の中に畫家自身の類似を現したいと感ずる傾きがあるものだ。其の理由は蓋し畫に現るゝ類似と其の畫とは畫家の魂の創作であり表明であるからだ。

デューヴァンニは夫人リサの場合を見てゐると嘗に其の肖像畫のみならず夫人自身が日々益々畫家に似て來るものであつた。そして其の類似は顔容よりも寧ろ目の表現と微笑と此の二つに存してゐた。尤もデューヴァンニは此の微笑をばヴェルロッキの不信心なるトマススの唇に見、師匠の最初の作たる智慧の樹のイーヴに見、レダに見、岩上の聖母の中の天使にも見た。その他レオナルドはリサと相見する前に描いた百餘の畫中にも此の微笑を描いたのであるが、自分のこれまでの生涯に致々として自己の反映を追求して來たのが今や遂にリサに於いて最も完全に發見されたやうに思はれた。

デューヴァンニは婦人の微笑を見たとき心は掻き亂されて打ち驚き、宛も超自然物の前にもるやうで、現實を夢

と誤まり、夢の世界は現實と思はれ、夫人リサはフロレンスの碌々たる一市井人デューコンダの妻ではなくて、師匠の意思によつて現出した一個の幻影であり、師匠自身を女にした幻像とも見られた。

畫室に這入つてリサは椅子に坐ると白猫が膝に跳び上つた。リサの細い美しい指で撫でられて、猫は絹のやうな毛皮から微かにパチ／＼いふ音を發して火花を散らした。レオナルドは描き始めたが何故か直ぐに手を止めて黙つて坐し、一心に夫人を眺めて、其の顔に生ずる變化の最も微弱な影をさへ逃がすまいとした。

そして遂に言つた。

「奥さん、今日は何か心に思つてゐらつしやる事がある……何か心配事が。」

既にデューヴァンも今日のデューコンダは肖像畫とは似てゐないと見た。

「はい、少し心配がありました。あのデアノラが悪くなつたのでございます。私、昨晚は寐ずにあの子を看護したものですから。」

「然うですか。それではお疲れでせうから其の姿勢は苦しいでせう。今日は描くのを止して明日にしませう。」

「それは可けません。今日の心地好い日を此の儘過ぎすのは可けません。あれ、彼處の霧のある日光を御覽なさい、美しい日蔭を御覽なさい。今日は丁度私に持つて來いの日でございますもの。」

そして一寸間を置いて言ひ續けた。

「さぞあなたが待つてゐらつしやるだらうと思ひまして、實はもそつと早く來るやうになつてゐましたのついで引き留められました……あのソフニスバさんに……」

「誰ですか、それは？ あゝ分つた。魚賣りのやうな聲で、香水店のやうにブン／＼匂はして居るあの婦人です。」

リサは靜かに笑つて、

「旗手様の奥方のアルデューンチナ様がヴラキオ宮でお催しになつたお祝ひの事を是非私に聞かさなければならぬと言ふのです——晚餐の事、衣裳の事、戀人達の事などを……」

「然うでしたか、それではあなたはお嬢さんの御病氣を心配したのでなくて其の婦人の下らないお喋りに惱まされたのです。でも奇妙な事でした。奥さん、あなたは興味の無い人から何にもならない馬鹿氣た事を唯一つ聞かされてさへ其のために心に一つの陰鬱が出來て、本來の心配事よりも更にそれが自分の害になるといふのですが、それを未だお氣附きにはなりませんか？」

デューコンダは黙つて俯向いた。明白に兩人は甚だ能く相互を了解して常に言語を必要としないのであつた。レオナルドは再び畫に著手した。

「何かお話しして下さいまし」とリサは言つた。

「何を話ませう？」

リサは微笑して「ヴィーナスの靈地のお話を願ひます。」

レオナルドは特にデューコンダの好む話を知つて居た。それは旅行に關すること、自然界の現象、畫の構想に關する事などで、レオナルドはこれらの話を暗記して、女のやうな聲で毎時も變らず單純なそして小兒のやうな

言葉を使つて、音楽を伴奏させて、昔の噂へ話や子守話を語るものであつた。で、今もアンドレアとアタランテは楽器を取り上げてヴィーナスの靈地を話す時に毎時も序曲となる主題を奏した。そこでレオナルドは話を始めた――

『キリキアの濱に住む船頭の言ひ傳へによると、海に溺れる運命の者は天候の暴れ狂ふ最中、愛の神の靈地なるサイプラス島をチラと見る事が出来るさうです。島の周圍は旋風が恐ろしく唸つてぐるぐる渦を巻き、波が吼えてゐるのですが、多くの船頭は靈地の美妙な景色に魅せられて岩の上で船を失ひます。立派な船は澤山岩に乗り上げて、片々に砕けるのもあれば永遠に海底に沈むのもある。彼方の海岸を見れば難破船が群つて海藻が繁つて半ば沙の中に埋もれてゐます。舳を突き出しているのもあればヌツと艦を見せてゐるものもある、また船腹がアングリ口を開けて桁の見えるのは死骸の黒ずんだ肋骨のやうです。實に難破船の夥しいこと、恰ど復活の日が来て、溺死人が海から吐き出されたやうです。併し靈境は綠葉の幕で永へに鎖されて、百花咲き亂れる小山の上を太陽が照らしてゐます。空氣は非常に静かだから神殿の階で神官が香爐を焼くときに、香爐の烟は白い柱のやうに眞直に空に上つて、決してゆらくしないのです。海際から遠く奥の方にある静かな湖の中には大きな緑杉が映つて居てテラとも動いて居ません。音と云つては此の湖から流れ出る澤山の川と、それに斑岩から成る地盆を飛ぶ飛瀑と、此の二つのみが人の耳に楽しく寂寞を授けてゐるのです。そして遙か海の方で溺死せんとして居る人々は一瞬の間此の柔かな囁きを聞いて、美しい流れ、静かな湖を眺めるのです。風の吹き送る桃金娘や薔薇の香氣を嗅ぐ事も出来ます。海のあらしが烈しければ烈しただけサイプラスの神域は一しほ静寂になります。』

話は終つた、琵琶とヴァイオリンの音は止み、如何なる音楽よりも美はしい沈黙が續いて起つた。夫人リサは右の話を聞いて眠いやうになり、大分沈黙が續いた、め現實生活から退いたやうになつて、此の畫家の意思以外の一切の物には相關せざるかの如く、畫家の割符ともいふべき例の神秘なる微笑を湛へて、靜かに純みて深さの知れぬ水のやうにレオナルドの目を眺めた。

デューヴァンニ・ボルトラフィオは夫人と先生とを交互に見て、此の二人は鏡だと思つた。一枚の鏡は相互を映じて無限の中へ吸収するのだと思つた。

二

翌朝レオナルドはヴァキオ宮で（アングアリの役）を描いてゐた。

千五百三年に羅馬から此處に來たとき、フロレンス共和國の最高官たるピエロ・ソデリニから、當時落成したる會議室の壁に著名な戦争に關する畫を描くべき注文を受けた。そこで彼は千四百四十年、ロンバルデー公フィリップ・ヴィスコンチの總大將ニコロー・ピッチニをフロレンス共和國が破つたのを畫題に選んだ。

其の壁畫の一部分は既に完成してゐた。四人の騎兵は必死になつて一旋の軍旗を奪ひ取らうとしてゐる。竿の尖に揺れる旗は哀れに破れて殆ど襤褸に異ならない。旗竿はブツリと折れて將に片々に碎けるやうに震へてゐる。一方、五人の者は緊と竿に掴まつて敵に奪らせじと争つてゐる。劍は頭上に交はり、人々は口を開いて恐ろしく怒號する。顔は歪んで、其の妻は兜に打つてある怪獸の頬を見るやう。馬に鞍上の人の憤怒が乗り移つて、す

つくと後足で立つて、前足で馬同士の打合ひを演じ、耳は後ろに撥ね、虎のやうに齒を咬み鳴らして、ギラ／＼光る目玉を廻轉さしてゐる。其の下は一面に血の池。其の血の池の中で一人の兵が敵を殺さうとして鬚を掴み、首を大地に捻ぢ伏せてゐる。然かも其の瞬間に飛んで来る馬蹄に嗟乎蹂躪されるのを二人は知らずにゐる——此の戦争は酸鼻を盡くしたるもの、此の上もなき人間の愚さであり、畫家自身の語を假りて言へば、(最も獸性を帯べる癡狂であつて、あらゆる足跡を血汐で塗れしめるもの)であつた。

此の朝レオナルドは晝に筆を附けて間もなく煉瓦の牀の上に足音の響くのを聞いた。足音の主は彼に分つてゐると見えて、顔を燈めて目を擧げなかつた。此の人はフロレンスの旗手ピエロ・ソデリニ氏であつた。

レオナルドが使用する木、漆、白堊、繪具、亞麻油をはじめ其の他の瑣細なる物を購入する金は、ソデリニが豫め國庫から支出するのであるが、其の金の詳細なる書附けを求めて、假令一錢たりとも喧しく言つた。此の顯官が輕蔑して(暴君)と呼び做せるルドヴィゴ・スフォルツァやケーザル・ボルデアの宮廷に自分が仕へてゐた頃は、斯くの如き自由を尙ふ共和國、文明の平等を標榜する國に於てかく自分が受るやうな區々たる干渉は毫も受けなかつたのである。

『何がお望みでございましたか?』とレオナルドは一種の好奇心から訊ねて見た。

『私共はあなたの畫がフロレンス共和國の戦勝を不朽に傳へるため、且は我々の英雄がたてた記憶すべき勳功を示すため、又一つは心を高い處に置いて、貴重な愛國心の一例を與へて欲しいと望んでゐたのぢや。成程戦争といふものは此處にあんたが描いてゐる通りのものぢやらう、それは拙者も認めるがな、それにしてもレオナル

ドさん、何故あんたは晝を最つと高尚にしませんか? 詰り潤飾を施してな、斯んな極端を變改すれば好いのに

何故それをなさらなかつた? 拙者はそれをあんたに伺ひたいのぢや。と言ふ譯は諺にある通り(萬事中庸)なるものが即ち偉大ぢやからな。或は拙者の説が間違ひかも知らんが、拙者の考へでは、畫家の天職といふものは人民の教化するにある、人民に利益を齎すにありと信じますがな。』

と説き來つたソデリニ氏は今は自分のお得意な話題を持ち出して、目を光らせ、滔々と捲し立てた。其の一本調子の聲は石を磨り耗らす涓滴のボタリ／＼と落ちて止み間がない。畫家は殆ど返答をしなかつたが、それでも高位に處る此の市民が美術を何んな風に考へてゐるだらうと思つて、時々は少し許り注意を向けぬでもなかつた。併し大勢の人が詰まつて空氣が窒息するやうな部屋へ這入つてゐるやうに感じて其の苦しさはなかつた。

『人のため益にならん美術は金持ちの娯樂に過ぎんのぢや、懶け者の氣慰み、暴君の奢侈に過ぎんのぢや。如何でござる、此の説に賛成されませうな?』

『全くお説の通りです』とレオナルドは同意を表した。するとピエロは嘲弄の心を眼の瞬きの中に見えるか見えない位に宿して語を續けた。

『私共は年中絶えず討論しとりますが、其の討論を終結させる實際の方法をあなたに話して進ませませう。それはフロレンス共和國の市民を此の室に集めて、拙者の此の畫が果して道德に叶うとるか——詰まり人好きがするか何うか投票させて見るのぢや、それをすれば實に大い利益があつて、問題は頭數で決まるから、數學のやうに精確ぢやて。あんたも御承知の通り、人民の聲は神の聲でござるからな。』

と言ひ畢つて自分の此の思ひ附きを更に深く考へた。投票に用ゐる白球黒球をのみ一心に考へて密に嘲侮されてゐる事に氣附かなかつた。併し間もなくそれを察したと見えて、一般に美術家なる者は信頼し難き人物、且は没常識の者だから、此の畫家の嘲弄に逢つたからとて、それを憤り立てるのは大人氣のない仕打ちだと諦めた。そして最早や自説を述べずに、恰も上官が下僚に對する時のやうな語調を以て、自分はミケランヂェロ・ブオナロッチに此の會議室の第二の壁畫を描くやうに命じたところ彼はそれを承知したと告げて、其の儘室を辭し去つた。レオナルドは其の後姿を見送つた。つるくした白髪頭、足も背も曲がつてゐる彼は日頃を増して一層鼠に似てゐた。

三

ヴニキオ宮を出てからレオナルドは廣場にあるミケランヂェロのダビデの像の前で足を停めた。像は白大理石の大男、宛ら何かを防禦するが如く突つ立つて、瘦せた若々しい身を背後の黒石に倚せ懸け、石投げ道具を持つて右手は血管が筋立ち、左手に石を擲んで、胸の前に擧げ、眉をキリリと寄せて覗ひ定めるやうに遠くを凝視し、低い額の頭髮は既に勝利の花環のやうに見える。レオナルドは列王紀略の文を思ひ浮かべながら、此の王が嘗てサヴォナローラの焚殺された跡に立つてゐるのを見て、デロラモ師が徒爾に熱欲した豫言者のこと、マキオヴェルリが今尙ほ其の出現を待つてゐる英雄の事に考へ及んだ。

自分の競争者の手に成つた此の作に於いて、レオナルドは自分に等しく大きな精神の現れを認めしたが、併し其の偉大さは永久自分とは相反せるもので、恰ど實行と冥想、熱情と無關心、暴風雨と清明——との如く全然乖離してゐた。然かも不思議な事に自分は此の背馳せる力に牽き附けられて、何か知ら清新なそして錯たず人を魅殺する興趣を感じ得た。即ち側に近寄つてこれを吟味し、これを了解したい氣持ちになつた。

今より二年前のこと、サンタ・マリヤ・デル・フィオン寺の建築石材の中に白大理石の大塊があつた。これは或るヘボ彫刻師が出来損ひをやつた物で、一流の大家連は今更用に立ちはずまいと考へて撥ね附けた。其の石はレオナルドへも廻はつて來たが、例に依つて緩々思案して、寸法を量つて計算したのちに二の足を踏んだ。すると丁度其の時レオナルドより二十三だけ年下の男が現れて、何等狐疑せず此の仕事を引き受けて、夜を日に繼いで本統とは思へない程の大速力を以て勵精して、僅々二年と一ヶ月を以てダビデ像を作つた。レオナルドは騎馬像を石膏で作るにさへ六年を費したのだから、大理石でダビデの如き大像を彫るには何れくらゐ年月が要るか、殆ど見當が附かなかつたのである。

フロレンス人はミケランヂェロを以て少くとも彫刻の業に於いては、確にレオナルドの矢面に立つ人物だと言ひ囃した。年少のミケランヂェロは躊躇なく此の挑戦を受け納れたが、此の度は更に畫家として年長のレオナルドと競争せんとした。未だ一度も畫筆を手にしなない癖に、人の目に僭越と見える程の勇氣を以て會議室の第二の戰爭畫を描く事にした。

素よりレオナルドは此の年下の競争者に對して、あらゆる好意と推重とを寄せたが、ミケランヂェロは却て火の如く熱烈にレオナルドを憎惡して、彼の平靜なるを見ては輕蔑の意味に取り、あらゆる流言に耳を傾け、紛争の

口實を求めて、少しでも罅があれば目に物見せんと用心をさく／＼懈りなかつた。ダビデ像が完成の當時、大統領は一流の畫家と彫刻家とを招きて、何處に此の像を建つべきかを論ぜしめたが、其の時レオナルドは建築家デリアノ・ダ・サン・ガルロの説に賛成して、プリオロ樓臺の下を以てこれが最好の位置となし、宮城前に据ゑるといふ説を採らなかつた。するとミケランヂェロは怒るまい事か、これは必定自分の競争者が作つたといふ處から誰にも能くは見えない陰の方に隠さうといふ淺猿しい嫉妬心から出た言葉に相違ないと取つた。

當時抽象的問題を論議する傾向が一般に盛んであつた。或る時レオナルドの畫室にボルライウオリ兄弟、老齡のボッチェルリ、フィリッピノ・リッピ、ロレンツォ・ヂ・クレチ等の人達が集まつて、美術中に於ける彫刻と繪畫との地位の上下を論じ合つた。するとレオナルドは逸早く、一種奇妙な顔をして、下の如き意見を吐いた——

「美術は手の勞作を多く離れるに従つて、愈々完全の域に近寄るものです。それで、大方の人が繪畫と彫刻とに關して何んな區別を立てゝゐるかと思はるるに、繪畫に要するところは多くは心の努力、彫刻は身體の努力であると考へてゐます。これは事實其の通りで、彫刻家は徐々として鑿を使ひ槌を打ち下ろして、恰と種子のやうに大理石の中に這入つてゐる形體を解放するのですが、これをするためには其の人の體力をあらん限り振ひ出す事が必要です。すると體はがつかり疲れて来る。劇しい労働のために汗でズブ濡れになる。すると其の汗が埃と混ざつて、着物は一面に泥塗れの皮を被つたやうになる。そして顔はバン屋のやうに白い物を被つて汚くなつてゐます。剩に仕事部屋は何處も彼處も削り屑だらけで足の踏み場もないといふ始末。ところが畫家の方は然うではありません。實に此の上もない靜肅を持して、美衣を纏うて、晏如として椅子に坐して、畫筆を輕々と運ば

せて、其の手は心地好い繪具を扱ふ。家は清潔だし、それに騒しくないから、談話を交へたり、音楽、讀書の聲を聞いたりして、作の苦勞を緩和する事も出来ます。槌を打ち下ろしたり、鑿で削つたりしないから音に邪魔される事はありません。」

此の言葉がミケランヂェロの耳に這入つたとき、これは自分に當て附けたのだと考へて、時こそ來れと許り、毒言を以てこれに報いた。

「咄、お變だんの生んだ手掛け腹奴、汚い業だから恥辱だと言ふんなら自分で勝手に恥辱がつてゐるさ。此のミケランヂェロは古くから連綿として絶えない名家の正嫡だけれど、汗や泥土は決して輕蔑はせんのだ。一體其の討論からが馬鹿氣てるぢやないか。等しく美術たる以上は一つの源から出て一つの目的を目指してゐるのだから何だつて同じこつた。畫が彫刻よりも高尚だと吐かす奴は、畫も彫刻もからつきし分らない奴さ。まあ私の家の下女をつくりだ。」

そして會議室に描く畫を以て競争者レオナルドを打ち負かさうと一心になつて、熱烈たる精神を傾けて壁畫に取り掛かつた——そしてレオナルドを打ち負かすといふ希望は左迄難事ではなかつた。畫面はピサの役にあつた一事件を捉へたもので、兵士が水を浴びてゐる最中、敵の不意打ちを喰つて、楽しい波の中から我れ勝に這ひ上り、這々の體で堤へと急ぎながら、汗と埃に塗れてゐる着物を引つ掛けてダラシなく引き摺り、火のやうな日光に燦けてゐる鎧兜をあたふたと着けてゐる。

即ちミケランヂェロはレオナルドとは反對の方面から戰爭を描いたのであつて、(最も獸性を帶べる癡狂)では

なく、安逸怡樂を否認して、剛毅にして男子らしき義務の遂行を寓し且つ自國の偉大と光榮とのために働く英雄の争ひとして取り扱つた。

フロレンスの人々は兩つの畫の進行に注目し始めて、恰も視眼鏡を見るやうな熱心を以て兩畫家の競争を迎へた。初め其の争ひが政治と没交渉であつた際は彼等はこれを鹽のない羹のやうに詰まらなく見做して、單にミケランヂエロはメヂチに反對して共和國に與し、レオナルドは共和國に敵してメヂチに與する者だと言つてゐるが、今や何人も此の美術的決闘を周知するに及んでフロレンスは兩派に分れた。そして美術を虎の巻と心得てゐる人達は孰れか一方の畫家の隨喜者を以て任じてこれを宣明した。兩つの畫は敵陣の旗印となつた。遂に竊かに石をダビデの像に投じた者を出したとき、富人は此の暴行を貧人の所爲に歸してこれを非難するし、煽動政治家は其の罪は畢竟富人にありと言ひ、美術家連は弟子を咎めた。そしてミケランヂエロは旗手ソデリニ氏の面前に於いて、これは私の作を損ずるためにレオナルドが雇つた暴漢の所業ですと公言した。

或る日レオナルドはジョヴァンニ、サライノのゐる前で、リサの肖像を描いてゐるとき、夫人に斯う言つて話し掛けた――

「斯うして私があなたと話してゐるやうに、ミケランヂエロ君と顔突き合はせて話さへすれば全然言ひ開きが出来て、あんな馬鹿氣な争ひは必ず跡を絶つだらうと思ひます。私があの人敵とは愚かなこと、凡そ此の世に生きてゐる人の中でこのレオナルドくらの彼人を愛する者はゐないと屹度了解するのでせうに。」
夫人は首を振つた。

「レオナルドさん、然うは行きません。あの方はあなたを了解できますまい。」

「あんな人物ですもの、了解できぬ事があるのですか。唯困るのはあの方は自信を有ちません。餘りに自重心がなさ過ぎます。徒らに恐怖して自分で自分を苦しめたり嫉妬したりするのも、詰まり自分の力量が未だ飲み込めないからです。實に愚ではありませんか。だから私は一つ安心させてやりたいと思ふのです。何も私を恐がるに及ばないぢやありませんか。先達て(兵士水浴)の下圖を見たのですが、奥さんこれは偽りのない話です、私は全く魂消しました。自分で自分の目が信じられないのです。實際誰にしろ、此の若年の人の價値は分るものぢやありません。何處まで上達するかそれも分らないのです。今でさへ私と同等ではないのです。私よりも強いのです。奥さん、これは有りの儘の話だから打ち消してはけません。ミケランヂエロ君は私よりも上手です。」

リサは黙つて微笑した、宛らレオナルドの表情を其の微笑の中に映すこと鏡の物の形を映すがやうに。
一日彼はサンタ・マリヤ・デル・カルミネ寺のブランカッチ禮拜堂を訪ねた。此處にはトマソ・マサッチオの描いた有名な壁畫があつて、如何なる大家と雖も一度は此の畫に就いて研究したものであるから、それらの人々に取つてこゝは宛然學校と見られてゐた。此の日レオナルドは堂内で一人の青年を見たが、青年と云つても子供が大きくなつた位の年恰好で、自分が若い折にしたやうに矢張り壁畫を模寫してゐる。繪具で汚れた黒色の古い着物は、清潔ではあるが地質は粗雑な手織のリンネルであつた。背高い體は柳の如く嫺かに、纖く長い首は甚だ白く、優美なること少女の如く、青味を帯べる瓜實顔はくつきりして稍敏感を示し、黒い大きな眼はベルヂノがマドンナを描くモデルに使つたウンブリアの百姓女の眼に似て、思想の深みに乏しく、唯大空のやうに奥まつて處ろ

であつた。レオナルドは此の青年を再び新サンタ・マリヤ寺の(父の間)で見た。此處には自分が描いた(アングリアの役)の下圖を陳列してあつた。件の若者はマサッチオの壁畫に對したと同様に注意してこれを研究し且つ模寫してゐた。此の人は一見してこれがレオナルドたる事を知つたらしいが、自分から進んで話し掛けはしなかつた。

そこでレオナルドの方から言葉を掛けた。すると慌て、胸を動悸々々させて、非道く顔を赧らめながら、小兒のやうにブッキラ棒なそして稍無遠慮な口調で、彼はレオナルドをば自分の先生と看做し、伊太利隨一の大家と見てゐる事から、ミケランジェロの如きは先生の靴の紐を解くにも足らぬ人だと言つた。

レオナルドは彼の畫を見、且つ後に幾たびか言葉を交したのち、此の人は必ず大家になると見極めた。

あらゆる聲に應ずる術——彼は正しく其の術のやうに敏感であり、容易に反響し得た。そして易々として感化を受くる事は宛ら婦人に似、今はベルヂノ、ピンツリッキオ(彼は近頃ピンツリッキオと共にシエナ圖書館で繪を描いてゐた)、レオナルドの模倣最中であつた。然かも彼の未熟の中に、レオナルドは何人にも優つて感覺の新鮮があるのを發見した。そして青年は既に美術と人生の最奥の秘訣を推知し得たかの如く、最大の障害をばそれと毫も知らずに、輕々として、偶然に、殆ど遊び半分のやうにこれを克伏し、あらゆる才能を一身に豊充してゐるやうであつた。第一彼の心は未だ求める事を経験しなかつた。努力の倦怠、躊躇、努力の失望、絶望の謎、(凡そこれらはレオナルドに取つて常に魔夢ではなかつたか、常に呪詛ではなかつたか)を知らなかつた。そして此の大家が忍耐して以て自然を學ぶの必要と描畫の法則とを語つたとき、青年は優しい驚異の目を睜つてレオナルドを凝と眺めた、そして單に大家の説たるが故に敬意を表して傾聴してゐるのがレオナルドに明かに分つた。

或るとき彼は一の意見を述べたが、其の意味の深いのにレオナルドは呀と驚いた。

『畫を描いてゐる間は一切考へちや可けないと分りました。考へさへしなければ何んな事でも皆好くなりませう。』

レオナルドが大熱心を以て求めてゐた理性と感情との圓滿なる調和、愛と科學との圓滿なる調和を、宛も此の青年は否定して、自分自身がそれらのものゝ存在せざる證據であるかの如くに見えた。そして何等苦勞のない眼の中に、謙遜且つ無頓着な、洒々落落たるもの、輝々たるものを見ると、レオナルドはミケランジェロの敵愾心と侮蔑とのために惱まされた時よりも更に甚だしく自己の全生涯の事業に對する疑念を増し、一層美術將來の運命を疑つたのである。

最初相見たとき、レオナルドは此の青年に名と親と出生地とを訊いた。

『はい、ウルピノから來ました。父はデヨーヴァンニと申しまして矢張り畫描きです。私の名はラファエルです。』

四

アルノ河の堤防に缺潰を生じて、レオナルドがそれを修繕する事になつた、そして出立の前夜彼はマキャヴェルリを訪ねて今や家路に就いてゐた。マキャヴェルリはレオナルドが旗手ソデリニの請ひを容れたのを警めた。

レオナルドはトルナブオニ町を志してサンタ・トリニターの橋を渡りかけた。夜は更けて行人稀に、日中の暑氣は驟雨のために散じて空気が清新になつた。夏の暑さを受けてブンク悪臭を放つ水が河から上つて来る。サン・ミニアトの暗い岡の後から月が最中上つてゐた。ヴラキオ橋に近い河岸に並ぶ一廓の古風な家は、高低様々の露臺と支掌棒とを引つくるめて、どんよりと縁を成せる水面に映つた。アルバノ山の後には星が一つ輝いて居る。見渡せば恰ど昔の寫本に見る金泥の花文字のやうに、フロレンスの輪廓は静寂たる大空に對してクッキリ横はつてゐた。此の輪廓こそは世界に於いて唯一無二のもので、レオナルドに取つては人間の顔の輪廓のやうに親しみがあつた。北の方に聳えたるはサンタ・クロチエの古風な鐘樓で、附近にはヴラキオ宮殿に屬する織塔が眞直ぐに立てるほか、大理石のデオット鐘樓があり、サンタ・マリヤ・デル・フィオレの赤い圓屋根は緋百合の花(これはフロレンスの紋章で、國旗や楯に用ゐるもの)が大きく廣がつてゐるやうであつた。そしてフロレンス全部は月光を浴びて、大輪の銀色花かと異なれた。

都會には夫々固有の匂ひがあるとレオナルドは思つた。で、フロレンスの匂ひは溪蓀の馨りに、塵埃、濕氣、古畫のワニスを混じて微弱に匂うてゐた。

此の頃レオナルドの心は絶えずリサ・デオコンダの事を思つてゐるので、今も考へは變るともなく其の方に變つてしまつた。リサの身の上に就いては弟子のデオヴァンニと同じ位しか知らないのであるが、リサにフランチェスコといふ夫のある事に思ひ到るとき、彼は當惑よりも寧ろ恒久の驚駭を感じた。あの瘦せて背の高い、頬に疣があつて眉は濃く、如何にも實際的で、言ふ事といへば常にシシリ島の牛と羊皮の税金の事ばかり。リサが

あの人を夫に有つとは、あゝ！

レオナルドはリサの魅嬌を思ひ浮かべて數分の樂しみを食ふことがあつた。其の魅嬌は平凡な人界を超脱して天上界に屬するものながら、然かもレオナルドは日常生活に見る何物よりも現實的だと思つた。又現に生きてゐる此の婦人の美しさを痛切に感得した數分時であつた。

リサはヘボ詩人連が稱揚する所謂女學者の部類に這入る婦人ではなかつた。彼女は決して書籍の知識を示さないのであるが、偶々或る彈みから希臘と拉典が讀める事をレオナルドは知つた。のみならず談話の際は甚だ平易な言葉を用ゐるため多數の者から馬鹿のやうに思はれてゐるが、焉ぞ知らん極めて稀有な——特に婦人に於いて最も稀有な——智慧の本能をリサに於いてレオナルドは見出したのである。偶然ではあるがリサは折々文章の中に自己を披瀝して、其の精神が餘りレオナルドに接近し且つ類似するので、彼は此の婦人を以て唯一永遠の友であり且つ自分の魂の妹であると感じる事があつた。そして其の刹那、自分は冥想と實生活を劃する魔の圈を斷然飛び越したいと欲するのであるが、併し爾く欲する跡から直ぐに熱欲は消え失せる。然らば此の二人を結ぶものは愛であらうか？ 否々、かのプラトンの戀愛の嚆語、觀念的戀人の傷嗟、ペトラルカ風の舍利別的小曲の如きは、レオナルドに對して單に娛樂であり乃至は小五月蠅い事に過ぎなかつた。世の所謂戀と名くる熱情も等しく彼の性質とは縁遠いものであつた。彼は單に嫌厭するが故に決して肉類を食しないのであるが、それと等しく結婚或は其の他の方法を以て婦人を我が所有物となすを卑しとするが故に女性を遠ざけてゐるのである。即ち肉屋の前を避けると同様に婦人を占有するを避けて、これを非難せざる代りに承認を與へるでもなく、飢餓や

愛に對して葛藤する人性自然の法則を知りながら、然かも自分は其の渦中に投ずるを避けて、偏に貞潔と愛との至純なる法則に服した。

然かも自分は假りにリサを愛するにしても、今の如き秘密にして神秘なる交際以上に圓滿なる結合を此の戀人に對して望むだらうか？ 自分とリサとは同等の親となつて生んだ小兒の如き新生物、此の不朽の形像を除いて又外に何をか此の戀人に望まうぞ。然かも斯くの如く神秘にして至純なる結合とはいへ、此の中にさへ危険がある——普通の肉の愛よりも更に大なる危険があると感ぜざるを得なかつた。我等兩人は先人の未だ到らざる懸崖の縁を歩んで深淵の眩暈に抗し、其の致命的引力と争つてゐる。兩人の交はす言語は簡單であり、漠として意味完からざるのに、然かもこれに依つて互に秘奥を披くこと宛も太陽が朝霧の中から輝くやうである。で、時々自分は斯う考へて見る——若し霧が四散し、太陽が目を眩する許り強く照らして、神秘を殺し、幻想を溶融するとせば其の結果は果して何うか？ 自分乃至リサが一生懸命に骨を折つた結果、それが兩人の相等しからぬ事を知る證據とならば其の骨折りは何になる？ 魔の圈を飛び越えたり、想像を事實に化したり、靜思を生活に變じたりすれば何うなるか？ 機械學の法則を吟味し、植物の構造を調べ、毒の作用を検した自分は果して終生の友を査覈し、靈的少妹の心を解剖する等、凡そ人間の心を研精する權利を有するだらうか？ 若しもそんな事をすればリサの反抗を買つて、侮蔑と憎惡とを以つて自分は放擲されるのでなからうか？

然かも自分はリサを徐々として恐怖すべき死に至らせてゐるのだと思ふ事が度々ある。實際彼女の溫柔なるに自分は驚愕する。宛も永遠に知を搜すと同じ考へで自分は彼女を穿鑿してゐるのだ。微細に、然かも徹底的に自分に依つて探りを入れられてゐる彼女は實に無限の忍従を自分に呈してゐるのだ。遅かれ早かれ自分は定めねばなるまい、リサは自分に對して何であるか——女であるか或は靈であるか、それを定めねばならない。併し幸ひなるかな臨時の不在のために自分は、此の避け難き決定を其の期間だけ延期する事が出来る。そしてそれ丈の理由のために、自分は喜んでフロレンスを遠ざからう。

然かも今や其時が來て、訣別が逼るに連れて、自分は考へ違ひをしてゐたと分つた。然り、決定を猶豫すると愚かな事、出立のため却つて至急白い黒いのけぢめを付けねばならなくなつた。

以上の考へに一心になつてゐるので、自分は今行き止まりの寂しい袋町の中に迂路附いてゐる事が分らなかつた。四方を見廻しても自分が何處にゐるのか一寸見當が附かなかつたが、不圖、家々の上に方つてデオットの鐘樓が見えたので、伽藍の附近に來てゐる事が分つた。狭い往來の片側は眞暗な影の中に失せてゐるが、今一つの片側は月の光を受けて白く並んでゐる。見れば、遠くの方に赤い火が點されてゐる。其の火はフロレンスに特有なる樓臺、即ち露臺の上に細き柱があつて、其の上に半圓形の迫持ちがある高樓から來るのであつた。假面を被り外套を着た遊治郎の一團が琵琶の柔かなる音に合せて夜曲を歌つてゐる。

其の歌詞は大ロレンツォが作つた古い戀歌で、謝肉祭の行列の際に歌つたもの、調子は陰鬱な中に陽氣な味があつて、自分は若い時分これを覺えてゐた事として今は耳に面白く聞かれる。

あはれ美しき青春は逃ぐ、

それを捕へて幸ひなれ、

呪ひか將た福祉かと、

明日をば知るまじものを。

明日をば知るまじものを——此の最後の句は悲しい前兆を以て自分の耳に痛ましく淀む。

既に老の鬮を跨いで暗黒と寂寞とに近いところに、運命の神は終に生ける魂、血縁の魂を贈つたのであるまいか？ 此の魂を自分は拒絶すべきか？ 排斥すべきか？ 従来と同じやうに今も静觀のために生を犠牲に供せねばならないのか？ 遠く離れたる物のために近い物を捨て、理想のために現實を捨てるのか？ 眞と性命とを有しながら朽ち行くデオコンダと實體の存せざる不朽と——此の兩つの中孰れを選めばよいのか？ 兩つとも自分には親しいものであるが、然かも孰れか一方を選ばねばならない、そして彼女のために早く選擇する必要がある。

然うは思ひながら、自分の意思は依然として薄弱であつた。何等決定を見ずに、當途もなく街上を彷徨しながら、討論——自分一人の討論を續ける。

聽てレオナルドは寄寓せるピエロ・マルテルリの家に来た。扉は鎖されて燈火は消してあつた。そこで鎖に吊るしてある槌を取つて叩いたが立關番は出て來ない。尙ほ續け様に叩いた。併し徒らに石段の迫りに響いて、其處の反響が返答する許り。其の反響が消え去ると今度は沈黙が相續いて、月光のためそれが一層深くなるやうであつた。

あつた。

近くの塔の時計が鳴つた。重く刻む其の音は、時劫と、世紀の暗黒及び寂寥と、永へに歸り來ぬ過去——これらのものが黙々として逃げ行く恐ろしさを語つた。そして最後の響は、月光の靜寂たる空中で、長い間震揺して、益々擴り行く音波の中で或は弱く或は強く、宛らあの(明日をば知るまじものを)を繰り返してゐるやうであつた。

五

翌る日、リサは常の時間に畫室へ來た、そして此の日初めて尼を連れずに自分一人で來た。これが相見る最後だと彼女は知つてゐた。太陽の明るい朝であつた。レオナルドは帆布の幕を下ろして、海底の影のやうに朦朧として透明な柔かい光線を出した。此の光線はリサの顔に最も趣きを與へた。

畫室には彼等兩人きり。

レオナルドは黙々として筆を運んだ。彼の心は安靜して畫に吸収され、昨夜の考へは忘れて、リサと訣れる事、選擇の避くべからざる事も最早や頭になく、過去も未來も等しく記憶から消え失せた。時は停止して進まぬやうに思はれ、リサは宛も始終此處に坐つて、例の不思議な微笑を靜かに含んで、常に自分の前に坐してゐるやうな氣がした。レオナルドは實際生活に於いて行ひ得ぬ事をば想像力に依つてこれを行つて、二つの形像——即ち現實と其の反映、生きつゝある女と永遠に不朽の女とを一つに渾融した。

今や彼は非常の救濟を得たといふ感じになつて、最早や夫人リサを恐れも憐れみもしない。リサの柔順は能く

自分が知つてゐる。如何なる事をも承諾し、如何なる事をも忍び、縦へ死ぬやうな目に遭つても何等反抗しない女である。そして時々レオナルドは好奇心を以てリサの顔を眺めた——それは死刑囚と共に刑場に連れ立つて、最後の刹那の顔面に現れる恐怖の戦慄を見んとするかの好奇心に同じかつた。

と不意に、リサの顔に怪しい陰影が現れた。招かざるに來つた或る考への陰影のやうに閃いて、鏡面に息を吹き掛けて生じた曇りを見るかのやうに、素より畫家がこれ呼び醒ましたのではなく、寧ろ消え去らん事を欲するものであつた。そこで彼はリサの邪念を鎮めて、魔の圈の中に依然たる『型』として舊の如く引き戻し、以て人間の陰影を追ひ攘はうと思つて、恰ど魔法使ひが呪文を唱へる態度で神秘的な話の一つを語つた。

「私は何うしても自然界の新しい形體、神秘的なる創造物を見たくて堪らなかつたものですから、到頭洞窟に達しました、そして其處の入口で恐怖に襲れたまゝ、凝と立ち竦んでゐました。そして左の手を右の膝の上に載せて腰を屈めました。それから暗黒に慣れるため目に手を翳したのです。そして直ちに氣を引き立て、窟の中へ這入つて、幾足か前へ進みました。それから顔を燈めて精一杯目を睜つて、自分で氣附かぬ間に方向を變へました。彼處や此處と道を探つて何うにかして本道に出たいと、暗黒の中を彷徨しました。併し暗黒に逼られて數時間其の中で過すうちに、恐怖と好奇の感情が劇しく心の中で争ひました——暗黒の窟を探る事の恐ろしさと、其の秘密を知りたいといふ好奇心とです。」

と言ひ畢つて黙した。常ならぬ曇りは依然としてリサの顔にある。

「そして其の二つの感情は何ちらが勝利を得ました？」とデューコンダは低い聲で訊いた。

「好奇心です。」

「そしてあなたは其の大秘密を御存じになりましたか？」

「然うです……知られるだけの事は。」

「それは人に御傳へになりますか？」

「否、少しも傳へようとは思ひません、又それが出來ないのです。併し恐怖に打ち勝つだけの好奇心ならば人に傳へる事が出來ます。」

「併しレオナルドさん、其の好奇心だけで充分でなければ？」とリサは常になく目の中に火を宿して緩やかに言つた。「好奇心よりも、最つと他のもの、最つと深い感情が、畫布の最終の寶、最大の寶を赤裸々にする必要があると思はれますれば何うでせうか？」

斯う言つてこれまで一度も見せなかつた或る微笑を畫家に示して見せた。

「併し好奇心以上に何が要りませう？」とレオナルドは反問した。

リサは口を噤んだ。其のとき太陽の細い光線——思はず目を塞がせる強い細い光線が、幕の裂け目からキラリと射し込んだため、朦朧は消え失せて、神秘と遠い音樂のやうに柔かに明るい陰影は逃げてしまつた。

其の時不意にリサは訊ねた——

「あなたは明日お立ちになりますか？」

「明日ではありません、今晚です。」

「私も直ちに立ちます。」

レオナルドはリサの顔を見詰めて何か言はうとしたが、遂に口には出さなかつた。自分はリサの言葉の意味を付度したと思つた。自分が當市を去るものだから、リサも此處にゐたくないのだと。

併し言葉を續けてリサは言つた。

「フランチェスコは今直きカラブリアへ行きました、三ヶ月滞在するのでございます。で、私も一緒に連れて行つて貰ふやうに申しました。」

レオナルドは顔を蹙めた。最早や晝室に射し込んだ日光は自分の念とする所ではない。噴水は幽霊のやうに白くなつて、性命の虹の如き色を帯びてゐる。レオナルドは熱々感じた——自分は臆病な、弱々しい、憐むべき生活に戻つてゐるのだと。

リサは言つた。

「構ひませんから幕を最つとお引きなさいまし、今日は未だ早うございます。私は疲れてゐませんから。」

「否、もう澤山描きました」と言つて筆を擱いた。

「あなたは私の肖像を仕上げなさいませぬのね？」

「何故ですか？」と彼は驚きながら急いで言つた。「それでは旅からお歸りになつても、此處へ入らつしやらないのですか？」

「参る事は参りますが……だつて其の時の私は今と同じでせうか？ あなたは人間の顔は——取り分け女の顔

は早く變り易いとお話になりましたが。」

「描き上げたのは山々ですが、折々それが駄目のやうな氣がするのです。」

「駄目ですつて？ あゝ然うでした、あなたは常々其の駄目な事を望んでゐらつしやるから、それが何一つ成就しないのだと聞いてゐますが。」

此の言葉の中に優しい非難を含んでゐるとレオナルドは思つた。

「遂に時が來つたのだ！」と彼は考へた。

リサは立ち上つて例の如く靜かに言つた。

「さよなら、レオナルドさん、道中御無事に。」

レオナルドも立ち上つた。夫人の顔は弱々しい哀願と怨みとが今現れてゐる。あゝ此の一瞬——此の一瞬こそは兩人に取つて取返し附かぬもの、これが最後である點に於いて、宛然死そのものに等しいとレオナルドは知つてゐる。故に此の満幅の沈黙は自分の方から破らねばならないと思ひながら、然も口は言葉を吐かうとはしなかつた。今こそ解決を見附けようと、一生懸命に焦れば焦るほど自分の無力なのが意識されて、必然兩人を分つべき淵の深さが明白になつてくる。夫人リサは依然として平靜に微笑してゐる、が、然も其の靜けさ、其の輝きは、レオナルドの目に死人の微笑のやうに映じた。堪へ切れぬ憐憫で、畫家の心は一杯になる。そしてそれがために益々心弱くなる。

デューコンダは手を差し伸べた。其の手をレオナルドは受け取つて接吻した——相見えて以來今初めて接吻した。

それと同時にリサはつと體を曲けた。そして其の唇が自分の髪の毛に觸れたのをレオナルドは感じた。

「神様のお守りがありまするやうに」と夫人は簡單に言った。

驚駭から醒めてリサを見ようとした時、夫人は既に晝室を去つてゐた。

前後左右を取り圍む夏の午後の沈黙は、深夜に於けるよりも甚しく威嚇した。時を刻む重々しい音が再び聞える。時の暗黒と寂莫、過去、時劫——又と復り來らぬこれらのものゝ遁逃を時計は語つてゐる。そして最終の震搖が消えた刹那、悲しい愛の歌が耳に響いた。

(明日をば知るまじものを。)

六

リサの夫デヨーコンド氏は十月にならなければカラブリアから歸らない事が分つてゐるので、レオナルドは歸府を十日間延ばして、リサがフロレンスに歸つたとき丁度自分も歸る事にした。そして其の日になる迄の時間を數へたが、何か知ら迷信的の恐怖が襲ひ來て、若しも何かの事故が生じたら兩人はまだ長く離れてゐて、顔を見る事が出来ないのだがと懸念が生じた。否々、斯んな事は一切考へないでゐようと自分で努めて、愁つかリサの其の後の模様を訊き糺して萬一失望する事を耳にしては可けないと思つて、何人にもそれを聞き合はさなかつた。

そして遂に其の日は來て、彼は早朝フロレンスに到着した。濕氣を含んで、陰氣臭い秋の日の中に、フロレンス

の都は特別に美しくかつた。それはデヨーコンダを偲ばせる日であつた。疑ひもなく彼の女に適はしい日——即ち空は透明に霞んで、水中に見る日光のやうに柔和な光線が射してゐた。

レオナルドは最早や一切考へなかつた。自分がデヨーコンダと逢ふ時に兩人は何んな容子をするだらうか、自分は何と言つたら好からう、又何んな素振りをすれば兩人は最早や別れないやうになるか、何うすればリサを自分の唯一の友、自分の魂の妹として永遠に交る事が出来るか——最早や斯んな事は一切自分の心に訊いて見なかつた。

「物事を餘り考へないでゐれば自然に善くなるのだ。何も考へないのが大切だ」と青年ラファエルの語を思ひ出して彼は獨語した。「唯私はリサに逢つたらこれだけ訊いて見よう——何も言はずに別れたあの日の事を悉皆聞かして下さいと言はふ。そして洞窟の不可思議を發見するために、好奇心よりも一層必要な物とは何であるか説明して貰はう。」

そしてまざくと眼前に自分の生を眺めて、恰ど十六歳の少年であるかのやうに魂は喜びで充ち満ちた。然かも此の喜びの底にさへ蟲が知らせるのか、或る不幸が墜ちかゝつてゐるといふ懸念が半ば無意識に動いてゐた。

其の日の夕方、彼はマキャヴェルリを訪ねた、そしてデヨーコンド氏の邸を訪ねるのは明日にしようと思つてゐたが、餘りの待ち遠しさに矢も楯も堪らなくなつて、今直ぐ出掛けて行つて、門番からなりとも、奥様は無事にお歸りになりましたといふ一言を聞かんものと心を決めた。そこでトルナブオニ町を過ぎてサンタ・トリニター

橋の方へ行つたが、其の道筋は往きと還りとの差こそあれ、旅途に出發する前夜彷徨ひ歩いた處であつた。フロレンスの秋のならひととて空模様は急に更まつた。小刀の如く鋭い北風はムニョーネの河谿から吹き起り、ムヂェルロの頂きは雪で白い。往來にボツ／＼雨が落ちて來たが、遙か天と地の境に方つて、明るい空の色が狭く筋を成して覗いてゐる邊から不意に太陽の際立つた黄色い光が洩れて、濡れた道路をバツと照らし、屋根を光らせ、往き交ふ人の顔が明るく輝いた。そして雨は銅粉のやうに見えて、遠くの方の窓硝子は赤い炭火のやうな色を呈した。

位置は橋の附近、サンタ・トリニター寺と向ひ合つて、河岸とトルナブオニ町との作る角のところに、スピニ宮が巍々として建つてゐた。宮は黄灰石の大石片を以て成り、一見城塞の觀があつて、槍形の格子窓と城に似たる屋根を有し、其の下の方には宮殿の習ひとして石のベンチが幾つも並び、人々は此處に集まつて談話をしたり、日向ほつこをしたり、或は日向を避けたり、骰子を弄び碁を圍んだりするのであつた。今一つ、宮殿の向ふ側に樓臺があつて、其處からアルノ河が望まれた。

其の樓臺の下をレオナルドは通り掛つたとき、其處に澤山の人達が一團を成して居て、雨の襲來に氣附いたと氣附かなかつたとかと喧しく論じてゐた。

大抵はレオナルドの知らぬ顔であつたが、それでもある者は聲をかけて、

「レオナルドさん、まあ此方へお出でなさい、そして此の問題を解決して下さいませんか」と言つた。

彼は足を停めた。其の所謂議論なるものは、ダンテ地獄の卷三十四章の、ルシファーが地獄のどん底の氷の中に胸より高く埋もれてゐるといふ記事に關することであつた。

同じく議論を闘してゐた金持ちの羊皮商が、右の事をレオナルドに説明して聞かせたが、然かも當人のレオナルドは半分しか其の方に耳を傾けず、残りの半分の注意力をば、ルンガルノ・アッチアイオリに沿うて來る一人の男の方に注いでゐた。其の男は熊のやうに重い足取りで、よろけるやうに歩み、頭大に、髪黒く、髯の恰好悪く、身體は曲つて骨立ち、見窄しい着物を無頓着に羽織るやうにして、眉太く、顔色沈みて雙の耳は突出し、鼻には折れ目があり、興奮せるためか小さな目は膨らみ、且つ夜業の烈しいために其の縁が奇妙に赤くなつてゐた。實に噂に依れば此の人は仕事部屋として好んで暗い地下室を選び、新二ツ目入道と云つた格で小さな圓ランプに額にくつ附けて仕事するといふ事であつた。ミケランヂェロ・アオナロッチ——此の人はそれであつた。

「で、先生、御意見を拜聴したいもので」と議論してゐた人達はレオナルドを促した。

レオナルドは答へて、「ミケランヂェロ君はダンテの研究者ださうですから、それはミケランヂェロ君にお訊ねなさい。私よりもよく答辯が出來ようから。」

蓋しレオナルドは自分とミケランヂェロとの確執が自然に消滅せん事を望んで、兩人直接に言葉を交す機會あれかしと只管待つてゐたのである。

自分の名が耳に這入つたので、ミケランヂェロは立ち留まつて目を舉げた。由來彼は無暗と内氣な恥かしがり屋で、他人の凝視を恐るゝ事甚だしく、それを見て自分の顔の醜さを人々の輕侮してゐる意味に取り、何事につ

け自分の醜を感じる念がこびり附いてゐた。で、今や仰向いて樓臺を見れば、大勢の者が一種疑ひの目で自分を見てゐるし、且つ其の中にはレオナルド・ダ・ヴィンチの笑ひ顔が見えるのみならず、それでなくてはへ背の高い此の警敵は自分を樓臺から見下ろしてゐるので、それと見た一刹那、羞恥は忽ち憤怒に變じて、青くなり赤くなり、言葉は喉に詰つて暫くは出て來なかつた。

「其の説明は貴様自身でしろ！　へん世界中での物知りの癖に、ロンバルディーに買収された貴様ぢやないか。書物をいぢくるのが貴様の分相應だ！　へん、あの時の事を考へて見ろ、あの石膏の騎馬像に十六年もかゝつてさ、そしていざ青銅に鑄る段になれば失望しておぢやんになつたぢやないか！　様あ見やがれ！」

ミケランヂエロは自分の口汚い悪口雑言をそれと意識せるに拘らず、此の警敵に對しては、如何程毒づいても決して喰ひ足りないと思つたほど憤懣が激しかつた。

レオナルドはこれに答へずに相手の顔を真正面に眺めた。側にある人達も口を噤んで兩人を眺めた。

ミケランヂエロの凌辱に對してレオナルドの穏かな、殆ど女のやうな微笑は悲しみを帯びて心の弱さを示した。嘗て夫人リサが、「あなたの静穩は暴風雨よりも尙だ偉大な力があるのですが、其の静穩を有つてゐらつしやるものだからミケランヂエロさんは到底あなたを容れる事は出來ますまい」と言つたのが思ひ出された。

そしてダビデの像を彫んだ人は、これで言ふべき事がないといつた風をして、手を振つて、クルリと彼方を向いて歩み去つた。自ら意識せざる怒罵の陰鬱な習慣を有する此の男は、例のよろ／＼したる歩き振りして、首を曲げ、超人間的の重荷を荷つてゐるやうに肩を窄めて、濁つた銅色の雨と嚇すやうな日光との中へ溶け去つた。

レオナルドは道を續けて橋に差し掛かつたとき、スピニ宮の樓臺にゐた一人が自分の後を追つ掛けて來た。此男は生粹のフロレンス人であるのに、猶太人其の儘の容貌を有して、質の悪い風聞子たる事は分つてゐるのでレオナルドは一向相手にならず、黙つて橋を渡ると、傍らから小男はチョコ／＼走りをしてレオナルドに並びながら、様々とミケランヂエロの事を持ち出して、敵手の口から彼に對する悪口を誘き出さうと骨を折つたけれど、レオナルドは黙り續けて、其の手に乗らなかつた。何か聞き出すが最後、直ぐ其の足でそれをミケランヂエロに持つて行く心組みである事は言ふ迄もない。

そんなにされても出酒張り者は退き下らなかつた。

「時に先生、デューコンダさんの肖像は未だでござりましたかな？」

「未だです。それがあなたに何うだと言ふのです？」

「別に何うでもありませんがな、何……その……一寸考へてゐただけの事つてす。へ、一つ繪を三年間も描き續けてゐらつしやるのに未だ未成品だと仰有る！　手前共のやうな無學な素人から見ますと、あれで全然出來上つてゐるとしか思へませんがな。あれ以外に何もなさる事はないやうに思へますが。へ、へ、」と追従笑ひをした。

レオナルドは小男の襟髪を掴んで、河の中へ投げ入れたかつた。

「で、先生、今となつては何うなさいます？　あの事は多分未だお聞きにはなるまいと思ひますがな？」
レオナルドが此奴の言ふ事を聞くまいと思ひながらも、此の時ピリリと恐怖を感じた。明白に小男は舌の上に

何物かを有つてゐる。彼は目を踊らせた。手を振つた。此の男正に害蟲其の儘である。

そして『お、ベネデット上人』と仰山相に叫んだ。『先生は今朝お歸りになつた計りだから、あの報知は未だお耳に這入つてゐますまいな？』思へばデューコンドさんはお氣の毒な方ぢや、三度目の奥方もあの始末……實に運の悪いお人ぢやて。リサ様が天命を受けて亡くなられてから最早や一ヶ月になるかな。』

レオナルドの目は暗くなつて暫くは氣絶しさうになつたが、自分を惱ます此の男の穿鑿するやうな凝視に堪へるため、人間業とは思はれぬほど自分を制して繼に事なきを得た。顔は蒼醒めたけれど幸ひにそれと探られなかつた。小男は何の手應へもないのがつかりして臆て立ち去つた。

レオナルドは自分一人になると共に次第に心の靜安を回復して、何よりも先づあのおせつかい者は嘘を言つて聞かしたと思つた。長らくデューコンダとの浮き名を立てられてゐた自分に故ら凶報を構へて、これを言つたら何んな風にするか見てやれと狂言を仕組んだのに相違ない。デューコンダが死んだなどと言つたつて誰が本統にするものか。

然も日没前に彼は一切の事を知つた。夫人リサは或る人の説に依れば傳染性の咽喉病に侵されて、カラブリアからフロレンスに歸る途中、ラゴネロといふ小さな町で亡くなつた。

七

ピサからアルノ河を他に轉流さす計畫は却て災害に終り、河水汎濫して工事を破壊し、百花繚亂たる低地今は

沼澤と化して瘴癘を發生し、ために人足は續々マラリヤ熱のために瘡るゝに至り、遂に勞力と經費と人命とを犠牲として寸毫の功をも致さなかつた。フェルララの技師は旗手ソデリニ、秘書マキャヴェルリ及びレオナルドの三名に責を歸し、三人は世人より呪詛を受け、知人すら街上に逢へば顔を反けた。マキャヴェルリは苦惱の爲めに病氣になつた。

ボデスター宮の公證人にしてレオナルドの父たるピエロ・ダ・ヴィンチ氏は八十歳を一期として二年前に卒した。

父はレオナルドをも正嫡の二子と等しく遺産の事に與らせたいと度々所存を洩らしたが兩子は父の意思を履行しなかつた。其の頃レオナルドは甚だ窮乏するの餘り、父の遺産は確に自分にも來る事と信じて、猶太人の一高利貸が該遺産の請求權賣却の擔保として金を貸すからと言つたのに釣ひ込まれて同意を與へた。ところが今やそれが訴訟沙汰となつて六年間續いた。するとレオナルドの弟兩人は兄の不人望なるを奇貨措くべしとなして、盛に火中に油を注いで、或は彼を以て魔法使ひなりと誹り、無神論者となし、ケーザル・ボルチアに奉公せる間にフロレンスに對して大叛逆を計つたと言ひ、或は解剖のために人の墓を發いて死體を發掘したと非難し、其上庶兄の亡母カテリーナの事を引つ張り出して侮辱を加へ、レオナルドが二十年前に受けた讒誣の告發をさへ復活せしめた。

これらの災難のほか、會議室の壁畫の失敗があつた。嘗て(最後の聖餐)で苦い目を見たにも拘らず、更に一段の工夫を油繪具の上に凝らして、此の度の(アンギアリの役)にも又これを使用して描いた。そして約半ばの功程

に達した頃、畫の前に火鉢を置き、盛んに火を起して繪具を速に石灰に定着せしめんと企てた。併し火熱は畫の表面の下部に作用するに止まつて、上部のワニスニスの繪具は乾かなかつた。

彼は幾度かこれを試みたが遂に功がなかつた。茲に於いて油繪具を用ゐて壁畫を描く第二の企ては第一回と同様不成功に終つたと悟つて、此の戰爭畫は（最後の聖餐）のやうに必ず褪色する事が分つた。

で、ミケランヂエロの言草ではないが此の度も又失望の結果、業を擲つての己むなきに至つた。

そしてピサの掘割や義弟の訴訟沙汰にも増して、彼は此の畫のために困らされた。ソデリニはこれが注文を完全に果さんとして商品出来期限の正確を請求する態度を以てレオナルドに逼つて、一定の期限を切つて完成を強ひ、或は罰金を以て威嚇し、或は官金濫用でふ名を着せて公然非難した。然もレオナルドが友人から借り集めた金で、自分が國庫から支給された一切の金をこれで辨償するからと言つた時は、これを受け取らうとせず、當時フロレンスからミランへとレオナルドの引き取り方を相談してゐたロンバルデーの大守シャルル・ダンボアーズに臆面もなく次の書面を發した――

レオナルド・ダ・ヴィンチの仕打ちは誠に感服致兼候大幅を描く爲莫大なる金を受取候て今少しにて完成を見候間際に至て放擲仕候之れ我國に對する叛逆者の行爲に御座候。

冬の一晩、レオナルドは唯一人畫室に坐してゐた。風は煙突に唸つて四壁に顛ひ、蠟燭の火はチラ／＼と揺れ

て、木の棒から吊り下れる剝製の鳥は宛も飛翔するかのやうに動き、書棚の上には例の蜘蛛が驚き慌て、網の上を走つてゐた。バラ／＼と窓を打つ雨聲は何人か家に這入らん事を欲して扉を叩いてゐるやうに聞かれた。其の日は晝中糊口のために仕事を續けた事として今は恰と熱に惱む夜のやうに疲勞を覺えたので、徒然なるまゝに科學の研究を試みたり、鳥羽繪を描いたり、讀書したりしたが、何一つ手に落着かなかつた。と云つて眠くもないので終夜起きてゐる事にした。

そしてずらり並んでゐる書物や坩堝、レトルトの類、アルコール漬けの奇怪な動物の壘を眺めたり、眞鍮の四分儀、渾天儀、機械學、天文學、物理學、水力学、光学、解剖學等の研究の器械を眺めたりしたが、これらの物を嫌厭する感情が例になく心の中に一杯になつた。考へて見ればあの徴びた書籍、人骨、性命なき器械の上の暗い隅にゐる古蜘蛛と自分とは何等差違がないのではなからうか？ 何人にも讀めない字で書いてある若干の紙片を除いては、何が自分に残るのか？ 自分と死、自分と最後の忘却との間に何か残る物があるだらうか？

と思ひながら、端なく子供の時分アルパノ山の頂きに登つた時の愉快さを思ひ起した。あの時は鶴の群を眺めたり、春の新鮮な息を嗅いだり、フロレンスの都を美しく眺めたりしたものを。フロレンスは紫水晶のやうな日光の靄の中に甚だ小さく包まれて、恰と杜松の樹の二本の枝の間にポツンと挟まつてゐるやうに見えた。實にあの頃の自分は幸福な境涯であつた。何一つ考へるでもなければ知らうとするでもなく、實に幸福な境涯であつた。

併しそれにして自分も自分が經來つた生涯は全然嘲侮であつたらうか？ 愛は竟に知識の娘ではなかつたらうか？

と沈吟しながら、雨風の咆哮、轟々たる叫聲に耳を傾けてゐるうちに、マキャヴェルリの言つた事が胸に浮んだ。

「人生で一番恐ろしいのは貧乏でも心配でもない、病氣でもなければ悲哀でもない。死そのものすら左まで恐ろしくない。何と言つても心の倦怠が一番恐ろしい。」

依然として夜陰の人間ならぬ聲は人の心の到底遭遇せざるを得ずして然かも知識し難き種々の事柄を思ひ起させた——例へば寂莫の感、一切の存在物の母たる老齡の渾沌が其の胸に貯へたる眞の暗黒、此の世に於ける魂の涯りなき倦怠など……

レオナルドは起つて燭を取り、隣室に行つて臺架の畫に被さつてゐる死衣のやうに重い巾を外した。それはリサ・デューコンダの肖像であつた。

リサに死別して以來一度も此の畫に接しなかつたので、今初めてこれを見るやうな氣がした。畫中に籠れる性命の強い力！自分の作品の前に立つて坐るに戦慄を覺える。これを見て思ひ出したのは、魔法畫像に對する古い言ひ傳へで、其の畫に針を突き刺すと、當の肖像の人物が死すると言ふのであつた。併しリサの場合を考へるに、自分はリサに對して其の裏を行つたのであるまいか、即ち生ける婦人の性命を奪つて死んだ婦人にそれを與へたのではあるまいか？

實に此の畫は申し分なき生き／＼として確かな物であつた。着物の褶、襟頭の廻りにある開き口、これを飾れる美しい刺繡の小さな星章に至る迄悉く明確に出してある。然かも白き胸は膨らみ、血は動脈の中に暖かく流

れ、顔の表情は様々に變化するやうに見えながら、リサ其の人は遠く幽冥に通れて、死するなき青春は此の畫の背景を成せる峻嶒（これは奇怪を極めて、鍾乳石の如く、又大空の青色を帯べる岩石の如く、昔浜びたる世界の幻影のやうに見える）よりも甚しく古色を帯びて居た。あゝリサ、汝の黒く透明なる覆頭巾の下から髪の毛が垂れてゐる様は恰ど神聖な機械學の法則に支配されたる波が瀑布となつて落ちるのに等しい。私は今こそ、汝を失つた今こそ、初めて汝の魅嬌が了解された。自分が自然界に求めてゐた魅嬌——それは即ち汝の魅嬌であつたのだ。宇宙の秘密なるものは、實は私が戀をしてゐた汝の秘密であつた！

で、今となつては私は汝を試めてはゐないのだ、汝が私を試めてゐるのだ。汝の雙眸——それは何事を意味するぞ？私の魂を映せる雙眸は何を語るのか？私と汝が最後の別れをした日に、汝が（洞窟にある此の上もなく不思議な秘密を發見するために、好奇心より以上の物を要すれば？）と言つたあの問ひを今繰り返してゐるのであるか？

それとも此の故人が人を見るととき常に圓滿なる知識の宿れる微笑を以てしたが、此の畫面の微笑は同じくその類を異にしたる微笑なのか？斯う考へるとリサは本統に死んだのだと初めて信するやうになる。然らばリサの死は自分に救ひ得たのか、救へなかつたのか？自分は唯今くらの『死』に接近して其の顔を覗く事はこれ迄一度もなかつた。恐怖は心を氷と化する！

レオナルドは恐怖のために飛び退いた。知る事を欲しなかつたのは生れて以來これが初めてであつた。そしてそこそこにして畫の上に元の如く死衣を懸けて室を出た。

翌年の春、シャルル・ダンボアーズの善意ある斡旋に依り、レオナルドはフロレンス共和国に對する契約を解除してミランに歸る事になつた。そして二十五年前と等しく喜んで故郷を去つて、ロンバルディーの大平野の上に聳ゆるアルプスの雪峰を見たいと思つた。然も國と家とから投げ出された追放人たる事は今も昔も異りなかつた。

十五の卷

宗教裁判

千五百六年——千五百十三年

一切を知れ、然かも何人にも知らるな——靈悟教徒バジル。



千五百七年レオナルドは確實にルネ十二世に仕へる事になり、ミランに定住して、フロレンスへは瑣細なる用を達しに行くほか減多に足を入れなかつた。

何事もなく四年間は過ぎた。

千五百十一年の暮、今は名聲噴々たる畫家ジョーヴァンニ・ボルトラフィオは新に落成したるサン・マウリチオの教會堂で其の壁畫を描いてゐた。堂は古いマッヂョレ僧院に屬して、古羅馬時代の競技場のあつた跡に位し、其の傍、即ち高塀を繞らせるヴェーニヤ街と接せるところに人の顧みぬ廢園と、今は荒れ果て、昔の宏麗たりし傑作を留めざるカルマニョーラ侯の宮殿があつた。マッヂョレ僧院の尼達は此の廢殿と廢園を老齡の鍊金士ガレオット・サクロボスコに貸した。ガレオットは佛蘭西軍第一回の入寇に遭つて、ヴェルチエリリナ門附近の茅屋を代なしにされ、姪のカッサンドラと共に希臘を初めとして、エーヂャン海の諸島、小亞細亞、志里亞の邊を九年の間遍歴し、

此の頃再びミランに舞ひ戻つたので、種々と奇妙な噂を立てられてゐた。即ちガレオットは鉛を黄金に化する哲人石を発見して、其の實驗用として志里亞のデヴァートダールから借り入れてゐた多額の金を外の事に流用したため、命辛々其處を逃げたのだといふ。それから姪のカッサンドラは悪魔の助けを得てフェニシアの古利があつた跡で寶物を発見し、更にコンスタンチノープルでは物持ちの商人を誑して眠り薬を服用させて品物を奪ひ取つたと風評された。それは兎に角、ミランを落ちた時は兩人とも乞食同様であつたのに、此の度は金を貯へて歸つて來た一事は甚だ確かであつた。

カッサンドラはデメトリウス・カルコンデラスの門人であり、又巫女シドニアの弟子であるのに、今は羅馬教會の信仰に歸して、あらゆる斷食や儀式を堅守し、祭式ある毎に必ず勤行し、普く慈善を施したので、僧院の尼達に愛せられ、大監督すら眷顧を與へたのであつた。然かも依然として惡評は止まず、此の女が基督教を信ずるのは表面だけの伴りで、實は以前に變らぬ外道信者、既での事に叔父と共に羅馬で宗教裁判所の手に擲められるところを辛くもミランに來たので、早晩は必ず火の柱に縛られて焚殺されるに定つてゐると、陰口をきかれてゐた。ガレオットは相變らずレオナルドを尊敬して、ヘルメス・トリスメギストスの秘密學に通ぜる點に於て彼は先生と見做し、遍歴の途々集めた稀觀書籍（其の大部分はブトレマイオス時代にゐたアレキサンドリアの學者達が書いたもの）をレオナルドの請ひに任せて時々貸與した。幸ひディーヴァンニは鍊金士の寓居の直ぐ傍で壁畫に従事してゐることゝて、本の受取りは大抵此の弟子が行つた。そして自然昔と同じく彼はカッサンドラの魅力に掛つて足繁く音訪れるやうになつた、初めの間こそカッサンドラは用心して言葉を飾り、今は一心懺悔しまして尼

にならうと思つてをりますなど、白を切つてゐたが、追々慣れるにつけ恐怖は消えて、打ち解けて語るやうになつた。そして兩人は未だ漸つと子供くらゐであつた十年前に、靜かなカンタラナ堀割のほとりに寂しい築山や、聖ラデゴンダ精舎の塀で出逢つた事、就中蒸し暑い夕に神々の復活を語つて、巫女の安息日の會合に誘つた事などを語り合つた。それが今カッサンドラは世捨人となつて、疾に惱み（但し口先だけの疾ひかも知れぬ）、お参りする時の外は、奥まつた暗い部屋（此處の窓からはこんもり茂れる絲杉が圍む廢園が見える）に蟄居する身と變つてゐる。そして其の部屋には種々の古物が飾つてあるので、宛ら圖書館か博物館を見るやう。東邦諸國から持ち歸つた彫像の毀れ、埃及の黒御影で刻める犬の首の神々、A B R A X A Sといふ魔法の文字を彫つて、靈悟教の所謂三百六十五天界を寓意せる不思議な石、年を経たゞめ今は象牙のやうに硬化せる貴重なビザンチンの羊皮紙、希臘文書、斷簡零墨、遺憾な事にこれは全部拾集の望みのないもの、アッシリアの楔形文字を記せる瓦、鐵で締めてある波斯の廢尼教の書籍、花葩のやうに薄く且つ透き徹れるメンフィアのパピルス紙等が其の主なるものである。

カッサンドラは自分の目撃した不可思議をディーヴァンニに語り聞かせた、例へば希臘の海岸の或る斷崖で、莊嚴なる大理石の殿堂の寂然として建てるを見たこと、そして其の直ぐ下はイオニヤ海で、鹽水に濡れてゐる殿堂の柱を見ると、昔、海の泡の中から現れた裸體のヴィーナスのやうであつた事を語り、其の他誠とは思はれぬ程勞苦し、危険を冒した事どもを語つた。ディーヴァンニはこれは一體何の目的であつたのか、左程多大な勞力を費して迄これらの物を集めた理由は何處にあるのかと訊いた。するとカッサンドラは亡父の口吻を眞似て、

「死者を甦らすためです」と答へた。

これを答へた彼の女の目は、昔巫女のとくに有つてゐた熱火で燃えた。

今もあの頃もカッサンドラの顔は餘り變つてはゐなかつた。依然として悲しみにも喜びにも煩はされずに古代の彫刻を見るやうに冷々として、額は矢張り凹み、眉は一文字に美はしく、病氣のために（否、寧ろ唯一つの考へを持たせんとするがために）上品を増し、昔の少女の時に比して一段の平靜と凛々しさを帯び、黒き髪はメヅサの蛇髪のやうに畝つてそれ自身に性命を宿すが如く、青白き額に框となつて更に目を光らせ更に唇の朱を加へた。デョーヴァンニは以前の如く此の女の不可抗な魅力に引き寄せられて、嘗て感じた好奇心と憐憫と恐怖との感情を今も新に魂の中に感じた。

希臘を旅したときカッサンドラは亡母の故郷を訪ねた。それはミストラといふ淋しい小都會で、廢都スバルタに近く、今を去る半世紀前に没した希臘哲學最後の學者ゲミスス・プレトリーの永眠地なる禿山の間に位してゐた。其のプレトリーの墓に詣でた折の事をデョーヴァンニに語り、且つ（數年を出でずして世界は唯一つの信仰に變化する、其の信仰は即ち古代の異端に外ならない）と言つた彼の豫言に關して話した。

するとデョーヴァンニは、

「併し最早や五十年以上になるのに未だ豫言の通りにはなりませんね。それでもあなたは其れを信するのですか？」

「プレトリーに完全な眞理がある譯ではありませぬもの」と女は平靜に言つた。「何分あの人の知らない事が随分

ありましたから。」

「それは何んな事ですか？」と訊ねた畫家の顔を女は凝つと見詰めたので、デョーヴァンニの心は凍んだ。

其の時カッサンドラは棚から一枚の羊皮紙を取つて、（プロメシウス）の數行を読み聞かせた。それは主人公プロメシウスが人間を神と同等にせんと欲して、自分の有する種々の能力——就中天から盗んだ火を人間に與へ、且つ天神ツエウスは早晚必ず殞落すると預言せる條であつた。

「デョーヴァンニ、あなたは十世紀前に右のプレトリーと同じく諸神の復活を夢みた人のゐた事を聞いてゐませんか？ あの皇帝のフラヴィウス・クラヂウス・ユリアヌスの事を？」

「えッあの背教者ユリアヌスの事ですか？」

「左様、誰も皆背教者だと言ひますが……。皇帝はオリンピアの神々のために生涯を捧けたけれど徒勞でした」と女は一寸言ひ淀んで、更に低い聲で續けた。「デョーヴァンニ、私あなたに何もかも全然言つて了ひたいけれど……まあ今日はこれだけの事を話して上げませう。オリンピアの神々の中で、就中下界の人間に一番近い神様がいらつしやるのです。其の神様は光明と暗黒とを司つて、曙のやうに美しいが又死のやうに無情で、地上に來つて、プロメシウスと等しく死を忘れる事と火とを人間に與へました。但し此の火は神様の血の中と人を酔はす葡萄酒の液汁の中とにある新しい火でした。併し兄さん、凡そ人間の中で此の神を了解できる者はをりませうか？ 大膽に進み出て、全世界に向つて斯う言ふ人がありませうか、（葡萄酒の枝の冠を戴く此の神の愛は、我は眞の葡萄酒なりと言つた神、即ち荆棘の冠を被つた神の愛に似てゐるぞ、デオニサスと同じく世界をして其血

を飲ました神の愛に似てゐるぞ」と宣言する人がありませうか？ チョーヴァンニ、今言つた事が分りましたか？ 縦へ分らなくても一切私に訊いてはなりません。此の中には或る秘密がありまして、それを未だ聞いては可いけませんから。』

此の頃、チョーヴァンニの考へは非常に大膽になつてゐた。彼の心の内容はゼロであるから失くすといふ心配は少しもなく、従つて何物をも恐れなかつた。舊師ベネデットの信仰にも、レオナルドの知識にも安心は得られないのだと悟つてゐた彼に、カッサンドラの預言は或る恐ろしい飛び立つやうな、新しい概念の閃影であつた。振りかへつて逃げる代りに、彼は絶望の勇氣を鼓して其の方に進み寄つた。斯くして日に／＼二人の魂は接近した。

或る時、チョーヴァンニは訊ねた。

「何故あなたは自分で眞理と信じながら、それを隠すのです？ 何故そんなに佯るのです？」

「物事は必ずしも萬人向きにするものではありません。群衆には殉教とか驚駭とか靈示とかいふものが要ります。信仰の不完全なる人に限つて自分の信仰のために自分の身を殺すものです。身を殺して自分も悟り人にも悟らせるのです。ところが完全な信仰は然うではありません。完全な信仰は完全な知識と同じです。ピタゴラスは幾何學の眞理を發見しましたが、それを證明するために死ぬ必要がありましたか？ 完全なる信仰は黙つてゐます、其の秘奥は口舌を超越します。先生も申されました、(一切を知れ、然も何人にも知らるな)。』

「誰です、其の先生といふのは？」とチョーヴァンニは訊ねたが、腹の中では多分これはレオナルド先生の事だ

らうと思つた。

「バジルです、埃及の靈悟教の人ですが」と答へて、初代基督教の大家達は知識と信仰とを同一のものとして自ら靈悟派又は知識派と稱した事を説明し且れ彼等の所言を多く語り聞かせた。其の語は宛も人事不省の境に在つて見る幻のやうに奇異を極め怪奇を極めたものであつた。

就中、チョーヴァンニが感銘されたのはアレキサンドリアの拜蛇教徒が、世界と人との創始に關して唱へた説であつた。

「拜蛇教の説に依りますると天の上に暗黒があるのです。此の暗黒は無終無涯、少しも動かぬ計りか、ありとあらゆる光りよりも美しくございまして、これが即ち(不知の父)なのです、(深淵)です、(沈黙)です。偕て暗黒の一人子に名前を(神智)といふ女がありまして、父の體から分れた後に、生を知り悲しみを知つて、自分の榮光を暗くしました。神智の子はヤルダヴァオトで、これは生々の一神です。ヤルダヴァオトは母の體から落ちてのち更に深く(存在)の中へ突入して、靈の世界を歪めて、これを映した體の世界を造りました。人は此の體の世界にゐまして、造物主たるヤルダヴァオトが自己の偉大を反映せしめ且つ自己の力の證據たらしめるために人を造つたのです。ヤルダヴァオトの使はしめたる元素的の精靈は、人といふ無感覺の肉塊を造り主の前に差出してこれに性命を賦して貰はうとしましたが、其の時祖母の神智が來まして、自分の父、即ち(暗黒)から授かつてゐた神聖な智慧の息を此の肉塊に吹き入れました。斯くして土と塵から造られた此の取るに足らぬ生物は自分を造つて呉れた造り主よりも偉くなりまして、其の形と云ひ、容と云ひ、造り主には似ずに、眞神即ち(不知の

父)に似て來ました。

「四足の人間は遂に地から顔を上げました。するとヤルダヴァオトは自分の力から脱け出た奴が斯んな立派な者になつたかと甚だ驚くと共に無性に怒つて、今度は他の生物を造りました、それは闇の天使で、誑はれたる智慧、即ち蛇の形せるサタンでした。次にヤルダヴァオトは此の蛇の力を借りて自然界の三王國を造つて、其の中に人を置いて、法律を與へました。(斯々の事はせよ、斯々の事はするな。此の掟を犯すと死ぬぞ)と申しました。斯うして法律の輓と、死の恐怖とを道具に使つて舊のやうに人に對して權威を振舞はうとしたのです。ところが大母神智は此の度も人の守りとなつて一人の慰安者を遣しました。此の慰安者は知識の精靈で、これも亦蛇に似て、(蛇の如く賢かれ)といふ句に譬へられたのですが、併し曙の天使たる曉星にも似てゐるまして翅がありました。即ち知識の精靈は下つて人のところへ行きました、そして(試みよ、知れよ、されば汝の目開けて汝は神の如くなるべし)と告げました。」

「こゝですよ、デョーヴァンニ」とカッサンドラは結尾に近づいた。「群衆や現世の子等はヤルダヴァオトの奴隷になり、蛇のサタンの奴隷となつて死の恐怖の下になつてゐます、掟の輓に縛られてゐます。併し光明の子、即ち知る人、即ちソフィアの選民は一切の掟を超越して、一切の繫縛を脱して、神の如く自由に、そして翼がありまして、恰ど金が泥中にあつて、能く燦然として光つてゐるやうに、惡の眞中にある能く清淨を保つのです。そして曙の天使たる知識の精靈に導かれ、生死善惡の間を過ぎて、ヤルダヴァオトのあらゆる呪詛と恐怖との間を通つて神母ソフィア、即ち神智の御許に達します。すると神母は偉大なる(暗黒)の胸の中へ人を入れます。」

天界の其の又上を支配して、少しも動かさず、あらゆる光よりも美しい暗黒、即ち一切物の父の胸の中へ入れまする。」

右の拜蛇教の傳説を女から聞きながら、デョーヴァンニは心の中でヤルダヴァオトをクロノスの子息たるツエウスに比し、聖なる智慧の氣息をばプロメシウスの火に、惠深き蛇、即ち曙の天使、即ち朝の子ルシファートをばプロメシウスに比せざるを得なかつた。あらゆる時代とあらゆる國民——エスキロスの悲劇にも、靈悟派の傳説の中にも、背教者ユリアヌスの歴史にも、半世紀前に物故した哲人プレトリーの教への中にも、デョーヴァンニに大葛藤の反響を聞いた。これは正に自分の心を曇らせる大葛藤と同一のものではないか？ 十世紀前の人々は自分と同じ苦しみを嘗め、自分と同じ二重の思想を以て争ひ、同じ矛盾同じ誘惑の犠牲になつたのだ。知識は自分に大きな慰めとなつたが、それと同時に自分の懊惱を深くしたのである。時々自分は酒に酔つたやうになつたり、人事不省に陥つたやうになつて、斯うした考へのためにグニヤクになる事がある。カッサンドラにしても自分で自分を強い者だとか、眞理の神祕を吹き込まれたとか、乃至は其の中へ這入つたとか言つてゐるものゝ、あれは皆んな伴りで、其の實は自分と同様に無知で、矢張り側道へ外れてゐるのだ。詰り自分達兩人は十二年前のやうに頼りのない、彷徨ひの身であつて、半分は神聖な、半分は惡魔的な此の拜蛇教の傳説の新安息日と等しく無意味なものだ。あの巫女の安息日の時は、カッサンドラは自分に同行を勧めたくせに、今ではあれを輕蔑して兒戲視してゐる。

斯く考へ來つてデョーヴァンニは吃驚した、そして早く逃げなくちや可けないと思つたが、時已に遅し、好奇心

のために魔術のやうに引き寄せられて、自分は一切を知悉し、カッサンドラと共に救ひを見出し、相共に死するに至る迄は此の女から離れるを欲しないのだと自ら感じた。

丁度其の頃有名な宗教裁判官にして神學博士たる僧デオルデオ・デ・カサレがミランに來た。

蓋し時に法王ユリウス二世はロンバルデー地方は邪法の蔓延するに打ち驚き、委任と處罰との告書、並びに權力とを授けて此の僧を派遣した。カッサンドラに重大な危険は迫つて來た。マッヂョレ僧院の尼達と大監督とは忠告を與へた。素々ガレオットとカッサンドラは曩にデオルデオを避けて羅馬を逐電したる者、一たび彼の手中に陥れば逃亡の不可能なるは承知してゐる。それで今度は佛蘭西に避難する決心をした。否、佛蘭西より遠い英國、或は蘇格蘭に逃げるかも知れない。

彼等の發足に先づ二日、デョーヴァンニはカルマニョーレ宮殿の寂しいカッサンドラの部屋を訪ねた。日光は鬱蒼たる絲杉のために隠されて月の光りよりは弱く、カッサンドラは常に増して美しく、落着き拂つてゐた。別離が近づくに從つて、此の女は自分に如何計り親しい者であるか、能く分つた。

『今一度あなたに逢へますまいか？ 何時か話したあの秘密を、私に打ち明けて呉れませんか？』とデョーヴァンニは訊ねた。

カッサンドラは畫家の顔を打ち守つたが、懸て手筈の中から透明にして綠色な、四角形の扁平なる石を一つ取り出した。此の石こそは有名な（タブラ・スマラグチナ）と稱する板狀の綠柱玉で、埃及のメンフィスに近き窟の中にあつた或る僧の木乃伊が手の中に握つてゐた物、そして其の僧と云ふのは埃及の語でホルスと云へる邊疆の

神、死者を下界に導く案内者、即ちヘルメス・トリスメギスツスの化身であつた。今や取り出した石を見れば、コプト語と希臘語とで次ぎの詩を彫刻してあつた——

天は上に、天は下に、

星は上に、星は下に、

上の一切は下に現る。

謎を解く者は幸ひなる哉。

『今晚入らつしやいませ。然うすれば知つてゐる事は残らず教へて上げますから。分りましたか。皆んな、奥の奥まで教へて上げますから。そしてね、別れる前に今此處で友誼の杯を汲み交はしませうよ、兩人でね』と重々しく且つ優しく言つた。

そして蠟で封ぜる陶製の小壺（これは東洋で見受けるもの）を取り出して、其の酒を古い杯に注いだ。酒は油の如くトロリとして、金茶色を帯びて異香を放ち、杯は貴橄欖石で作つて、デオニソスと其の祭司とを軽く浮き彫りにしてあつた。カッサンドラは窓際へ行つて宛も灌奠の水を注ぐ手附きをして杯を持ち上げた。暖い血と見擬ふ赤色の酒は、透明な杯の裸體の祭司に性命を賦與するやうに見えた。

『デョーヴァンニ、一時私はあなたの師匠のレオナルドさんは大秘密に通達してゐらつしやる方だと思つてゐま

した、何故ならあの方の顔はオリンピックの神の顔にタイタンの顔を加味したやうだからです。併し今では私は曉りました、レオナルドさんは目的を有ちながらそれを達しないのです。求めてゐる癖に發見できず、知つてはるるが了解しないのです。詰りあの人には後に來る人の先驅です、後に來る人は先驅より偉いのですもの。お、兄さん、私達は共に（未知）に祈るのですから此の別れの酒をば（未知）のために飲みませう、無上な調和者のために飲みませう。』

そして宗教の儀式を行ふやうに、恭く半分を飲んで、杯をジョーヴァンニに渡した。

『何も恐くはないぢやありませんか、決して毒酒なんぞではないのですから。ナザレの葡萄で造つた酒ですよ、ガリラヤ人たるデオニサスの最も純粹な血ですからね。』

そしてジョーヴァンニが飲み了つたのを見て、カッサンドラは男の肩に兩手を置いて、口早に然かも莊重に囁いた。

『一切の事を知りたければ入らつしやいまし！ 入らつしやい。入らつしやれば未だ誰にも話さなかつた秘密を打ち明けますから。無上の喜び、無上の悲しみを私は披きませうね、可いですか、それが私達を兄と妹、花嫁と花嫁として永遠に結び附けるのですから。』

鬱蒼たる絲杉に蔽はるゝ日光は月の光りのやうに蒼白たる中で、カッサンドラは、昔、夏の稻妻の白いとき、カッタラナの水邊で然うしたやうに、自分の顔をジョーヴァンニの顔に近づけた——大理石のやうに白い顔、メヅサの髪もて劃つて、緋色の唇、琥珀色の目ある顔を！

以前の時のやうに、恐怖の悪寒のためにジョーヴァンニは心臓が凝るやうに感じて、（白夜又！）と叫んだ。

其の夜彼は定め時刻にカルマニョーレ宮の戸口に立つて、長い間扉を叩いたが誰も明けに出なかつた。そこで最後にマッジョレ僧院へ行つて初めて恐ろしい事のあつたのを知つた。即ち糺明使ジョルヂオ・ダ・カサレは不意に現れて、魔法の廉に依り、ガレオット・サクロボスコと姪のカッサンドラを直ちに拘引すべき命令を發した。

ガレオットは首尾よく逃げたが、カッサンドラは既に宗教裁判の手中に落ちてゐた。

二

翌日ジョーヴァンニは牀を離れなかつた。何となく氣分が悪い上に、頭痛を感じて、半ば意識を失ひ、何事にも氣乗りがしなかつた。

日暮れ頃常になく方々の鐘が鳴つて、厭やな匂ひのする煙が微かに室内へ這入つて來た。頭は益々ズキ／＼するし、胸が悪くなる。そこでフラリと表へ出た。其の日はほかく暖かく、空氣は打濕つてゐた、そして初秋のミランに屢々襲ひ來るシロッコは今日も吹いてゐた。降雨はなかつたのに何うしたのか、屋根と木の枝に滴りが見えて、煉瓦の敷石道はキラ／＼光つて滑かであつた。然も斯うして外を歩いてゐても、厭やに臭い臭氣は部屋にゐる時よりも強く鼻を衝き上げた。

往來は雜沓して、人々はプロレット廣場の方から歸つてゐた。其の人達の顔を見ると、自分と同様半ば意識を失つてゐるやうに見えた。そして不圖通行人が話したのを聞いて初めて此の臭氣の理由が分つた。これは人間を

焚き殺した恐ろしい臭氣であつた。そして焚かれたのは巫女、女の魔法使ひ。恐らくは——嗚呼——カッサンドラも焚かれたのだ！

人々を押し除け、酔人の如く踉蹌として何處へ行くともなく彼は走り始めた。體はがたく、慄ひして、脂ぎつた黄色の霧はムツと厭やな心持を與へる。それが自分に付き纏つて喉を掴み、肺を窒息し、鈍く嚙むやうな苦痛を以て顛顛に獅噛み附く。

何處を何うして来たかサン・フランチェスコ僧院へ来て、舊師ベネデットの室へ飛び込んだが全きり記憶はなかつた。僧房の主はベルガモへ行つて留守なので、チョーヴァンニは扉を閉ぢ、蠟燭を點じ、藥蒲團の寢臺の上にグタリと倒れた。

此の懐しく平和な幽處にある一切の物は神聖と平和との氣が漲つて、惡臭はなく唯薰香抹香を嗅ぎ、斷食の橄欖油や古書の匂ひ、ベネデット師の簡素な畫のワニスを嗅ぐだけであつた。壁には耶穌の受難像と、昔、自分が贈つた物、即ちサヴォナローラ師の弟子になつてゐた頃、フィソレの頂上で摘んで拵へた花環（それも今は空しく枯れてゐる）が懸かつてゐた。

彼は仰いで受難像を見た。救世主は相變らず釘附けの手を擴げて、「爾徳れて重きを荷へる者よ凡て我に來れ」と言つて、人々を招いで抱擁するやうに見えた。嗚呼、これこそは唯一のもの、即ち完全なる真理ではあるまいか。

チョーヴァンニは祈禱を捧げようとしたが口の中で消えてしまつた。蓋し永遠の罰罪を以て嚇されずとも、自分

はこれまで知つてゐた事は一切忘れて、心の中に争つてゐる二つの真理を共に脱却する事も出来るし、又調和する事も出来るのであつた。彼は昔ながらの靜かな失望を感じて、受難像から振り返つた。すると其の瞬間に惡臭の煙霧、恐ろしい焚殺の臭氣が此の最後の隠れ家に襲つて來た。

そして彼の前に幻影が生じた。これは先刻から度々、然も甚だ明瞭に現れるもので、現實が夢か殆ど辨ちが附かなかつた。カッサンドラは紅蓮の餞の中、責道具や血糊の中に立つてゐる。飽くまで白い處女の顔は、彫像の大理石のやうに硬く、惠深き蛇、即ち調和者、即ち救ひ主の力によつて守護せられて、鐵柱を知らず、餞を知らず、自分を窘しめる者共の凝視をも知らなかつた。

正氣附いた頃は蠟燭の餞が燃え盡きんとして、時刻を報ずる寺の時計の音が聞えた。で、蠟燭の燃え加減と時計の音とで考へて見ると、時間は忘却の間に過ぎて、今は十二時を過ぎてゐる事が分つた。四邊は閑として空氣暖かく、久しい以前カンタラナ附近の記憶すべき夜と同様、青白い稻妻が窓から見える。遠雷の懶けなる轟きは地下に鳴るやうに思はれた。頭痛はする、喉は焦け附くやうで渴を覺える事甚だしい。そこで隅の方に水指しのある事を知つてゐるので、起ち上つて懶い體を壁際に引き摺るやうにして行つて、水を飲んでから寢臺の方へ戻らうとする途端、或る者が部屋の中に這入つてゐる事に氣附いた。見れば長い墨染の僧衣を着て頭巾で顔を隠し、摩捺子に腰掛けてゐる、扉には錠が下りてゐるのにと、チョーヴァンニは一旦は吃驚したが、併し直きに安心した。頭痛は治つて五感の活きは敏捷になる。彼は怪物の方へ近づいた。怪物は立ち上つて、頭巾を後ろの方に撥ね退けた。其の顔は大理石の白さと非熱情とを有ち、唇は血のやうに赤く、目は琥珀色、緑の黒髪はメヅサの蛇髮の

やうに蔽うてゐた。

カッサンドラは徐々として莊重に、宛も呪文を唱へる時のやうに立ち上つて兩手を差し伸ばした。黒色の衣は後ろに落ちて、頸の邊の暖かき、美しさが見えた、おゝカッサンドラは生きてゐるのか？ おゝカッサンドラは生きてゐるのか？

デョーヴァンニはこれを最後に（白衣の巫女！）と低く叫んだ。性命の被衣は面前で引き裂けるやうに思はれた。彼は此の上もなき結合の神秘に面してゐる。カッサンドラは前に跪く……兩手で自分を抱いて呉れた……おゝ口舌に盡くし難き心地好さ！ 名状すべからざる恐怖……恍惚 恍惚 又恍惚……

三

飛行機から墜落したゾオアストロは死なぬ代りに又本復もせず、生れもつかぬ塞となつて、切れぬに片言で喋る計り、其の片言の分る人は唯レオナルド一人であつた。時々彼は拐杖をカタ／＼音させて家の近間を徘徊したり、他人の談話に耳を傾けてそれを解せんとするやうな風をしたり、或は隅の方に坐して細長いリンネルの巾を巻いたり、木の板で圖取りしたり、枝を切り、獨樂を作つたりした、蓋し元來が職工として、其の手は未だに運動の機能と熟練とを失はなかつた。併し最も多くは數時間續けて體を揺すぶつて微笑を含み、兩手を翼のやうにひら／＼させて、何時までも／＼小唄を歌ふのであつた――

そして歌ひ終るとレオナルドの顔を眺めて潜々と泣くので、レオナルドは身を切られるやうに辛い思ひをした。それで彼は決して此の癡人を捨てなかつた。種々と世話をして、金を與へて、出来る限りは始終家の中に置くやうにした。年又年は過ぎ去つた。レオナルドが人類のために翼を工夫せんとした終生の努力に對して、此の塞は生ける非難であつた、一つの嘲弄であつた。

ゾオアストロと同じくレオナルドを困らせたのはチエサレ・ダ・セストの態度で、彼は弟子の中でもレオナルドの心に最も近い一人でありながら、アストロやデョーヴァンニのやうに心は既に塞となつて、頻りに自分一人遠ざからんとするものゝ、然も先生の感化に負けて無能力になるのであつた。模倣に満足せず、去りとして獨立するだけの力もなく、其の功なきに焦慮し、無力なるに憤怒して徒らに心身を苦しめ、自分で自分を救へぬと共に又滅ぼす事も出来なかつた。世人はレオナルドの目は邪惡な目で、此の目で睨まれるが最後戕害されるのだと噂して

ククルル、ククルル、
つうるに驚は、
舞ひ上る。
舞ひ上る、
つうるに驚は、
ククルル……

るたが、此のチエサレの如きは其の悪目玉に睨まれた一人かも知れない。

其の頃ヴァチカン宮の敷室に壁畫を描いてゐたラファエルとチエサレとは密りと手紙の遣取りをしてゐるとレオナルドの耳に這入つて、これは必定我れに弓を彎かうと企らんでゐるなと彼は度々思つた事があつた。併し敵の謀反よりも悪いのは所謂最良の引き倒して、青年畫家の一團（此中にレオナルドの直弟子は二三名ゐるだけ、大部分は新に歸依したる者）はレオナルド學會なるものを設けて、レオナルドに付き纏ふこと寄生蟲の如く、自他共にレオナルドに追隨するものと信じてゐたが、肝腎のレオナルドは成るべくこれに遠ざかつた。そして自分が偉大視し神聖視せるあらゆる事物がこれら凡庸人の物になるのを見ては嫌厭に堪へなかつた。（最後の聖餐）中の基督の顔を下手に模寫して教會的の平凡に化し、チョーコンダの微笑が模倣と誇張と俗化との爲に假令肉感的ならずとも馬鹿々々しい物に成り下がつたのを見るたび苦しい感じがした。

雪の一夜レオナルドは獨り坐してあらしの咆哮を聞いてゐた。リサの死報を聞いたときも丁度斯んな夜であつたので、考へはリサの事、死の問題に馳せ、最後は古き「渾沌」の胸の中に沈むのであるが、其の時の恐ろしき寂寞を沈思し、世界なるもの、無限に倦怠的なるを冥想してゐる最中、誰か扉を叩く人があるので、起つて開けた。そして這入つて來た者を見れば十九歳の少年で、目は活々と輝き、生氣ある頬は寒氣のために赤くなつて、栗色の毛髪には雪が融けてゐる。

「お、レオナルドさん！ 私を御存じですか！」と少年は叫んだ。

レオナルドは其の顔を眺めてゐるうちに思ひ出した。これはヴァプリオ森林を共に徘徊した小兒フランチェス

コメルチであつた。彼は父に似たる温情を以てフランチェスコを抱擁した。フランチェスコの話に依れば、千五百年の佛蘭西軍侵入の際、父は家族を率ゐてポローニヤに移つたが、此處で疾を獲て長い間煩ひに付き、遂に逝去したので、偕てこそ兼ての約束通り此處へ急いで來たとの事であつた。

「約束？ 何の約束でした？」とレオナルドは不審氣に訊ねた。

「おや、それではあなたは忘れてゐらつしやる！ あゝ私は馬鹿でした、一心に思ひ詰めてゐた私は馬鹿でした！ 然うですか、それでは覚えてゐらつしやいませんか？ あのカンピオーネの山麓にあつた鑛坑の中へ私を連れて行つて下さいまして、これからロマーニヤのケーザル・ボルヂアに仕へるのだとお話になりました。私は泣いて、何うか一緒に連れて行つて下さいとお願ひしたら、最つと大きくならなければ可けない、最う十年経つたら弟子にするからと約束なさいまして……」

「然うだつた！ それは覚えてゐますとも！」とレオナルドは温かに言つた。

「お分りになりましたか？ 併し先生、私はあなたに要らない者だと分りましたが、決して先生の足手纏ひにはなりませんから、先生のお邪魔は致しませんから、何うか出て行けと言はないで下さい！ 假令出て行けと仰有つても私は行きません！ 決して此處を離れません！」

「おゝあなたは私の大事のく子息だ」とレオナルドは、聲を慄はせて再びフランチェスコを抱き締めた。少年はレオナルドの胸に獅噛み附いた、過ぐる年、地下の眞暗な廢坑の中に連れられて行つたとき然うしたやうに。

四

レオナルドは千五百七七年にフロレンスを去つて以來、宮廷畫家といふ名義で佛蘭西王ルキ十二世に仕へてゐたが、一定の俸給をば支給されず、時々戴くお手元金を頼りにするのみであつた。然るに會計官は彼を全然捨てて顧みぬ事は度々であり、又レオナルドにしても寄る年波のために製作が益々少くなるばかり、機を見て作品に依つて注意を牽き寄せる事が出来なかつた。其の結果、舊に依つて金に困しめられ、出来得る限り方々に借金の手を延ばして前の負債を返済せぬうちに新に借りを契約した。そして以前ルドヴィコの官吏に呈したと同じ競々として小心且つ不器用なる歎願書を佛蘭西の總督と會計官とに呈した——

閣下の寛仁を仰ぐは恐れ多き事に候へば小官は一定の俸給を頂戴仕度此儀奉願候從前一再ならず申上候ひしも未だ何等の御沙汰に不預候云々

彼は保護を仰ぐ人達の家を訪ねて、其處の溜りの間で他の惻願者連と伍しながら、自分が主人に應接される順番を靜かに待つ事があつた。併し年を取ると共に益々次ぎの詩句の對切なるのが分つて來た。

他人のパンは鹹きかな、

他家の梯子を昇降の苦勞も鹹き事ぞかし。

君主の奉公は共和國の奉公と同様彼には辛らかつた。自分は何時になつても何處へ行つても異邦人なのだとは感じた。ラファエルは富みて羅馬の貴族の如き顯榮に上つてゐるし、ミケランジェロは不時の災厄を慮つて金を貯へてゐるのに、獨りレオナルドのみは依然住むに家なき放浪兒であつた。死が來ると頭を置く場所をも有しなかつたのである。

戦争、勝利、知友の敗北、政府法律の變改及人民の奴役、これに對する暴君の追立て——これらの事は一般の人に取つて實に重大事件であるのに、レオナルドには往還を歩む旅客が沙煙を被るくらゐにしか見えなかつた。イル・モロ公のためミラン城を堅固にして佛蘭西軍に備へた昔も、佛蘭西國王のためにロンバルディー人の敵となつてミラン城を固めてゐる今も、共に等しく冷々たる虛心を持してゐた。

野心ある將軍トリヴルチオはマッシミアノに對して陰謀を廻らしてゐた。レオナルドはイル・モレットに逼りつゝある運命は彼の父君イル・モロ公の運命と同じであらうと思つた。そしてこれらの單調な專制的政變に倦み、凱旋門の建造や、破損せる天使の翅の修繕にうんざりして、彼はミランを去つてメヂチ家に仕へんと決心した。

時恰もデョーヴァンニ・デ・メヂチがレオ十世の稱號を以て、羅馬に於いて法王となり、弟ヂュリアノを羅馬教會

先
の旗手に任じた。デュリアノは既に羅馬に行つてゐたので、レオナルドは秋に彼の許に赴任する事に定まり、畫
家且つ鍊金士として仕へる筈であつた。

*

覺
百三十九名の巫女がプロレットの廣場で焚殺された翌日、サン・フランチスコの僧は、ジョーヴァンニ・ボルト
ラファイオがベネデットの部屋の上で倒れてゐるのを發見した。ジョーヴァンニは十五年前サヴォナローラの殉教を
聞て苦悶したやうに此の度も苦悶した事は明白であつた。然も今回は迅かに快復したに拘らず、レオナルドは見
るに、彼の非思索的の目、不可思議なる非熱情的の顔は、以前の長き病氣の時に比して更に大なる恐怖に襲はれ
てゐた。

そは兎に角、千五百十三年九月二十三日、レオナルドは新らしき保護者デュリアノに仕へるため弟子のフラン
チスコ、サライノ、アストロ、ジョーヴァンニを伴ひ、馬に乗つてミランを出發した。

十六の卷

レオナルド、ミケランジェロ及びピラファ

エル — 千五百十三年 — 千五百十五年

忍耐の、虐げられたる人に於けるは、猶衣服の傷寒せる人に於けるが如
し。寒さ愈々厳しければ、衣服を重ねて以て寒を免るゝを得ん。屈辱を蒙
ること益々大なれば、益々忍辱の衣を重ねべし

— レオナルド・ダ・ヴィンチ

法王レオ十世はメヂチ家の家傳を守り、學藝の保護者を以て任じた。彼は法王に選ばれた事を聞いたとき弟
のデュリアノに斯う言つた——

「神は法王の權力を予に賜はつたのだから予は此の權力を享樂しようて！」
すると寵愛の童坊マリノが附言した。

「否、殿下は御自身の快樂を追求なさりませ。それを除いた他の物は凡て馬鹿々々しうござる。」
詩人、音楽家、學者の面々は法王を取り巻いた、完璧を極めたるシセロの散文とヴィルギリウスの詩とを唯一

の金枝玉條とせる模倣的文士連のために愈々黄金時代が出現した。

基督の羊群を牧するといふ小僧侶は基督なる文字がシセロの演説集中に見出されざるの故を以てこれを口にすることを避け、尼をば祭尼と呼び、聖靈を改稱して大神デョヴの靈感なりと言ひ、プラトーンを聖徒の列に加へん事を法王に要求した。臆ては樞機官たるべきベンボは自分が未だ保羅の書翰(特に氣取つて此の書をエピストラッチェと稱した)を讀まない、何故なら自分の文體を害ねる憂ひがあるからだと言言した。フランシス一世がラオコーン像の寄贈を所望したとき、法王は使徒彼得の首ならばむしろ進呈する旨を答へた。

法王は抱への學者、美術家、詩人、術學者を愛したが、就中童坊を最も愛した。そして名高きヘボ詩人にして酒飲みなるクエルノのために莊嚴なる戴冠式を行ひ、ラファエルに對すると同じやうな恩恵を與へた。己れは消化不良と不治の化膿性の病氣のため、食量は少きにも拘らず、大金を投じて享宴を催した。彼は常に身體のみならず心にも倦怠といふ疾ひがあつたのである。

*

レオナルドは初めてヴァチカン宮へ行つたとき、或る人から(法王親下に謁見を願ひなされるなら、拙者は童坊でござると言ふのが一等です)と忠告されたが、彼は此の忠告に従はなかつたため、幾たびも謁見が許されなかつた。

何となく不思議な凶事の知らせが此の頃兆して來るので、自分では馬鹿々々しい無意味な事だと努めてそれを

避けるやうにしたが、其の凶事といふのは自分を壓迫する金の苦勞の事でもなければ、法王レオ十世やヂュリアノ・デ・メヂチが自分を正當に認めて呉れぬのを憂ふる事でもなく、寧ろ其の種の苦勞ならば昔から慣れつこになつてゐるため、今では自身でもそれ程苦痛と感ぜない程であつた。然うするうちにも漠然たる不安、不祥なる憂懼は益々増加して遂に或る秋の明るい夕、ヴァチカン宮から歸つて來たとき、目前に大破裂が迫り來るやうに覺えて心は滅入つてしまつた。

彼の住宅は曩に此の府に來てゐた時と同じく、法王の造幣局に附屬して、聖彼得寺の後ろにある離れ家の一棟であつた。家は古びて暗く、幾年も人が住まなかつた事とて極めて濕つほい。レオナルドはヴァチカン宮から歸つて、穹窿のある大きな部屋の中に這入つた。部屋の壁にも天井にも鞞入りがして窓は隣家の壁のために暗かつた。

馬鹿のアストロは隅の方に坐し、足をブラリと延ばして、手で忙がし氣に木の枝を切りながら、單調な歌を唄つてゐる――

ククルル、ククルル、

小わしに鶴は、

舞ひあがる……

レオナルドの不安は不慮の事件をそれと知覚したやうに俄に増加した。

「アストロ、何事が起つたのだ？」と蹇の頭に手を置いて彼は優しく訊ねた。

「何でもないので」とアストロは伶俐な物珍らし気な顔をして言った。「私は何でもありません。ジョーヴァンニです。併しあの方がジョーヴァンニには好いのです。ジョーヴァンニは飛んで行つちまつたのです。」

「ジョーヴァンニ？ ジョーヴァンニは何處にゐるの？」とレオナルドは叫んだ。蟲が知らせる凶事は正にジョーヴァンニの身に關はつてゐると悟つた。「アストロ、頼む、何うか思ひ出して呉れ。ジョーヴァンニは何處にゐる？ 今直ぐに逢ひたいのだから。何處にゐる？ 何んな事が起つたのか聞かして呉れ。」

「あなたは分りませんか？」とアストロは適當な語を探らうとしたが其の甲斐はなかつた。「ジョーヴァンニは、ほら、あつち、あつちの上の方ゝにゐますよ……逃げたのです……飛んじまつたのです。おや、先生は未だ分りませんか？ それではお目に掛けませう。飛んで行つちまつたので却て仕合せでした。」

アストロはよろくと起き上つて、拐杖に倚れて、ヨロ／＼歩み、先生を屋根裏の部屋に案内して、キー／＼云ふ階段を昇つた。熱い太陽は瓦屋根に焼け込んで夕陽は軒窓の上に輝いてゐた。兩人が這入つたとき數羽の鳩は驚いて、騒々しく羽搏きしながら逃げ去つた。

「彼處にゐます」とアストロは暗い隅の方を指した。

見るとジョーヴァンニは極めて眞直に立つてゐるやうで少しも身動きせず、目を大きく開いて凝と前の方を見詰めてゐる。レオナルドは（ジョーヴァンニ）と叫んだ。其の聲は顫へて冷汗額に湧き上つた。

そして近寄つて見ると顔は變挺に歪み、手は神経を失つて冷めたく、體は右に左に重く搖れてゐる。ジョーヴァンニは飛行機の丈夫な絹紐を鐵の桶に懸けて縊死してゐた。此の桶は或る機械の目的に使用するため梁の中へ此の頃挿入したものであつた。

アストロは此の時知覺麻痺に陥つて、濟まし込んで窓の外を覗いた。家は高いので大羅馬府の瓦屋根、圓屋根、塔は一目に見晴らされ、廢潰せる水道の横切るカンバーニヤは海の如くに擴がり、彼方アルバノ、フランスカチの諸丘は以て指呼すべく、燕は晴空に飛んで圓く輪を描いてゐる。アストロは燕を眺めて微笑み、其の飛翔を眞似て喜ばし氣に兩手を振りながら、

ククルル、

舞ひ上る、

ククルル、

ほら、舞ひ上る……

と低聲に唄つた。

レオナルドは二人の弟子——白痴と自殺者との間に石のやうに立つてゐた。

此の事あつて幾日かの後、チョーヴァンニの日記が見附かつたので、注意して讀むと、次のやうに書いてあつた。

お、白衣の巫女！ 如何なる時も、如何なる處にも！ 呪詛すべき巫女。最後の秘密——それは二人が一人になる事だ。基督と非基督は一だ。天は上に——天は下に！

否々、それは可けない、必ず可けない！ 寧ろ死せん哉！

お、神よ、我が魂を爾の掌中に託す！ 爾我が法官たれ！

これで文字は途切れてゐた。これは必ず自殺する當日に書いたものとレオナルドは解した。

二

チョーヴァンニの自殺があつたのち、レオナルドは羅馬の生活に飽きた。待つて計りゐて、未だ極まりが附かず、

強ひて手持ち不沙汰に日を過すので氣が挫けた。日常の業務、書籍、器具、實驗機械、畫などに一切興味が失くなつて來た。

レオ十世は時間を特に空けてレオナルドを引接するでもなく、畫を描かせるでもなかつたが、或るとき造幣局のために完全な鑄造器械を作るべき仕事を課した。如何ほど卑しい仕事をも輕視せぬレオナルドは、請求に應じて新器械を工夫した。從來、貨幣の面は凸凹があつてギザ／＼してゐたのが、此の器械を使用するに及んで完全無缺な鑄型が附いた。當時彼は負債に苦しめられて、俸給の大部分は借金の子に出で行く有様であつた。幸ひフランチェスコ・メルチは父の財産を相續したので、其の方からの出資に依り、纔に極端なる窮迫から免るゝを得た。

千五百十四年の夏、レオナルドはマラリヤに罹つた。これが此の人には最初の大病であつたが醫者を斥けてフランチェスコ唯一人を病牀に侍せしめた。レオナルドは日に増し此の青年に愛着して、保護の天使、老境の杖として神から自分に遣されたのだとさへ思つた。人々はレオナルドを打ち忘れたやうにしてゐたが、それにも拘らずレオナルドは、自分が依然存命してゐる事を人々に思ひ出さす工夫を取つた。平生ならば仲々口先きにもベシにも出て來ない時流の好辭令を並べて、病牀から無理にデュリアノ・デ・メヂチに御機嫌伺ひの書翰を發したりした。

長らく降雨のつゞいた後、十一月下旬に至つて快晴の日が来た。此の頃の羅馬は他の時には見られぬ美景に飾られて、日に／＼寂れ行く秋の眺めは、永遠の市が有する潰滅の偉蹟と善く調和した。

或る朝レオナルドは、フランチェスコと共にシスチンの禮拜堂にあるミケランジェロの壁畫を見に行つた。ずつと以前からこれを見よう／＼と思ひながら秘かに恐怖を感じて、それがために延び／＼になつてゐたのである。シスチン禮拜堂は高く聳え立ち、横に長くして縦に狭く、壁は生地のまま、窓はゴチック式、其の天井と迫持とを、ベタ一面にミケランジェロは、聖書中の話から採つて描き捲くつたのであつた。レオナルドはそれを眺めたとき、氣絶するやうによろ／＼となつた。蓋し大抵の事は秘かに預期してゐたものゝ、斯くまで美術の「力」を見ようとは思はなかつたのである。

唯見る巨大なる人物は、人事不省の裡に見る幻の如く莊嚴であつた——即ち創世の神は(渾沌)の胸中にある暗黒から光明を分出し、水と植物とを祝福し、土よりアダムを作り、アダムの肋骨をイーヴとなし、其の他墮落、贖罪を初めとして、聖書に現れたるあらゆる事件が描かれて、元素の精なる若き裸形の男子は、永久の踊と歌とを以て宇宙の悲劇と神人の争闘とに絡み、男女の預言者、恐ろし氣なる巨人は人間の智慧以上、人間の悲哀以上に沈下され、救世主の祖先、即ち朦朧たる族長は長き列を成して、目的なき生の重荷を次ぎから次ぎへと渡して、見知らぬ償ひ人の出現を暗い裡で待つてゐる。

自分の競争者の描いた此の素晴らしい作品に突き合はされたレオナルドは、例の癖なる測知、比較、判断を一切試みずに、唯々自分自身と、自分の作品とは湮滅されたと感じた。

そして自分の手に成つた作品を一つ／＼考へて見た。(最後の聖餐)は壊朽に瀕し、騎馬像は既に滅びた。(アンギアリの役)を初め、無数の未完の畫の事を考へると、凡て徒勞なる計畫、笑ふべき蹉跎、不名譽なる失敗の連續であつた。徒らに着手と、志向と、準備のために生涯を費して、何物をも成就しなかつた。あゝ自分は何故斯くまで自身を欺いたのか？ 併し最早や時機は遅い、自分は決して一事をも遂げないのだ。自分の生涯は到底信じがたい程大きな努力のために費されたのに、今や死に近き際に臨んで、かの喩話にある怠惰な下男——自分の才分を地中に埋めたといふあの下男と自分とは同一のやうだと感じた。

それにも拘らず自分はミケランジェロよりも更に高き物を志してゐるのだ。ミケランジェロは一切を混濁視し渾沌視するのに自分は永久なる調和を認識して、それを示さんと試みたのである。然うだ、リサから聞いたあの喩話——大なる威力ある風の事、中に主がいます靜肅たる小聲の事が思ひ出る。(人心は遅かれ早かれあなたが示された道——即ち軌轢から調和に、部分から統一に、あらゆる靜穩に至る道に——還りませう)と自分に言つたりリサは、微妙くも眞理を看破したと思ふ。が、併し、理論に於いて全然正しかつたといふ意識は、行爲に於いて無能力であつたといふ意識のために、自分は一層の苦痛を感じざるを得ない。

兩人は黙々として禮拜堂を出た。フランチェスコは敢て質問を發せない計りか、先生は急に老い込んで弱々しく、且つ愁に悩んでゐると見た。兎に角兩人は禮拜堂の中で幾年も過したやうな氣がした。

聖彼得の廣場を横切り、新町を通つて、聖アンジェロ橋の方へ足を運んだ。レオナルドは今一人自分の競争者たるラファエル・サンチオの事を考へた。ミケランジェロに劣らずラファエルを恐れる理由はあつた。レオナルドは

此の青年畫家が新にヴァチカン宮の廣間に描いた畫を見たとき、其の畫の偉大さは中に有せる概念の貧弱と等しくはあるまいか、目と手との完全は俗世の君主に呈したる卑屈なる詔諛と相若くのではあるまいかと疑はれて、容易に、孰れを孰れとも決し兼ねたのであつた。法王ユリウス二世は佛蘭西人を伊太利から驅逐せんとする夢想を懐いてゐたので、ラファエルは最と高き神の殿堂から惡王ヘリオガバルスが逐はれる様をユリウスが見物してゐる圖を描いた。尋いでユリウスの後を襲つたレオ十世は自ら大雄辯家を以て任じてゐたので、此の度は東羅馬帝國の皇帝大レオが、アッチラに羅馬より退去すべき事を警告せる圖を描いて、レオ十世を大レオに喩へた。それから法王は佛蘭西人の手に落ちながら首尾好く逃れた事があつたが、それをば聖彼得が奇蹟を行つて救助した意味の畫に作つた。斯くの如く彼は自己の美術を墮落せしめて、廷臣的諂媚の唾棄すべき臭氣を漲らせた。

ウルビノから來た田舎者、顔のみは罪なき天使に似たる此の夢の如き青年は、世俗の業を執つて、これを最善の利益に變ずるのであつた。即ち銀行家キヂの厩舎に描き、同じ人の黄金の食卓のために圖案をさへ作つた（キヂは其の食卓で法王親下を饗應してからチベル河にそれを沈ませた。そしてそれは、尊貴の點に於いて、法王より以下にある者のために使用せぬといふ意味からであつた。）フランチャの所謂（幸運兒）たるラファエルが、名譽と富とを得るのは宛ら芝居のやうにトン／＼拍子であつた。最も手強い敵に對しては深切を寄せて籠絡し、彼の外貌の示すが如くあらゆる人の友となつた。凡そ一として成功を占めぬ事はなく、求めざるに幸運の神は彼の掌中に恩資を落した。新伽藍を建造するための建築會議に再びブラマンテを加へるやうに盡力したのも彼ラファエルであつた。樞機官ビッピエナの姪を與へられて結婚し、聽ては樞機官の帽を戴くべき内約があるときへ噂された。新

町に建てた美麗なる別邸を飾るに王侯の如き華美を以てし、官吏、外國よりの使臣達は溜りの間に蝟集して、或は肖像畫を依頼し、或は此の偉大なる畫家の手に成つた作品を見本として自國に携へ歸りたき由を乞うた。ラファエルは所謂保護者なる者の多きに苦しんで、新に保護者たちん事を申し出る者を一切謝絶したが、然かも其の人は強要するといふ有様であつた。無數の注文に應ずべき時間は勿論ラファエルにはないので、彼の畫の多くは主として弟子が描いた。従つて彼の畫室は一の工場となつた。デュリアノ・ロマノの如き腕の達者な男は、見る間に畫布と繪具とを現金に換へるのであつた。そしてラファエル自身は大成を期するを止めて、單に入氣に投ずるを以て甘んずるやうに見えた。彼は人民に仕へた。人民は彼を以て熱心に自己の選人、愛人と見、自己の骨の骨、肉の肉なりとし、自己の權化とした。

何よりも悪いのは彼が墮落しながら、依然として名聲の大を持せる事で、誘惑は俗衆に臨み來るのみならず、又選人もこれを免れなかつた。然かも運命の神が雨を降らすやうに彼に賚賜する黄金と雖も、ラファエルを瀆すに足らぬやうに思はれた。何故なら彼は常に清淨と純潔とを保つてゐたからである。實に（幸運兒）は、自己のため又美術のために、何等危険あるを意識しなかつた。併し更に一考するに、これら柄蓋相容れざる要求は單に表面のみ調和し、其の緩和は到底似て非なるものであるから、ミケランジェロが導き入れたる渾沌、矛盾、戰爭の要素に比して一層大なる危険を將來に貽すものであつた。此の點に考へ來つて、レオナルドはラファエルとミケランジェロとの作品の未來に於いて、何等の希望を繋ぐ事が出來ず、彼等の死後に於ける彼等の一切は唯深淵、唯空虚としか思はれなかつた。そして此の兩人は随分多く自分に負うてゐる——レオナルドは信じた。彼等が應用した

明暗の學、解剖學、遠近法、自然と人との知識は凡てレオナルドより得たのであつた。然り兩人はレオナルドから生れ出たのであつた、そして今や彼等兩人——彼等はレオナルドを滅ぼさんとは！

彼は黙々として青年フランチェスコの側を歩み、目を俯し、首を垂れ、顔は強き悲しみを帯び且つ老いてゐる。其の狀恰も夢と現の境を辿るものゝやうであつた。

兩人は聖アンデロ橋に近いとき、馬に乗つた人が来て、そのため道を避けねばならなかつた。甚だ權勢ある人と見えて、恐らくは樞機官か大使らしく、美服を纏へる十六騎を伴にしてゐた。彼は尙だ若く、美々たる装ひをして、灰色の亞刺比亞馬に跨り、馬の飾り物は凡て金色に光つて中に寶石を鑲めてあつた。其の顔は何となレオナルドに見覚えがあるので、考へてゐるうちに突然八年前に見た顔の青い、内氣な若者の事が思ひ當つた。女のやうな髪の毛をして手織りのゴツくしたリンネルは繪具に塗れ、肘に澤山孔が空いてゐた少年（ミケランヂエロは先生の靴の紐を解くにも足りません）と自分に言つた少年を思ひ浮かべた。

其の少年は今やレオナルドとミケランヂエロとの競争者となつて（畫聖）といふ尊稱さへ受けてゐる！

彼の顔は依然無邪氣で子供らしく、感情のために變化はしなかつたが、然かも天使の顔にしては稍缺け目があつた。八年前の新發意今は甚しく世間向きの人になつてゐる。彼は法王に見えるため馬に乗つて新町の別邸から出た途中なので、後に續く十六騎は彼の弟子、方人、友人の面々であつた。實に彼は外出するたび十五人ぐらの護衛を缺かした事なく、一行は常に凱旋行列の如き觀を呈した。

ラファエルはレオナルドを認めて稍顔を赧らめ、素早く誇張的の尊敬を以て脱帽して敬禮した。若き弟子達は

一行を通すため塀の方に寄つてゐる老人——地味な着物を着て見窄しい老人の顔を見守りながら、我が（畫聖）をして斯くまで鄭重に敬禮せしめる此の人は抑々何者だらうと驚きの目を睜つた。

其の途端、レオナルドはラファエルの側にある人、即ち弟子の中で最も愛されてゐるらしい人に、目を注いだ。能く見ると自分の弟子のチエサレに似てゐるので、驚駭の極、凝と其の顔を見詰めて容易に自分の目が信ぜられなかつた。今こそはチエサレが久しく家にゐない理由が分つた、其の不在の説明をフランチェスコがしたのを聞いて、拙い當推量だとばかり思つてゐたのに、今こそは悉皆分明になつた。弟子中の最後の者、此の一人こそは自分が踏み來つた足跡を逐つて自分の手法を墨守する者と計り信じてゐたのに、あらう事が自分を見棄て、敵に裏切りしたとは！

チエサレはレオナルドの凝視をビクともしなかつた。否、宛もチエサレの前で其の意なきに罪惡を犯したやうに感じて、打ち惑うて目を伏せたのは却てレオナルドであつた。

騎馬の一行は過ぎ去つた。レオナルドはフランチェスコに倚り掛かつて足を運んだ。ハドリン橋を渡り、コロナリ町を過ぎて新廣場に行くと、其處には鳥屋があるので、レオナルドは囊底を拂いた上に、フランチェスコから幾分を借りて、鵲、鶯、鳩、鷹、野育ちの若い白鳥を買ひ取り、これを籠に入れて兩人は持つて行つた。それが頭から足に至るまで全身に籠を吊り下けて、ヒョロ／＼して歩いたので、人々の注意を惹き、行人は物珍らしげに眺めるし、子供は後から走つて來た。兩人は萬神廟とトラヤヌス裁判所を通り過ぎ、七丘の一なるエスキリンを越え、マッヂォン橋を渡つて、羅馬市の外に出で、今はラビカナ道と名くる昔羅馬の往還を行つて、直ちに

狭い徑に入り、荒涼たる田園の寂寞の中に這入つた。

カンバーニヤの野は眼前に展けた。見渡す限り茫茫として際涯なく、萬物寂として聲を發せず、クラウヂウス帝の築いた水道のアーチの中から低い小山が見えて、夕陽に輝く海の波のやうにそれが一樣に灰綠色に現れ、此處彼處に孤立せる塔はもと追剝の野武士らが呆うてゐた處、霧の青い山々は、巨大なる圓形戯場の段層を形つて此の大平原を圍んでゐる。

平和なる秋の夕暮は羅馬府の上に垂れ、今日を名残りの日光は重た氣なる雲間を漏れて廣き帯の幾筋となり、眺望を横切つて一群の白牛を照らした。悠揚たる白牛は人の羣首を聞きながら仲々振り向かうともせぬ。凋れたる夏の花を搔き鳴らす微風の音、綴れ刺せてふ機織り蟲、沈森たる遠寺の鐘——却てこれらのために寂寥は深まるばかり。斯くまで荒れ、斯くまで嚴肅なる廣野を見るにつけ、永遠又永遠に性命ある天使が、嘗て、時劫は最早やあらざるべしと自ら誓つた其の預言が、今既に此處に證示されたかと疑はれた。兩人は適當の岡を選んで、荷うてゐた鳥籠を下ろした。レオナルドは尋いで鳥を放した。

鳥はさも嬉し氣に羽搏きして飛び去つた。それをレオナルドは愛に堪へぬ目して見送り、莞爾として憂ひを忘れて、幼少な頃の幸福を再びしみくと感じた。そして鷹と白鳥だけは籠の中に留めて、今少し経つた後に放す事にした。

それから兩人は粗末な夕餐を喫した。夕餐はパン、栗、櫻ん坊の干したのと、乾酪、それに黄金色のオルヴィエト酒一壺であつた。依然として二人は互に口を利かなかつた。フランチェスコは折々先生の方を見た。先生の頭髮は薄くなつて銀色を呈し、額は皺に疊まれ、窪める目は今も尚ほ奕々として思想の閃きはありながら、ありくと疲勞の色が見える。實に(年齢)の指は此の人の美貌を抹消して、病みほうけたるタイタンの如き顔にした。

孤獨悲惨なる人を憐れむフランチェスコは素よりレオナルドをも憐れと見た。彼が何人にも優りて敬愛せる先生、世人が賞めそやすミケランヂエロ、ラファエルよりも自ら認めて以て高きに置く先生は、憐むべき孤獨の人、見縊られたる老翁に過ぎなかつた。今し其の老翁は空になつたる鳥籠を側に置いて草の上に坐し、毀れ損じた摺小刀で乾酪を切り、老いて弱くなりたる腰に力を入れてムクムクと嚙んでゐるが、先達ての病氣のために食欲は減じたのである。フランチェスコは此のとき喉に痞へが生じたので、レオナルドは跪いて、喜んで自分の切愛の情を此の少友に證示したいと思つたが、併し敢てそれをしなかつた。其の勇氣は彼に缺けてゐた。何の時たるを問はず、自分を最も愛する人に對してさへ、レオナルドは或る疎遠な、親近し難い態度を示すのであつた。粗末な夕餐を済ましてから、レオナルドは起ち上つて鷹を放ち、更に最後の、一番大きな籠を開いた。すると野育ちの大白鳥は躁がしく啼いて籠から出て来て、翼をバタ／＼搏ちながら、暫らく目眩し氣に立ち止まつて、聽て夕日の方へ一直線に翔び去つた。レオナルドはそれを一心に見詰めてゐた。其の目には云ふに云はれぬ悲哀が籠もつてゐた。そしてそれは彼の一生涯の愚かなる夢を悔い、人類のために翼を工夫したのを悔い、且つ日記帳に(白鳥の如く人は飛翔するに至らん)と書いた其の大なる鳥の事を悔いたる悲哀であつた。

遂に法王は弟デリアノの勸めを容れて、小幅の畫を描く事をレオナルドに命じた。併しレオナルドは例に依つて逡巡、日々これが着手を遅延して徒らに準備に手間取つて、完全なる繪具の調製を試みたり、新ワニスの發明を工夫したりして時間を空費した。

すると法王は失望した侮蔑の聲を放つた。

「諸々困つたものぢや、あの野呂馬は到底何一つとして仕送けまいて。初めの方をなし終らぬうちに、早や終りを研究するのぢやもの。」

廷臣此の罵倒を傳へて尋いでこれが羅馬府中に擴がり、畫家レオナルドの將來はこれがために封じられてしまつた。苟くも美術の最高判者たるレオナルドが下した宣言である以上、ラファエル、ミケランジェロ、術學のベンボ、童坊のバラバルロの徒は今後競争を恐れる要がなくなつた。實に法王の諛誑はレオナルドの名聲を粉塵して、世人は逝く者を忘れるが如くレオナルドを忘れるやうになつた。レオが享宴の席上で戯れた右の警句を或る人のレオナルドに告げたとき、彼は我無關焉といふ顔をしてニコリとした。そして其の微笑は正に自己の預期に違はなかつたといふ嘲弄のやうに見受けられた。然かも其の夜日記に附けて曰く、

「忍耐の虐げられたる人に於けるは猶衣服の傷寒せる人に於けるが如し。寒さ愈々嚴しければ衣服を重ねて以て寒を免るゝを得ん。屈辱を蒙ること益々大なれば忍辱の衣を重ねべし。」

佛蘭西王ルキ十二世は千五百十五年に崩殂し、繼嗣なきの故を以て、王冠は最も近親なるアングレーム公（即ちヴプロアのフランシス）に傳はり、公は即位してフランシス一世と稱した。

年少のフランシスは再びロンバルデーの攻略を欲して、即位後直ちに猶牒を動かし、親らアルプスの天險を横斷して突如伊太利を衝き、勝をマリニヤーノに得てイル・モレットを廢し、凱旋してミランに入府した。時を同じうしてメヂチのデユリアノは羅馬を出で、サヴォイに去つた。で、レオナルドは法王の眷顧を得る望みなきに依り、運命を新王に託さんと思ひ立ち、其の秋、バヴィアにあるフランシスの宮廷に伺候した。恰も善しフランシスに征服されたる新附の民は、王の勝利を祝し重ねて彼の光榮を頌せんとて祝祭を舉行してゐたので、昔イル・モロ公のとき器械學者として譽あつた事が覺えられて居たので、レオナルドを直ちに迎へて式の司掌とされた。レオナルドは請ひに應じて種々の物を作つたが、就中一頭の獅子の如きは、自動的に廣間を疾驅して王の前で跳び上り、其胸を開くと同時に佛蘭西の國花たる百合の花を翻翻として吐き落した。そして此の一玩具のために、レオナルドは自己のあらゆる偉大なる作品と發見とより更に多大の名聲を博した。フランス王は伊太利の學者、美術家を引見せん事を切望したが、法王はミケランジェロとラファエルを手放さなかつたので、レオナルドを俸給七百クラウン（千七百五拾圓）を以て抱へてクルーの御用邸を賜はる御説が下つた。邸はツレーヌにあつて、アンボアーズ町に近く、ツールとプロアとの間に位してゐた。

レオナルドは此の申し込みを容れた。茲年六十四歳といふ終生止むなき流轉の生活を新に始めて、再歸の望みなくして自國を去り、異境の地に住まうとするのであつた。彼は弟子のフランチェスコ、ゾロアストロ、老僕パッ

チスタ・デ・ヴィルラニス、肥つちよの老婢マツリーナとを引き連れて居た。

五

時正に冬とて道路の難澁は殊に甚だしく、道はピエドモントとセニ山の峠に當つてゐるので日暮れぬうちにアルプスを横断する必要上、未だ夜の暗き間にバルドネツキアを發した。馬は深谿を縫へる徑を躡つて、蹄の憂々たる響き、鈴の鳴る音が耳に来る。南の谷は己に春が訪れてゐたのに、此處には冬の最中である。丁度夜は明け放れて、微に色附きたる大空に聳り立つアルプスは其の内部に火が燃えてゐるやうに赤い。そこでレオナルドは更に能く山峰を眺めんがため馬を下り、フランチェスコと共に別の道を取つた。それは馬の往來する道を稍離れた險道で、時々遠くの方に長い間續く雪崩の音を除いては、天地寥廓として一聲だにない。レオナルドは若きフランチェスコの手に縋つて、上へくと這ひ上つた。フランチェスコは此の人に連れられて鐵坑の道を降つたのに、今は反對に自分が力を假してゐるのだと今昔の感に堪へない。

突然彼は叫んで彼方の谷間を指した。

「お、先生、あのドラの谷を御覽なさい！これが見納めです！今私達のゐる處は多分絶頂だらうと思ひます、ですからこれで最うあの谷は見えません。御覽なさい、先生、ロンバルディーの全土は彼處にあるのです！

あゝ伊太利が！」

青年の心の中に争ふ感情は目に現れて涙が落ちる。そして、

「あゝロンバルディー！あゝ伊太利！これが最後の見納めだ！」と繰り返した。

併し先生の顔色は變らなかつた。彼は眺望するのを廢めて、黙々として無理遣りに雪のある方に進んだ。其の足は疲勞を忘れて甚だ早い。故國に訣別しながら低徊してゐたフランチェスコは後に残された。

「おや、先生、可けません。何處へ行らつしやるのです。其方に道はありません。これ以上は登れないのです。何うか其方へ行くのは廢して下さい！」

併しレオナルドは足取り軽く且つ確かに上へくと進んだ。宛も翹が生えたかのやうに。

氷の大塊は青白き空に對して塔の如く聳え、個々重疊して奇絶怪絶なる牆壁を成し、さながら神の手によつて天地兩界を劃れるが如く、レオナルドを誘うて前へくと引き寄せた。それは殆ど氷壁の後ろに最奥の秘密が存して、獨りこれのみにレオナルドの魂は満足を見出すかのやうであつた。そして氷塊は超ゆべからざる空所を距て、彼の目に甚だ近く見えた、殆ど手に觸れさうにさへ思はれた。生ける人を死人が眺めるやうに、氷塊はレオナルドを眺めて、夫人リサと同じ微笑を以て彼に笑顔を見せた。

彼の青白き顔は山と氷を照らせる光を受けた。彼に取りて死を考へる事と夫人リサを考へる事とは今は同一不二であつた……。

十七の卷

死—翼ある先驅

千五百十六年—千五百十九年

汝に翅あるは天使に翅あるが如し——バプテスマのヨハネの像にある銘。

翼を有するに至るべし——レオナルド・ダ・ヴィンチ。



フランス中部、ロアル河に臨みてアンボアーズの宮城がある。城は石にて築かれ、其の色の柔然せること李樹の黄金花に似、緑、淺黄と入り混る夕陽の中に在つて靄然として輝く様は一抔の浮雲のやうである。廣々と河に連る牧場のあなた、原始時代の面影ある櫛の森をば、城の四角形の塔から眺望できる。そして初夏になると、牧場には罌粟の花が、空色の亞麻を侵してまでキラ／＼と咲き綻ぶ。又濕つほい霧が河谿の上を罩めて、黒色の白楊と銀の楊柳とは長く列をなしてゐる。全體にロンバルデーの平野に彷彿としてゐるが唯河のみは相異して、若きアッダは熱奮し、奔放するに引き換へて、靜徐たるロアルは緩やかに淺瀬を流れて、太く老衰してゐる。それからアンボアーズの町の峙てる屋根は、城の下に群つてゐる。屋根に石盤石を葺いてあるため、黒くして

且つ滑かに、キラ／＼と太陽に輝き、どつしりと大きな煉瓦の烟出しがある。町の往來は中世期風に狭く迂曲して、日光が射し込まない。そして家々の窓、扉の框、楣の角、蛇腹の下や水管に沿うて一様に小さな石像があつて、例へば徳利と珠數を持ち木の下駄を履ける陽氣な僧や、鹿爪らしい神學博士、膨らんだ財布を胸に抱ける節儉男などで、今日と雖も市街を通るとこれらの像を見る事が出来る。一言で蔽へば此の町は、町人風の舊弊で固まり、信心深いと同時に又冷めたかつた。

併し王が狩獵のため此處へ來るとき、小さな町の光景は暴かに一變する。市街には犬が吠える。馬のバク／＼、囀む音も騒々しい。喇叭は喧く鳴り響き、毎夜王城よりは音楽が聞え、城の壁は松明の火で眞赤になる。それが王の去ると同時に沈黙は再び市街の上以降つて、城は死人の棲處のやうになり、日曜の彌撒の時刻を除いては人の足音さへせぬ。唯、春の夕暮に、子供は林檎の木の下に立つて、佛蘭西の守護神聖ドニの古歌を唄ふ事があつた。そして唄ふ子供らの頭の上に薔薇と見紛ふ花葩がちら／＼と落ちる。併し夜になると子供は歌を止めて木の下を去るので、再び森となつてしまふ。其の靜けさは非常に深いので、時計臺の門の上にカチ／＼刻んでゐる音も、それから遠きロアルの沙岸にゐる白鳥の啼くのも聞える。

王城よりは半里、聖トマスの水車場に通ずる途上に、クルーと名くる小さな御用邸がある。元と王室の武具師がゐる邸で、半分は塀、半分は水に圍まれ、前の牧場には柳や赤楊が纏れて、榛の林は河の方へダラ／＼下りになつてゐる。赤竹色の塀は後庭の栗、楡に對して厳しく峙ち、窓や扉はツールから出す黄色の石で成つて、犬齒狀の線形が彫つてある。邸は建物としては小さい方で、屋根は高く、土瀝青を塗つて、石盤石を葺き、玄關の右

手には小さな禮拜堂があり、八角形の塔には螺旋形の階段があつて、御用邸といふよりは離宮に似てゐる。今より四十年前に建て直したので、外側は尙だ新らしく、見るからに氣持が好いので、人の嗜好を牽くに足りる。フランシス一世は、此の小御用邸を、住宅として、レオナルド・ダ・ヴィンチに賜はつたのである。

王は懇切にレオナルドを待遇して、彼の過去並びに將來の作品に關して長時間の談話をなし、レオナルドを呼ぶに、父或は先生といふ敬語を以てした。

レオナルドはアンボアーズ城の改築と大堀割の開鑿とを王に懲應した。此の堀割に依つて、不毛の沼澤は豊饒たる緑地に變ずるのみならず、ロアール、サオーヌの二大河をマァコンに於いて連繫して、北部歐羅巴より地中海に通ずる水路を新に開かんとするもの、斯くして彼は郷國に輕視されたる知識を運用して、此の一異邦を饒益せんと思ひ立つたのである。幸ひに王は此の計畫を嘉納したので、直ちに該地域の調査に着手し、ソローニユ地方の首都ロモランタンの附近、ロアールとシエルの支流、水面の高さをはじめ、全部の地勢を研究した。

一日、彼はアンボアーズの南に當る小邑ローシユを訪ねた。蓋し舊主イル・モロ公は、此處の城中に八年間禁錮されてゐたからで、老看守の言に依れば、或るとき公は車に積める藁の中に隠れて脱獄したところ、道を知らぬため森の中で踏み迷うて、其の登る日造作もなく捕へられたとのこと、そして晩年は神を憶ひ祈禱を懈らず、時にダンテの神曲を繙いたりした。此のダンテは公が伊太利を出る際唯一つ携帯を許された書籍であつた。未だ

五十歳にして公は衰弱して皺だらけの老人となり、稀に重大なる政變の生じたる報を得るたび、眼光が閃くのみであつた。そして暫く疾を獲て、千五百八年五月に鬼籍に這入つた。

公は死ぬる數ヶ月前に一つの氣散じを考へ出し、畫筆と繪具を請うて獄内の壁や迫持にいろいろ描き擦つたと牢番から聞いて、レオナルドは濕つて黴臭い漆喰の壁を見ると、如何にも公の筆蹟があつた。それは模様、線、棒狀、星形、十字架等から成つて、白い壁には赤色を用ゐ、青い壁には黄色が用ゐられてあり、中央には多分、公自身に寓したと思はれる一人の武士が描いてあつて頭に兜を戴き、下手な佛蘭西語で次の字が書き添へてあつた。

獄内の予は此の印を所有す。麼は他人が予に荷はしめたる苦痛の力に依り、敢て忍耐して甲ふもの也。

それから天井全體に一文章が書いてある。先づ大字で(夫れ)と始まつて、餘地がないので、すぐ引き詰めた小さな字で(満足せざる人は)と續けてあつた。レオナルドは此の憐れな樂書を讀んだり、拙い畫を見たりうちに、嘗て公がミラン城の濠の白鳥を見て嘆稱の餘りニコリとした事を思ひ出して、心の中で斯う考へた——公は神の前に出て裁きを受けるとき、あの美に對する愛好の情のために多分無罪を宣告されるだらうと。

薄命な公の長逝を想ふにつけ、今一人の舊保護者ケーザル・ボルデア公に就いて聞いた事を思ひ出る、アレキサンダー六世の後を承けたユリウス二世は、不信にもケーザルを敵の手に渡したので、公は西班牙に護送され、メ

ヂナ・デル・カンボと名くる塔に幽閉された。然も機略に富みて敢爲なる公は何でふ此の儘に終るべき、或とき牢の窓から繩を下して脱走を企てた。獄卒は隙さす繩を斷つた。公は墜落して重傷を負うたが、それにも敗けず這つて行つて、兼ねて共謀者が用意して置いた馬に乗り、鞭を擧げて逃げ失せた。そして義理ある兄がナヴァール王となつて、パンペルーナに都してゐるので、其處の宮廷を便り、自ら浪人武士の頭目となつて王に仕へた。

此の報を得るや伊太利は震愕し、就中法王は脱獄者の頭に千ヅカットを懸けた。然るに千五百七年の冬の一夜、ケーザルはボーモンの率ゐる佛蘭西の傭兵と會戦して、部下の者には見放され、自分は水の涸れたる河牀に追ひ詰められた。公は茲を先途と獅子奮迅の勢ひ、宛ら追ひ込まれたる獸のやうに荒れ狂うたが、孤身終に守り難く、二十創を蒙つて果敢ない最期を遂げた。傭兵は公の立派な衣服を剥ぎ裸にして、瘡れた場所に捨て、行つたので、少くしてナヴァールの兵が來つてケーザルを求めたとき、素より誰あつてそれと氣附く由もない、唯獨り少年の扈從ヤニトのみは平生公の鍾愛を萃めてゐるたゞけに、ケーザルを識別してワツと屍體に取り縋り、これを抱いて歎止まなかつた。公の死顔は天の方を向いて美しかつた。生前に恐怖を知らず悔恨を知らなかつたと同じく、死んだ顔も依然それを知つてはゐるなかつた。フェルララ公妃ルクレチアは常に兄を悼んで泣き暮らしたが、其の崩御の際は、毛髮で織つたシャツを着てゐた。此のシャツで柔かな體を温めてゐたのであつた。公のうら若き未亡人シャルロット・ダルブレは夫を愛すること十日物語のグリセルダの如く濃厚で、同棲の日未だ幾何ならざるに死を聞いたので、これを聞かぬや直ちにラ・モッテ・フィューエーの城に退いて、永遠に世と遠ざかつた。城は森の中央にあつて、森には枯葉が風に鳴るのみであつた。未亡人は生を終るまで喪服を着けて、亡夫の冥福を祈つて貰うため、僧侶

に施物をする時の外は部屋の外に出なかつた。

ローマーニヤにゐる公の臣民、公の百姓、アペナインの谷から來てゐる半ば未開の羊飼ひなどは、公を甚だ徳とじてゐたので、戦死の報を聞いて信を措かず、久しく公の歸來を待つてゐた。ケーザル公は早晚ローマーニヤに歸るに違ひない。歸つて來て此の土に正義を樹て、暴君を放逐し、貧民を恤むに違ひないと固く信じて、神を待つやうに待つてゐた。村々を彷徨する乞食さへ（ヴァランチノア公を悼む歌）を唄つた。其の歌の中に（限りなく計りもしれぬ信もて）といふ句があつた。

レオナルドは斯くの如く二人の上に思ひを馳せた。ルドヴィゴの生涯もケーザルの生涯も共に大事業を成すやうに思はれたが、其の實、影の如くに過ぎ去つて、何等の跡をも残さなかつた。それに比べれば自分の生涯は高き靜思に捧げたゞけに、少しは實生えがあつたかも知れない。

レオナルドは斯く考へ來つて、運命の神のつれなきを歎くを止めた。

三

レオナルドの計畫の大部分は然うであるが、此の度のソローニ掘割の開鑿も亦毫も成就されなかつた。小膽なる顧問官達は該計畫の到底實行されざる事をフランスに説いたので、王は冷淡になつて興味を失ひ、直ちに此の事を忘るゝに至つた。斯くしてレオナルドは、佛蘭西がイル・モロ、ソデリニ、レオ十世と等しく信賴するに足らぬを曉り、此の上は自分の知識の寶を用ゐて人類を益せんとする一切の希望を捨て、餘生を寂寞の裡に過

す決心をした。

千五百十七年の春、彼はクルーの邸に歸つた。其の時、ソローニユの沼澤に發生したる熱病を受けてゐたが漸次快方に起き、夏には元氣附いて部屋を出るやうになり、日々フランチェスコの肩に倚つて森へ行つた。森ではフランチェスコを前に置いて、木の蔭に坐し、或る時は書物を讀ませたり、或る時は平和なる自然の景色と音とを樂しむだけで満足して、空を仰ぎ、木の葉を眺め、石や草や大木の幹にある金色の苔を眺めたりして、凡てこれらの物に最後の告別をするやうに見えた。フランチェスコは何とはなしに或る悲しい預覺を感じて、先生に對する惻隱の情が自分の心を壓迫する餘り、沈黙のまゝレオナルドの手を自分の唇に觸れた。すると自分の頭を悲し氣に撫で、呉れる先生の手はブル／＼顫へてゐるので、先生の上に来るべき運命に對する感じが尙更深くなつた。

此の頃レオナルドは一風變つた畫に着手してゐた。

岩は垂れるやうに上に懸り、花咲ける草間の寒けなる蔭に一體の神が坐してゐる、其の髪は長くして、容姿の美しきこと婦人のやうであるが、氣力衰へて青白く、頭に葡萄の葉の冠を戴き、腰に豹の皮を纏ひ、片手に酒神杖を携へて箕踞し、口邊に微笑を浮べ、耳を傾けて或る音を聞きながら、其の音の來る方に指してゐる。それは酒神の祭司が歌ふものか、或は偉大なる牧神の聲か、孰れとも知れぬが、甲の高い音で、凡て生命あるものはこれを聞くと等しく必然逃げ出すのであつた。

レオナルドはチョーヴァンニの筥の中に、紫水晶のあるのを見たが、それは疑ひもなくカッサンドラから得た物で、酒神ディオニソスの彫りがしてあつた。筥には又ユウリピデスの悲劇(酒神)を原文から譯した斷章があつて、

チョーヴァンニが手寫した物らしく、レオナルドは幾度もこれを讀んだ。就中ベンセウスが或る面識のない神に言ひ掛けた次の語に深い興趣を感じた――

おゝ見識らぬ人よ、御身の容は、

婦人を誘ふに足れば醜しと言ふべからず。

又御身は力を競ふべきにあらず、御身の髪はそを示すに非ずや、

頬に垂れ下る其の髪はあらゆる願欲を荷へるなれ、

用心深きため御身の肌さへ白し、そは美を餌として願欲を漁りしとき、

日の光に打たれずして陰きにをりしかば青ざめたるなり。

それから酒神の祭司が不信心なる王に答へて、酒神ディオニサスを(神の中にて最とも恐ろしく、最とも憐み深く、恍惚の醉を人間に與へ給ふなり)と齊唱したる奉頌の句をもレオナルドは愛誦した。

同じ紙に右にユウリピデスの詩と並んで、聖書から詩篇を寫し取つたのがあつた。

然るにレオナルドは酒神の畫を描きさしにして、更に一層怪奇な別の畫に取り掛つた。それはバプテスマのヨハネを描けるもので、例になく致々として筆を續け、大分抄取つた。其の意蓋し瞑目の目を自ら知ると共に、日體力の衰へを感じし、從來秘して他人に知らせざるは勿論、自分にさへ知らせなかつた神秘は、今を除いては

他にこれを表白する時機が来ないと見極めたやうにも取れた。

晝は甚だ進捗して、結構が明白なるに至つた。背景の暗いのは、彼が嘗て夫人リサに好奇心と恐怖を因として、洞窟の暗黒を説明したのを偲ばせた。但し暗いと言つても烏羽玉の闇のやうではなく、光と混じて、恰ど日光の中に煙が溶け去るやうに、又遠くに響く音楽が震盪して沈黙の中に死するやうに、背景の暗さは光の中に溶けてゐる。そして暗黒と完全なる光との間に一寸見たところでは幽霊のやうに朦朧たる者がゐるがそれが見てゐるうちに性命其の物よりも明白に浮び上るのであつた。それは若き裸體の男子で、顔容は女に彷彿し、誘惑的美を有して、坐ろにベンセウスの語を聯想せしめた。

併し豹の毛皮の代りに駱駝の毛衣を着、酒神杖の代りに十字架を持ち、髪を垂れて微笑し、半分は恐怖を懐きながら、あらゆる期待、あらゆる好奇心を聴くが如くに耳を傾け、片手で十字架を指し、片手で自身を指して、將に唇の上に此の語が動いてゐるやうであつた——

「我の後に來者あり我は其の履帯を解にも足らず。」

四

或る日の午前をフランシス一世は、(王の病氣)てふ綽名ある療癘に關する調べ物に費して、疲勞を覺えたので、不具と疾病とを見てゐた心を轉ずるため、何か美しい物を見たいと望み、それにはレオナルドの畫室を訪れるのが好からうと意を極めて、三四の從者を引き連れ、クルーへ行つた。

其の日レオナルドは朝からヨハネにかゝつてゐた。室は廣くして寒く、牀は煉瓦で登み、高い天井には桷が互つて、日暮れに近い太陽の光線が狭き窓から斜に射し込んだ。レオナルドは薄暗くならぬうちに今日の豫定を終らんものと精々と筆を運んでゐた。其のとき窓下に人の聲と寔言が聞えたので、直ちにメルチに、

「誰にも面會しないから。虛病を遣つて呉れ」と言つた。

フランチェスコは命の儘に室を出て行つた、そして押掛けて來た客を謝絶しようとする、麼は如何に國王陛下なので、恭く敬禮して扉を開けた。レオナルドは來客のある事を豫め知る時は定つてデョーコンダの肖像に蓋をして置く習はしなのに、今は突然の事として、それをする間がなかつた。

フランシス王は室に這入つて來た。其の美々たる服装は寧ろげぼくして、無闇と寶石を飾り、黄金の裝飾を施し、今年取つて二十四歳の男盛り、體格は見事に、背は高く、強壯にして舉止輕快であるが、憾らくは顔の何處かに人を不快がらす點があつて、何となく好色に、狡獪に見え、恰ど半人半山羊の林野の神を聯想させる顔であつた。

拜跪せんとするレオナルドを王は押し禁めて、自分の方から丁寧に會釋して、老畫家を抱擁さへした。

「レオナルド先生、随分暫くでした。お體は如何? 澤山描けますか? 新らしい畫は澤山出來ましたか?

おや、彼處にあるのは何ですか?」と言つて指したのは巾の懸つてゐるリサの肖像であつた。

「古い肖像でございます。一度陛下が御覽遊ばしたもので……」

「いゝえ、構ひません、最う一度見て見よう。先生の畫は見る度に益々感服するのだから。」

レオナルドは躊躇した。するとレオナルドの當惑をも顧みず、一人の廷臣は巾を外した。ラ・チーコンダが現れた。

王は椅子に坐つた儘、久しい間一語をも發せず凝と眺め入つた。そして、

「あゝ實に立派だ」と終に叫んだ。「今迄見た婦人の中でこれが第一の美人だ！ 何者ですか、此の女は？」

「リサと申しまして、フロレンスの市民の夫人でございます。」

「これは近頃の作ですか？」

「十年前でございます。」

「で、今でも斯んなに美しいのですか？」

「陛下、リサは亡くなりました。」

宮廷詩人サン・ジュレーは出酒張つて、

「レオナルド・ダ・ヴィンチ先生は此の肖像を描くに五年もかかりましたが、未だ未成品でございます——否、先生自身では未成品と稱してをりまする。」

「何、これが未成品ですか？」と王は叫んだ。「一體何處が描き足りないのです？ 宛で生きてゐるやうだ——今にも何か言ひさうだ。レオナルド先生は羨しいな、此の女と五年間ゐるなんて……假令死なすにゐても屹度先生は完成できなかったのだ、ハ、ハ、」と王は笑つた。其の笑つた顔は一層林野の神に肖た。リサは妻として忠實な婦人であつたのに、それが王には分らない。

「先生は可なり女性に嗜好があるやうだ」と王は快活に言つた。「まあ彼の肩は何うだ！ あの胸も！ 考へ出せば他に尙だく美しい處があるのだぞ！」

レオナルドは顔色青醒め、牀を見詰めた儘で黙つてゐた。

「斯うまで肖せて描くには美術家以上の人でなくちやならん。だから先生は必ず女性の心にある秘密を悉く測りなされたに相違ないのだ。詰り迷宮ですな、纏れですな、悪魔にさへ不可能な事が先生に出来るのだ。え、と、此の婦人は慎深い質と見えて尼のやうに手を束ねてゐる。が、待てよ、心の中で何を思つてゐるのだからう？ 一つ當て、見ようかな」と言つて、詩の一句（女は甚だ愚かになる事稀ならず）と口誦んだ。

レオナルドは別の畫を明りの方へ向けようとてか傍へ歩み寄つた。するとサン・ジュレーは、此の老畫家が人の心に關して或る趣味を有すといふ世間の取沙汰を王に囁いた。

フランシス王は一才驚いたが、そんな事が！ といふ風に鷹揚に肩を聳やかして、リサの傍らの畫架の上にある未完の畫を顧みた。

「これは何だらう？」

「酒神バックス——と思ひまするが」と詩人は畫中の人物が持てる杖を指して言つた。

「それからこれは？」

「これもバックスのやうに見受けまする」とサン・ジュレーは答へた。

「併し髪と胸の具合は少女のやうだが——うむ、チーコンダと同じ微笑をしてゐるぢやないか？」

『それでは男女両性の人物でござりませう』と詩人は奇抜な事を言つて、プラトーンが説いた原始の男子的女子と愛の情の起原とを説明した。

『でござりますから、レオナルド先生は原始の型に復歸しようと致してをりまする』と嘲るやうに言つた。フランシスは畫家を顧みて、

『先生、予らの疑問を解いて下さい。これはバッカスですか？ 兩性ですか？』
レオナルドは顔を赧めて、

『陛下、これはバプテスマのヨハネでございます。』

王は不審氣に頭を振つた。『神聖』に『不淨』を搗き交ぜた此の畫は神を褻すやうにも思はれたが、それにも拘らず心が牽かれた。冒瀆の如きは左まで關するところではない。總體に畫家たる者は風變りな空想を有つてゐるのだ。それを知らぬ人もあるまい。

で、王は斯う言つた。

『此の兩つの畫を予は買ひます。バッカス——否バッカスではなかつた、ヨハネとリサ・チョーコンダの畫です。値段は如何程ですか？』

畫家は困つたといふ容子をして、

『陛下、二枚とも未だ仕上つてをりませぬ。』

『そんな事は言ひつこなし！ ヨハネは直ぐに仕上るし、リサの方はこれで結構、予がかゝつてこれ以上の手

入れをさせません。兎に角此處で直ぐチョーコンダを欲しいのだから。値段を言つて下さい。何も恐がるには及びません。予は決して値切つたり何かはしないから。』

輕佻にしてガサツな此の人に何の言をか致すべき。此の肖像とこれを描いた自分との間の機微、如何なる價格と雖もこれを手放すを得ざる理由を何として此の人に説明できやうぞ。

『先生は言はない？ それならば予の方から言ひませう。三千クラウン？ 何うですか、三千クラウンでは？ 未だ少い？ では奮發して三千五百クラウン？』

『陛下、申し上げますが……』と畫家は聲を震はせて歎願しにかゝると、

『おつと、分つた！ それではレオナルド先生、四千クラウンだ。』

廷臣達は驚駭の囁きを發した。實際、ロレンゾ・デ・メチチすら斯くの如き高價を畫に附さなかつた。

レオナルドは名狀しがたき當惑を感じて目を擧げた。そして跪いて、生命乞ひをする人のやうに請ひ奉つて、何卒チョーコンダを取り去らぬやうに歎願しようとした。併しフランシス王はこれに感謝の意味に取つて椅子から立上り、此處を去る訣別として再びレオナルドを抱擁した。

『では、これで決りました。價格は四千クラウンとして、何時なりとも先生のお望み次第金は差し上げます。それから畫は明日取りよこします。安心してゐらつしやい、先生、尊敬して此の畫を懸けますから、先生に不満は懷かせません、此の畫の價値は能く予に分つてゐます。予は後世のためにこれを保存して置きますから。』
王が去つてから、レオナルドは椅子に體を埋めてチョーコンダを眺めた。彼の心は先刻起つた事柄を殆ど信じ

兼ねる程であつた。突飛な子供らしい計畫が頭に浮んで来る。此の畫を自分は隠さうか、何んな重い罰を受けても宜いからリサは手放されませんと拒絶するのだ。それともこれをメルチに持たせて伊太利へ逃がさうか——否、メルチでなく私自身で逃げようか知ら。

夜になつた。フランチェスコは幾度か室内を眺めに來たが、敢て口を利かなかつた。レオナルドは依然としてチーコンダの前に坐つてゐる。其の顔は死骸のやうに青白く、死骸のやうに森嚴であつた。

夜中になつて彼はフランチェスコの室へ行つた。

『起きなさい。これから城へ行くのです。何うしても陛下に逢はねばなりません。』

『ですが先生、時刻は遅うござります。先生は疲れてゐらつしやるし、それに力がございませぬ。明日まで待ちませう。』

『可けない、今でなくちや可けない。提灯を點けて一儲に來て下さい。それとも君が厭なら私一人で行くから。』

フランチェスコは起つて着物を着た。兩人は一緒に城の方へ出掛けた。

五

道を歩むに十五分かゝつた。道は峻しく鋪石は悪いので、レオナルドは若きフランチェスコの腕に便つて徐々と歩んだ。夜氣温に、空に星なく、暗さは恰ど漆のやうに木々の枝は風に煽られて苦し氣に搖いた。城の窓には

火が點れて音楽さへ聞える。これは王が深夜に少許の人と共に宴を張つて、淫らな形を彫つてある銀の杯で官女達に酒を飲ませて興じてゐるので、王妹マルゲリットも其の中にある。マルゲリットは(眞珠中の眞珠)と稱せられて、美貌と學識とを以て著聞し、渴仰者連は(王妹殿下に取りては怡樂の術は日々のバンよりも重要なり)など、噂してゐるが、其の實マルゲリットの心は獨り兄のフランシスを除いた外何人に對しても冷淡であつた。然り、彼の女はフランシスを熱愛して、フランシスの弱點は愛嬌のやうに見え、罪惡は力に見え、林野の神の如き面貌はアポロのやうに見えた。フランシスも亦妹の愛情を濫用して、難事と危険とに彼の女を當らしむるのみならず、色の仕事にも其の手を借りたりした。

今、レオナルドの參候と聞いて、王は晚餐の室に請するやうにと吩咐け、妹と共に挨拶に出た。騎士や官女は、半ば尊敬、半ば輕蔑の目を以て、室に入り來るレオナルドを見てゐた。髪を長く垂れ、惘鬱な顔をして、其の動作に神經衰弱を示せる長身の老人は遠き他界から落ちて來たやうに見えた。そして恰ど吹雪の中を歩いて、今此處へ來た人のやうに、一座はぞつと寒氣がした。

『お、レオナルド先生!』と王は例に依つて温かに言つた。『先生は滅多にお出にならない珍客だ。え、と何を先生に差上げよう? 肉を上らない事は承知してゐるし……それでは糖果に果物は如何です?』

『難有うございます。したは何卒それは御免下さりませう。少々陛下にお話し致したうございませうが』

と聞いて、フランシスはレオナルドを傍に延き、マルゲリットも立ち合つて好いかと訊いた。

『拙者のため殿下のお執成しを願ひます』と言つて一禮した。そして兩手を王の方に差し伸べて、

「陛下、先刻陛下がお買上げをお望みになりましたリサ夫人の肖像の件で参りました。」

「併し値段ならば相談が纏まつた筈だが。」

「左様ではござりませぬ、金のために参内した譯ではござりませぬ。」

「では何の用件で？」

「陛下、何卒御不憚を掛けて下さりませ。彼の畫は矢張り拙者の手元に置くやうに願ひまする——はい、拙者が息を取引る迄でございます。」

「陛下、何卒御不憚を掛けて下さりませ。彼の畫は矢張り拙者の手元に置くやうに願ひまする——はい、拙者が息を取引る迄でございます。」

彼は言を止めて歎願するやうにマルゲリットの顔を見た。

王は肩を怒らせて顔を盛めた。

其のとき若き王妹は口を挿んだ。

「陛下、レオナルド先生の願ひは御聽許なさいまし。陛下がそれをしておやりになるだけの理由はレオナルドの方にございます。慈悲を垂れてお遣りなさいまし。」

「これはしたり、マルゲリット、あなたはレオナルドの肩を持つのですか？ は、あ、これは金んだな！ いや、確に金んだわい。金んだく——」

マルゲリットは兄の肩に手を掛けて囁いた——

「陛下は未だお分りになりませんか？ 此の人に未だにデオコンダに未練があるのでございますよ。」

「だつて、死んでゐないのでござい——」

「死んだ者を愛せぬ事はありませんか？ 陛下御自身からがデオコンダは肖像の中に生きてゐると仰有つた

くせに。畫は矢張り元の通りにして置いて、リサの追憶をレオナルドにさせて置いては如何でございます？ 此

の老人を苛めない方が宜しうございますよ。」

フランシスは魂、貞節、野鄙ならざる戀愛が永遠に相結んで解けぬ事を何處かで聞いたが、それを今膝に思ひ

浮べて、妙に寛仁の心が咬り起つた。

「レオナルド先生、でもあなたに結構な執成人が居ましたな。機嫌好くしてゐらつしやい、予は先生のお頼みに應じますから。唯一つ覺えてゐて欲しいのは、あの畫は予の所有だと言ふことです。金は今直ぐ厭でも受取つて貰ひますから。」

レオナルドの目の中に何か知ら求めるやうな、傷ましい容子が見えたので、王はそれを憐れに思つて、慇懃と快活にレオナルドの體を軽く叩いて、

「いや、其の心配は御無用だ。固く先生に誓ひますから！ 誰にだつて、あなたとリサを引き離させはしません！」

マルゲリットは微笑した。其の目は温かに光つた。そして手を畫家の方に差し出した。畫家は熱心に且つ無言のまゝそれに接吻した。

音楽が起つて舞踏は始まつた。そして影の如く入り來つて、再び星なき夜の中へ消え去つた無作法者の事は、最早や何人の頭にも残つてはゐなかつた。

六

王が去ると共にアンボアーズの町は常の如く靜かになつた。レオナルドは引續きヨハネを描いてゐたが、畫が拂取るに連れて一層の困難を覺え、進行は次第に遅々となつた。そして折々夕暮時に、リサの肖像の被ひ物を除けて久しく眺めてから、尋いで其の傍にあるヨハネを見るのであつた。そして何となく兩つの畫を見比べてゐるらしいので、フランチエスコは息を凝らしてこれを見てゐると、リサの顔とヨハネの顔は神秘的に變化するやうに思はれ、且つ幽靈の如く繪布の中から脱けて、これを描いたレオナルドの凝視に會ふとき、常規を絶したる性命を賦與されて、生きてゐるやうにも思はれた。そして恰ど子が其の兩親に似るやうに、ヨハネは夫人リサにもレオナルドにも似てゐた。

併し畫家の健康は漸次に衰へるので、メルチは畫を罷めて安靜するやうにと乞うたが、先生は斷乎として肯かなかつた。千五百十八年の秋、非常に體の悪い日があつて、常よりも早く仕事を切り上げて、フランチエスコに寢室に連れて行くやうにと乞うた。元來梯子段は螺旋形に出來てゐる上に可なり急なため、此の頃は自分一人でこれを昇れないので、此の時もフランチエスコに助けられて、度々立ち止まつて息を入れながら、そろく一段を昇るうち、不意に足がよろけてフランチエスコの兩腕に掴まつた。フランチエスコは急いで老僕を呼んで、

二人で先生を持ち上げて寢室に運んだ。

そして六週間病辱の人となつたが、例により醫療の勧めは一切斥けた。此の度の病氣のために、右の側腹は麻痺し、右の腕は用をなさなくなつた。それでも冬になつて良好の徵を呈したが、回復は依然遅々たるものであつた。彼は元來兩手が利くのであるが、描畫の際は兩手を共に要して、左で構圖し右で描くので、少くとも自分は今斯くの如く兩手を活かす點に於て他の畫家に優つてゐると信じたのに、此の模様では或は畫作はこれ切り駄目かも知れないと心配した。十二月初旬に病牀を離れるやうになり、間もなく階段を下りて畫室に行けるやうになつたが、仕事には取り掛からなかつた。

或る日、晝食後の休憩時刻に、フランチエスコは二階中を捜し廻つても先生がゐなかつたので、密と注意して畫室の扉を開けて見た。これといふのも近頃先生は益々人を近づけなくなつて、多くは自分獨りで時間を過し、自分から物事を吩咐けない限り、何人と雖も猥に室内に這入るのを許さぬからで、今しフランチエスコは半開きの扉の間から覗いて見ると、先生はヨハネの前に立つて、動かぬ手で無理に筆を執らうとしてゐた。強ひて畫筆を運ばうとする苦しみのために顔は蹙まり、唇はへの字になつて、眉は寄り、灰色の髪は額の上に懸かつて汗に濡れた、而も指は言ふ事を肯かない。恰ど不器用な初心の人が經驗するやうに、畫筆は此の大家の手に握られてブルく震うてゐる。フランチエスコは息を殺して、生ける魂と死に瀕しつゝある體との最後の争ひを見てゐた。

七

此の年の冬は寒さ甚だ厳しかつた。浮氷のためにロアールの橋は破壊され、道路に凍死人を生ずるに至り、狼は町の端に来て、レオナルドの邸の窓下を徘徊した。或る朝フランチェスコは、張出し椽に半ば凍死せる燕のるのを附けて、これをレオナルドに見せた。レオナルドは息を吹き掛けて燕を蘇生させ、籠の中に入れて爐邊に置き、春になつたら放さうと思つてゐた。彼は最早や書を試みるでもなく、描きさしのヨハネ、畫筆、繪具などを一切畫室の極く暗い隅に隠させ、日々懶惰の裡に暮らした。折々町の公證人が来て、今年の刈入の事、鹽稅の事、ラングドックの羊とリムーザンの羊との優劣の話などをした。それからフランチェスコの懺悔を聴くグリエルモ師も時々来た。師は伊太利の人であるが、久しくアンボアーズに住して、氣の面白い醇朴な老人で、自分の若い頃のフロレンスに關する話をしてレオナルドを笑はせたりした。

冬の日の夕暮は早く追つて客人は暇を告げる。するとレオナルドは數時間續けて室内を歩む事があつた。そして狭い中の彼方此方を歩みながら、時々アストロの方を顧みた。此の寒は以前に増して自分に取つて生ける非難と思はれ、人類のために翼を作るといふ自分の一生の大目的に對する嘲弄のやうに見えた。アストロは隅に坐して、兩足を垂れ、長きリンネルの巾を枕に巻いたり、或は木を削つて杖を拵へたり、獨樂を作つたり、或は目を瞬いて徐ろに體を搖つて、微笑しながら、相も變らず彼の唄を歌つたりした――

ククルルクルル、

小わしと鶴は、

舞ひあがる……

兎角するうちに日は全く暮れて家の上に沈黙が降つて来る、家の外の老樹は風のためにキーキー吼える、其の吼える音は悪事を働く大入道の唸り聲に似て居る。森の外に方つて、狼の咆哮が恐ろしく耳に響く。フランチェスコは爐に薪を投れてレオナルドを火の傍に坐らせ、非常に陽氣に歌を唱ひながら琵琶を弾いて、先生の憂鬱を消すに努めた。昔、フロレンスの大ロレンツォが（バックラスとアリアドネの假面劇）のために作つた歌を唄つて聞かせたりした。これはレオナルドが若い頃から知つてゐて好きな歌であつた。

美しい乙女はいつまでか

にけてあるぞ、樂しげく

生きんとならば、今そこに

明日の事は計られじものを

先生は非常に感動してこれを聞いた。聞く間にフロレンスの夏の夜や暗き物影、寂莫たる往來を照らす明月、

大理石の樓臺から來る琵琶の音、綿々たる戀の歌などが次ぎから次ぎへと胸に浮ぶ。同時にチヨルコンダの思ひ出も湧く。老翁の前に坐せるフランチェスコは顔を上げて見ると、其の衰へた目から涙が落ちてゐた。時々レオナルドは古い日記を讀んだり、又其の中に書き入れたりする事もあつた。彼が今主として潜心せる題目は『死』であつた。

「人よ、汝の國土に歸らんとする希望、汝の舊生涯に入らんとする願望は、宛も火を取らんとする蛾の望みに同じきを知らん。汝の望みは常に已む事なく、歡喜を求むるに惟れ急に、斷へず新なる春を待ち、自ら其の願ひの徐々に果されつゝありと思惟せるも、然かも焉ぞ知らんこは實に自己の破壊と終滅とを切望するに外ならざるを。されど斯くの如き期待は自然の精核にして一切元素の氣魄たるもの、人間の靈に宿りて、肉體を脱し、これが創造者たる神に還らんとする也。」

「自然界に存するものは力と運動とのみ。然り而して力は幸福の意思にして宇宙を永遠に推進して以て終焉の均衡と原動力とに到らしめんとするものなり。」

「夫れ部分は不完全たる事を免れんがために全體に合一せんと欲するもの也。」

「一日を善用すれば甘夢を得ると等しく、生涯を善用すれば幸福なる死を得べし。」

「凡て心に苦痛を残さざる凶事とは一も有る莫し、唯最大の凶事たる死のみはこれに異れり、蓋し死は生涯と共に記憶を滅ぼすが故に。」

「余は生きん事を探ねつゝありと思ひしとき、そは實に如何にして死すべきかを探ねたりし也。」

「自然の外的必要は理性の外的必要と相通ず。即ち一切は理性的なり、一切は善なり、何となれば一切は必要なるが故也。」

斯くして彼の理性は力の源の意思たる死を是認しながら、心の底には或る物がこれに反抗してゐた。

或るとき自分は生きながら棺に這入つて土の中に埋められてゐたのが、不圖、目覺めてそれと氣が附いた、そこで死物狂ひに決心して呼吸をなさんと喘ぎながら、一生懸命に棺の蓋を持ち上げようとした——併しこれは夢であつた。

其の翌朝、自分の希望をフランチェスコに述べて、自分の死後、體に腐敗の徴候が現れない間は、地下に埋めないで呉れと言つた。實際レオナルドは、依然盲目的、非理性的に生を執愛して、これに獅嚙み付き、死を見ること暗黒なる坑の如く甚だ恐れた。そして今日でなければ明日、自分は此の上もなき恐怖の叫びを發して、坑の中へ陥るかも知れないと戦慄した。肉體壊滅の事に思ひ到るとき、理性のあらゆる慰藉も、聖なる必然と力の源の意思に關する自分の所言も、悉く煙の如く消失させた。自分の名が不朽に傳はつたとてそれが何になる！換へられるものなら地の日光の一筋にそれを換へたい。陽春の一浮動、伸び展がる木の葉の匂ひ、幸福な幼年時代を過したアルパノ山に生うる黄色の花の一朵に換へたい！

夜、眠れないとき、フランチェスコに福音書を讀んで貰つた。今の彼に取りて福音書は甚だ新らしき物のやうに思はれた。これほど卓絶せる物は稀なのに、又これくらゐ解する人の少い物はないとさへ感じた。或る語の如きは意味を咀嚼するに従つて泉の如く深くなつた。

福音書に曰く、主たる爾の神を試む可らずと。こは實に自分が終生の問題とせる「人は翼を有せざるか？」の答案ではないか？

又曰く、悪魔この誘試を畢つて暫く彼を離れたりと。こは何を意味するか？ さらば悪魔は何時彼に戻り來るのか？

此の語は最大なる錯誤に満ちて、經驗と自然律とに反せるものと思つてゐたのに、然かも尙ほ自分はこれを抗拒できない。

又曰く、爾に一粒のからし種ほどの信仰あらば爾山に向て此處よりかの場所に動けと云ふもそは動くべしと。自分は常に斯う考へてゐる、知識と信仰とは互に道を異にしなから最後は同一の目的地に到るのだ、外的必要と内的必要、人の意思と神の意思との混一に到るのだと。然も事實として、一粒のからし種の如き信仰を有する事は山を動かすよりも更に難いのであるから、此の語の中に一味の辛辣がありはしないか？

然かも更に謎語に似てゐるのは、父よ我れ爾に謝す爾はこれらの物を賢人と細心なる人にと匿して小兒に顯したまへり、といふ基督の語である。これと、蛇の如く賢かれといふ命令とは、何うして調和するののか？

又曰く、野の百合花は如何して長つかを思へ勞めす紡がざる也、然れば何を食ひ何を飲まんと思ひ煩ふ勿れ、此皆異邦人の求むる者なり爾曹の天の父も凡て此等のもの、必需ことを知りたまへりと。

レオナルドは自分の發見と發明と、並びに自然を支配すべき力を人類に與へる器械とを胸中に喚び起して自ら問うた。

「此の注意即ち何を食ひ何を飲まんと思ひ煩ふ事、其の他にこれに類する事柄——これは身體に就ての心配即ち——マンモン崇拜の事を言つたのか？ 人の努力、人の知識には、單に功利を除いた外に何もないのか？ マリヤの妹のマルタは多數の事柄に注意し煩慮しながら、必要なる物にそれをしなかつたが、さらば知識はマルタの如きものか？ それに反してマリヤは善き方を選んで主の御前に坐したが、愛は此のマリヤと等しいのか？ 知識と誘惑との分離し難き事をレオナルドは經驗によつて知つてゐた。

八

死に瀕しつゝあるレオナルドは既に暗い恐ろしい坑に面してゐた、今日でなければ明日、自分も亦最後の絶望の聲を放つて、わが神、わが神、なんぞ我を遺たまふ乎」と叫びながら、此の坑の中へ落ちねばならない！

時々朝の間にレオナルドは霜の白い窓から深く積れる雪、灰色の空、凍つた水を眺めて、冬の盡きる期はないのだと思ふ事があつた。併し二月には早や一道の温みが訪れて、家々の日光に當る側の氷柱よりは点滴の音騒がしく、鶯の雀さへ囀り始めた。木々に雪融けがして、其の跡に黒い輪を遺すのも面白く、芽がそろ／＼生え出して、雲の間から青空の縞が見えた。フランチエスコは先生の椅子を日の照る窓際に置いた。すると老翁は首を垂れ、瘦せた手を膝の上に置いて、數時間靜肅に坐してゐた。最初の霜から救ひ取られた燕は、此の頃室内をぐるぐる翔つて、時々レオナルドの肩に止まつたり、手に持たれたり、頭に接吻させたりしてゐたが、不意に飛び上つて、宛ら春の匂ひを嗅いだやうに待ち詫し氣に啼いて、再び天井の周圍を飛んだ。其の柔い體の旋廻と翼の運

動との一つだも、レオナルドは見逃さなかつた。そして人類のために翼を作るといふ以前の考へは又もや心に動いた。

或る日大きな箱を開いて見た。箱の中には原稿の儘である書籍を初めとして、主として機械に關して折々書いた畫の類、下圖の類、二百冊の(自然篇)から抜き書した物などが這入つてゐた。此の渾沌を順序正しくし、斷章をも類別して全然一つに纏めた上、一冊の大書籍(宇宙篇)を作るのが自分の一生の願ひであつた。自分の後に來る人々の勞力を甚だ少くする思想と發見とが、此の中にある事を彼は知つてゐた。又餘りに延ばし過ぎてゐた、め、今は既に完成の時機を逸した事、自分の播いた種は果實を結ばなかつた事、そして自分の科學的材料すら悉く烏有に歸して、(最後の聖餐)や、騎馬像や、(アンギアリの役)と同一轍を履むに至るべき事をも知つてゐた。そして美術と同様、科學に於ける自分の願望には唯一つ翼が缺けてゐた、ために單に着手だけに止まつて、完成を見ざるは勿論、一事すら成就できなかつた。自分の發見に係る事柄は必ず後の人が求めるに相違ない。自分が既に見出して置いた物を彼等は新に見出さんとして雷に自分の歩んだ道を歩むのみならず、實に自分の足跡をさへ踏むであらうが、然も自分を素通りして、宛もレオナルド・ダ・ヴィンチなる者が生存してゐなかつたやうに自分を忘却するに至るべき事を豫想した。

それから外に向だ表題に(鳥類)と記せる一冊の原稿が箱の中にあつて、随分年數を経た、紙は黄色くなつてゐた。近頃レオナルドは時々飛行機の事を思はぬではないが、左りとてこれがために深く潛心する事がなかつたのに、それが人に馴れた燕の翔ぶのを凝視してから或る新しい考へが浮かんで、早くも新しい設計が完全

に心の中で出来上つたので、これを最後の企てとして天晴れ物にして見ようと決心した。人間のために翼を製作して最後の成功を掴めば、永の間費し來つた勞力は初めて意味を有するのだ——と斯んな空な希望に自分と自分を激勵した。

そしてヨハネの時と同一の決心を固め、同一の熱烈なる焦燥を以て新に仕事に着手して、死の瞑想を擲ち、神身の衰弱を更に意に介せず、食を忘れて、終日終夜坐つた切り、計算し描圖する事幾日か續いた。フランチェスコはこれを見て、先生は仕事をしてゐるのではなく、病的になつた心が人事不省に陥つてゐるのだと思つた。そして益々驚愕しながら、意思の絶望的奮力のため、將た不可能事を劇しく希求するがために、如何に先生の顔が蹙まつて歪むかを見てゐた。實に不可能事の追求は罰を蒙るべきものであつた！

其の週間は無事に過ぎ去つた。フランチェスコは暫くも師の傍を去らず又眠りもしなかつたが、遂に或る夜、死の如き疲勞に襲はれて、爐の傍の椅子の上に身を投げた儘、うとく眠りに入つた。頓て灰色の朝が窓から這入るし、燕は目をさまして囁つた。レオナルドは相變らず机に向つてペンを手にしながら、非常に俛首して顔が殆ど紙に附かへさうになつてゐた。と、不意に、不思議な戦慄を感じて、ペスが落ち頭も落ちた。そして一生懸命に起たうとして、フランチェスコを呼んだが併し聲が出ない。足が不甲斐なく踰越して、體の全重量がグシンと机の上に當つた。机は重みを受けて引つくり返つた。此の音にメルチは目を覺ました。メルチは吃驚して跳び上つた。見れば先生は牀の上に倒れてゐる。蠟燭は消え、紙片は散亂し、燕は恐怖して天井の桷を翼で叩いてゐる。あゝ先生は二度の打撃に見舞はれた——とメルチは考へた。

レオナルドは意識を失つて横臥する事数日、時々讒言を言ふのを聞けば、それは凡て數學に關する事のみであつた。頓て正氣に復つたが、正氣に復ると直ぐ飛行機の下圖を呉れと言つた。

「それは可けません、先生。他の事なら何なりと命じて下さい。幾らか回復なさらない間は仕事して貰はれません。」

「下圖は何處へやつたのだ？」と先生は慍つて訊いた。

「あれは皆屋根部屋へ入れて錠を下ろして置きました。」

「では其の錠を呉れ。」

「可けませんつたら。錠を持つて何になさいます？」

「こら、今直ぐ寄せと云ふのに！」

それでもフランチェスコは躊躇した。先生の目は憤怒に燃えた。そこで病人を焦立たせては好くないと反省して錠を渡した。其の錠をレオナルドは枕の下に入れて、これで安心だといふ容子をした。此の事あつて後、レオナルドは豫想よりも迅く快方に赴いた。そして四月の初めにはグリエルモ師と將棋を指す迄になつた。

一夜フランチェスコは常の如く先生の傍のベンチの上に眠つてゐたが、不圖氣が附くと、先生の例の重い息の音が聞えない。彼はと驚いて跳ね起きた。寢燈は消えてゐるので大急ぎで燈して見ると、病人の寢床は蕩脱けの空になつてゐる。そこで下男のヴィルラニスを起して、共に二階中の部屋を捜し廻つたが先生はゐなかつた。それではと階下へ行かうとする途端、不圖、飛行機の下圖を屋根部屋に隠して置いた事を思ひ出して、急いで其の

方へ行くと、果して扉の錠は開けてあつた。そして先生はしどけない風をして、ベタリと牀の上に坐し、古箱を机代りに使つて、蠟燭の光を便りに何か書きながら、讒言を言ふやうに口早に呟いてゐる。目は燃え、髪は絡まり、強く眉を擧めて、締りなき口はおち込み、全體の容子は魂消るくらゐ變つてゐるので、フランチェスコは暫時中へ這入る事が出来なかつた。

と、出し抜けに、先生は鉛筆を取ると等しくウンと力を入れて、圖形の紙の上を横に棒を引いた。鉛筆はボキリと折れた。そして周圍を見廻してフランチェスコが目に入つたので、牀から起ち上つてよろしくと此方へ來た。「フランチェスコ、此の仕事は直ぐに片附けると君に言つたが、これで最うお仕舞になつたのだ」と躁急に且つ苦々し氣に言つた。だから君は最早や心配するに及びません。仕事なんかこれ切りしないんだから。最う〜これで澤山だ。年取つたものだから私は随分野呂馬になつた、アストロロよりも尙だ野呂馬なんだ。最う何もかも知つちやらないんだ。知つてゐた事は皆んな忘れたのだ。翼の事を考へるなんて馬鹿けてゐる。それが私のする事かい！ 翼も悪魔にやつちまへー！」

そして矢庭に紙を引つ擱んで、憤怒の餘り引き裂いて、足の下に踏みしだいた。

其の日以来レオナルドは一段と悪くなつて再び牀の中に這入つた。それを見てフランチェスコは、先生はこれ最う牀から出ないのだと思つた。幾日も昏睡状態が續いた。

フランチェスコは元來信心深い質で、教會の教へる事は其の儘に受けて、少しの疑ひも挾まなかつた。レオナルドの弟子中、彼の(邪惡なる妖法)に魅られず、先生の(悪るき目)に犯されない者は獨りフランチェスコのみで

あつた。レオナルドは教會の儀式を守らない人であるが、それにも拘らず此の若き弟子は自然に動く愛の本能に教へられて、先生は決して不信心な人でないと見てゐた。勿論此の偉人の意見を叩いて更に深く觀察した譯ではないが、兎に角先生が世間の誤解を受けた儘を解かすに他界に行く事を思ひ、恐らく異端の徒と目された儘で瞑目する事を考へると、自分の敬虔な心に取つてそれは一廉の苦痛であつた。去り連先生を憚つてこれを打ち附けに話す事が出来なかつたが、然かも先生を救ふためには此の微軀を效すも惜くないとまで思ひ詰めた。

或る夜、フランチェスコは心配さうな顔をしてゐるので、レオナルドは何を考へてゐるのかと訊いた。するとフランチェスコは稍どぎまぎして、

『いゝえ……あの何です……今朝グリエルモさんが入らつしやいまして、先生にお目に掛かりたいとの事でしたが、私はそれは可けますまいと言つたのです……』

レオナルドはフランチェスコの顔を眺めて敏くも其處に驚駭と懇願と希望とが打ち混つてゐるのを看取した。

『フランチェスコ、其の事を君は思つてゐたのではありません。何故有體に私に話さないのです？』

と言はれてフランチェスコは俯向いた。レオナルドは意の在る處を了解したので、側を向いて聲立てた。

彼は常に些の遺憾なき自由を以て生き、自ら信する限りの眞理を以て生きてゐる如く、此の世を辭する際にあつても爾くありたいと望んでゐるが、併しフランチェスコの心情を察すれば、これも亦不憚に思はれる。自分は臨終に際して迄、此の純朴なる青年の心を奈何でか惱まさうぞ、奈何で此の(若き者)の一人に再び氣持ち悪き思ひをさせようぞ！

斯う思つて更に弟子の顔を眺めて、自分の使へなくなつた手を弟子の手の上に載せて、靜かに微笑して言つた

『ではグリエルモさんに使ひをやつて明朝来るやうに言つて下さい、私は懺悔を述べて聖餐を拜領するから。』

それから其の序手に公證人のギョームさんも呼んで下さい。』

フランチェスコは其の返答をせずに、熱烈なる感謝を以て先生の手に接吻した。

九

明くれば四月二十三日、復活祭なる大齋中の土曜に當る日であつた。公證人は朝の間に來たので、レオナルドは此の世の最後の志望を述べた、即ち四百フロリンを二人の弟に贈つて和解の印となし、フランチェスコ・メルチには書籍、理學機械、諸種器具、原稿、國庫からなほ受くべき俸給の殘額とを與へ、僕のバッチスタ・ヴィルラニスには家財とミランの郊外にある葡萄畑を半分、弟子アンドレア・サライノには其の残り、マツリーナには質の善い黒絹の着物、毛皮で縁をとつてある巾の帽子、それに金貨ニツカットを與へる事にして、メルチに遺言執行と葬式の取り極めとを委ねた。そこでフランチェスコは先生があらぬ非難を受けてゐるから、萬事世人の意表に出づる處置を執つて、先生は眞に羅馬教會の一子として瞑したのだと、明白世間に示したいと乞うた。レオナルドは凡て彼の發議を容れた。

間もなくグリエルモ師は臨終の聖餐を携へて來て、レオナルドは懺悔を述べた。フランチェスコに語つた師の

先

言を假りて言へば、レオナルドは(教會の儀式通りに)聖餐を受領して、(全然神意に適つてゐた)で、世人はレオナルド先生を何と誹らうとも、自分は(心の清き者は福なり其人は神を見ること得べければ也)てふ主の御言葉に依りて、レオナルドの正しい事を主張するとさへ言つた。

其の一日、レオナルドは呼吸切迫して苦しんだが、幸ひに其の夜は生命に故障なく、復活祭の日曜日の朝は少し許り樂に見えた。

覺

フランチェスコは窓を開いた。鳩が青空を飛んでゐる。飛ぶ翼の音は復活祭の鐘の美はしい諧音に混じた。

瀕死のレオナルドは身邊に起る事柄を見もせず聞きもしなかつた。唯、非常に重い物が體の上に落ちて来て、ぐるぐる轉がつて、自分を押し潰さうとするので、一生懸命にこれを退けて、大きな翼に乗つて、天邊に向つて飛ばうとする。すると又重い物がズシンと落ちる。併し再びそれに勝つ。そんな事が頻なしに續いて起る、そして一度は一度毎に重量が増して、これを跳ね退けんとする争ひは次第に劇烈になつた。到頭彼は争ふのを罷めて、聲高く失望の叫びを放つた。

そして諦めを附けて敗けてしまつた。が、それと同時に、重みと翼、墜落と飛翔、上と下とは畢竟同一であると直覺した。恰も母の腕に抱かれてゐるやうに温かに永遠の運動の波に運ばれてゐる事を曉つた。

それから後レオナルドの身體は幾日か生きてゐたが、意識は永久に復らなかつた。五月二日の朝、レオナルドの氣息の弱り行くのがフランチェスコにもグリエルモ師にも分つたので、師は(死者の爲にする祈禱)を誦するし、フランチェスコはそれから少し後に目を瞑らせた。

死者の顔は殆ど變りがなく、存命中往々見受けたやうに、深い靜かな注意力が現れてゐた。

フランチェスコは窓を開け放つて、老僕ヴィルラニス、老婢マツリーナと共に主人の死骸に最後の勤めを執り行つた。其の時不意に、此の頃人の念頭に忘れられてゐたあの燕が部屋に飛び這入つて、亡骸の上をぐるぐる廻つて合掌せる手の上に止まつた。

レオナルド・ダ・ヴィンチは聖フロレンス寺に葬られた。併し墓の所在は今精確には分らない。

フランチェスコは故人の兩弟に手紙を送つて斯く記した――

小生には父以上の方に御座候故此度御長逝に遭候て受申候悲哀は茲に縷述難致候小生は生命の候半限御弔可仕候誠に亡師は甚深く小生を愛被下候世界は大自然が復と産難き偉人を喪たる事に候故萬人擧て哀哭可致候

あはれ全能の神願はくは永遠の平和を師に寄せ給はん事を

後 叙

丁度レオナルド・ダ・ヴィンチが歿した當時、名をユーチキウスと稱する露西亞の年少の廷臣が大使カラキアロフの一行に加はつて、アンボアーズに來た事があつた。此の町に來るのはこれで二度目で、此の度は佛蘭西國王に献上する目的を以て、黄金の禮物と極めて高價なる波斯産の鷹數羽とを携へてゐた。そして茲に來る途すがらフロレンスに立ち寄つて、デオットの鐘樓にある浮彫像、即ち蠟の翼が飛んでゐるデーダルスを一見した。此の像こそ、レオナルドが未だ少年の頃、人類のために翼を作るてふ考へを初めて得た緣因ある物であるが、それとも知らぬ若き露西亞人は單に興味を感じるが儘、乏しい時間の中で娛しみに任せて、(翼ある先驅)の宗教染みた小像を寫し取りながら、恐らくはデーダルスが悪鬼の力を假りて作つた物質的の翼と、現身の天使、即ち基督の先驅たるバプテスマのヨハネにある靈的の翼(純なる心のみが此の翼で神の御前に至り得る)と、此の兩者の間に存する對照をば、空漠として半ば預言的なる恐怖を抱いて瞑思してゐた。

或る日は、アンボアーズで物故したる畫家レオナルド・ダ・ヴィンチのクルー邸を訪れる許可を得た。一行を迎へた人はフランチェスコ・メルチで彼は人々を亡師の畫室に案内して室内にあるあらゆる物を縦覽に供した。其處には奇妙な器具、音の法則を研究する器械、視力を實驗すべき水晶製の大眼球、潜水機、解剖圖、戰爭器械の圖面等があつて、孰れも取りふくに興味を覺えたが、就中ユーチキウスが、最も注意を惹いたのは一枚の破れた翼で、それは恰と燕の翅を大きくしたのに似てゐた。そしてメルチからこれが由來と目的とを聞いたとき、サント・マリヤ・デル・フィオレ寺の大理石塔にあるデーダルスの事を思ひ寄せて、何となく奇異な考へが胸中に生じた。

尋いで亡き畫家の描いたといふバプテスマのヨハネの前に立つたが、流石に此の畫には惑はざるを得なかつた。先驅たるヨハネは、手に十字架を携へ、身に駱駝の毛衣を着てはゐるが、然かも顔は婦人に似て、聖像の畫に見る彼の翼ある先驅とは異つてゐた。併しそれにも拘らず人に與へる魅力は否むべくもなかつた。美妙な微笑を含んで、ゴルゴタの十字架を指せるヨハネは果して何を意味してゐるのか？

ユーチキウスは金縛りにかゝつたやうに立つて、一行の人達の批評に、殆んど耳を傾けなかつた。彼等は言つてゐた――

「これは何だらう？ 裸體で、髯のない。如何にも弱さうな若者ぢやないか。斯んな奴が先驅だつて？ 先驅は先驅でも基督の先驅ぢやないんだ、屹度非基督の先驅なんだ！」

ユーチキウスは格別氣を留めずにこれを聞いてゐた。そして其處を離れても、顔容は女性のやうに美しく、總とせる髪はチオニサスに似、手で十字架を指して居る、翼なき神秘な姿が尙ほ幻のやうに眼前にちらついたので、

そして畫を翫ぶ露西亞の若き廷臣は、鳩小屋に隣れる屋根部屋に宿を借りて、其處の屋根窓の凹處を自分の仕事場に宛てた。

蓋し彼はバプテスマのヨハネを描くに忙しかつた。尤も畫は大部分出來上つてゐるので、聖徒ヨハネは日に燦けて赭色せる岡の上に立ち、岡は地球の縁のやうに圓く、紫の海に濱して蒼旻これを蔽うてゐる。ヨハネが手にせる一つの首(これはヨハネの顔に瓜二つであるが、併し何處か知ら死者の首のやうに見えた)は、筆者ユーチキウスの深意の存するところで、凡そ人にして自己の裡に有する人間の分子を殲滅すれば、能く人間の飛行以上の或る高所に達し得る事を示してゐた。ヨハネの奇異なる顔は見るからに恐ろしく、鷲の如き目をして、太陽を凝視し、髪と髯は疾風に靡き、衣服は鳥の羽毛に似、手足は長くして異様に輕捷なる印象を與へる。肩には白鳥の如き大なる翼があつて、黄褐色の土と紫の海との上に擴がつてゐる。

彼は今夜の仕事は翼の内側に金を塗るくらゐの事であるのに、兎角注意が散漫して、デーダルスとレオナルドとの事が頭に襲つて來る。そして巨匠が最後に描いた畫中の翼なき若者の顔を思ひ出して、自分の描いた翼あるヨハネの顔が彼に比して遜色ある事に氣附いた。すると手は重くなつて定まりを失ひ畫筆は落ち、力脱けがした。そこで室を出て沈黙たる河の堤を數時間彷徨した。

日は沈んで、緑の白ばめる空に夕の星は水中に映じた。併し東の方に雲が湧いて、夏の電光は火の翼の搖ぐが如く大空で打ち顛うた。

それから宿に歸つて聖母像のランプに火を點じて牀に這入つた。併し何うしても寐附かれないので、數時間續け様に宛ら熱病患者のやうに戰慄して、牀の中で輾轉した。何うやら森と更けたる中に怪しい音がサラ〜と鳴つたり、小さな嘔きが來るやうな氣がする。露西亞の不思議な口碑も思ひ浮ぶ。

で、疲れてはゐるが、眠られぬ儘に讀書でもしようと思つて、手當り任せに書物を一册取り出した。そして其の中の(バビロン王國の冠)と題して、神が露西亞の國に全世界の主權を握るべき運命を與へたといふ傳説を讀む事にした。これは汎く露西亞人の知つてゐる話であつた。それから一枚捲つて(白頭巾)といふ話を讀んだ。

それは昔コンスタンチン帝が、法王シルヴェスターから基督教の信仰を授かつて、罪の免除を得たので、一個の王冠を法王に贈らうと思つた。すると其のとき天使が現はれて、地上に權威ある冠ではなく、精神的に權威ある冠……即ち僧侶の帽に類似せる白頭巾を、法王に贈らせた。然かも羅馬教會は、精神上の權力和等しく、俗世の權力をも請求したので、天使は法王に現はれて、其の白頭巾をコンスタンチノープルの教長フィロセウスに呈すべきことを命じた。で、フィロセウスはそれを手元に止めて置かうと思つてゐるうちに、コンスタンチン帝と、シルヴェスター法王とが夢の中に現はれて、件の頭巾を直ぐ露西亞の大ノヴゴロドに送れと吩咐けた。

夢の中で法王は其の理由を下の如く教長に説明した――

『これを言ふ所以は、第一の羅馬はあの通り驕誇のため又我執のために滅びたし、第二の羅馬たるコンスタンチノープルとても異端の憤怒を買つて將に滅びさうぢや。獨り第三の羅馬たるべき露西亞には早や聖靈の光りは照り輝いてゐるし、それに一切基督教の國民は、最後には正統派の信仰の下にあつて、露西亞の領内に結合するからぢや。』

ユーチキウスはこれらの話を讀むたび、茫漠として涯りなき希望が魂に満ちて、恰も懸崖の端に立つてゐるやうに、心臓は鼓動し、呼吸は切迫した。蓋しバビロニヤ王國の傳説は、自分の生國たる露西亞が地上に占むべき

偉大さを預言し、白頭巾の傳説は天の光榮に浴すべき事を預言せるものとしか思はれなかつた。であるから現在の露西亞は他國に比して如何に貧しく、如何に憐むべきものにもせよ、第三の羅馬、新シオンたる事は依然として變らない。見よ、聖ソフィア（これはこれ希臘語原の神智を稱せるもの）の露西亞教會にある十七の黄金の丸天井に朝曦の輝く盛運を！

然かもユーチキウスは自問せざるを得なかつた——白頭巾即ち最も神聖なる第三羅馬はネブカドネザルの惡むべき王冠と如何にして結合するのか？ 彼ネブカドネザルは神に呪詛された者、其の都バビロンは默示録中で呪ひを受けてゐるではないか？ 若き畫家は頻に、此の謎を解かうと努めて、熱せる腦の中は奇妙な幻を浮かべたりした。

そして眠に入つたが自分も亦一つの夢を見た——

一人の婦が光り輝く衣を着、顔は焰に燃え、火の炎々たる翅を有して日月を踏まへ、走り行く雲の中に立ち、又頭上には七つの柱ある禮拜堂が見えて次ぎの銘があつた——

（智慧は此の婦のために一堂を建立せり。）

そして婦は預言者に圍まれ教長に圍まれ、聖徒、天使、帝王、君主、其の他權力を有する者並びに天のあらゆる侶輩に圍まれ、そして此の婦即ち（智慧）の直ぐ足下にゐる預言者の中にはヨハネもゐた。ヨハネは其の聖像

に見るが如き白色の翼を有してゐるが、然かも其の顔は人類のために翼の製作を夢想したるレオナルド・ダ・ヴィンチの顔であつた。そして婦の後ろには無數の教會堂があつて、金の圓頂屋と尖閣とは紺青の空の中で赤々と輝き、其の向ふの方、光榮ある無限の國土は、確かに我が露西亞であるとユーチキウスは知つた。方々の鐘樓からは凱旋の轟音が鳴り渡り、天使は勝利の慶歌を歌ひ、七人の天使長は鼓翼し、上に天は開けて、天國の被り物たる白頭巾は宛ら太陽のやうに煌々として恐ろしく露西亞の國土を照らした。

*

ユーチキウスは目が覺めて窓を開けた。雨に濡れた木の葉や草葉の匂ひが漂ひ來る。朝日は未だ上らないが、森の上、河の上、野の上の天の接する邊に、紫磨黄金がほんのりと溶けて其の上り來る見當を示してゐる。小邑アンボアースは曉夢未だ破れず、獨り聖ユーベルの鐘樓のみは薄白い綠色に光つてゐる。曉の静寂は大なる期待を孕みて、遠くロアールの沙岸に白鳥が啼く。

と、不意に、赤い炭團の如き太陽が森の後ろに照り始めた。同時に音樂に似た物音が天と地とを横に過ぎ去つた。鳩は翼を動かしてバツと圓形に翔ち上つた。そして日は窓から這入つて、先驅たるヨハネの畫像の上を一杯に射し、陸と海との上に擴がる翼は朝の光りに閃々と輝いて、宛ら自然を絶したる性命を示せるやうに見えた。

ユーチキウスは筆を朱に浸し、聖像の上、翼ある先驅の下の巻物に次ぎの語を書いた。

（見よ、我れは我が面前に使者を遣さん、さらば使者は前に立ちて、我が道を拓くべし。）——（をばり）——

爾なんぢは爾なんぢ自身じしんの神かみ且かつつ爾なんぢ自身じしんの隣りんじん人ひとなり、
宜よろしく爾なんぢ自身じしんの創造きうぞう者しゃたれ、
上うへにあつて深淵しんえん下しもにあつては海底かいていたれ、
爾なんぢ自身じしんの終局しゆうきよくにして同時どうじに創始きうしたれ、

大正十四年九月二十日印 刷
大正十四年九月廿五日改版發行

先 覺

【非賣品】

(岡山製本)

著 作 權 所 有

編輯者兼
發行者

國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴 田 久 作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者

横 山 幸 七
東京市麴町區元園町二丁目九番地

印刷所

朝 日 印 刷 所
東京市麴町區元園町二丁目九番地

發行所

電話大手 三八八番
振替東京 一八五七二番

國民文庫刊行會

終